星の金

K2A-28
Z32-B88

国立国会
8. 3. 26
図書館

第九號　九月号　第六卷

大正十一年六月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

大正十三年九月七日内務省　大正十三年八月八日發行

味のオーゲストラで
舌のダンス

（獨逸國 Max Bittrof……Frankfurt 豐伯擬音）

滋強飲料

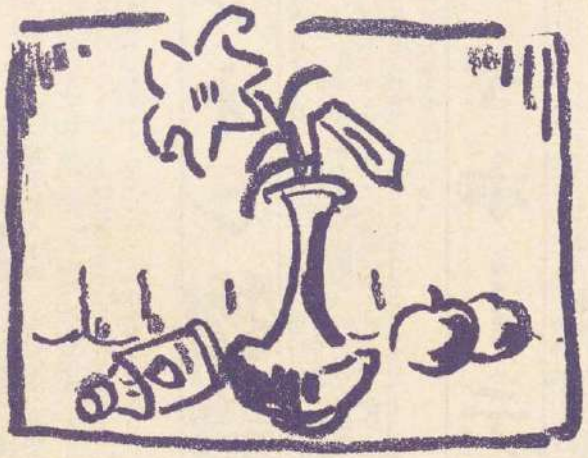
カルピス

酒店・食料品店・藥店にあり

よい繪をかくには
よい繪具を

王様クレイヨン
キングクレイヨン
王様水彩繪具

最寄の文具店にて品切の節は直接發賣元へ御申込下さい



發賣元　東京工業株式會社
東京市神田區表神保町六
長替口座東京四二九六五

金の星

世界少年少女名著大系

第一編 ロビンソン漂流記

（四六判箱入美本　内容百四十六頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、遂に中で難船に出逢ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深く讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですから、この本を讀まない者は、一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編 ナポレオン物語

（四六判箱入美本　内容百五十六頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮光の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語を、わかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな反響を與へるでせう。

第三編 ドン・キホーテ

（四六判箱入美本　内容百七十七頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

社編

第四編 コロンブス物語

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第五編 ガリバアー旅行記

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第二版

ガリバアーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇拔な面白い物語りで、そこに人世の諷刺や、大いなる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすゝめいたします。

發行所　東京市外田端三五一番地　金の星社　振替東京五九五九六番

丸善インキ

高年級用

アテナインキ

丸善インキで
お書きなさい

お童話も
お手紙も
お日記も
お復習も
……

アテナインキで
お書きなさい

（すまりあもに店具房文もに店書のこど）

世界少年少女名著大系第六編・金の星社編

ロビン・フッド物語

ロビン・フッドは英國に傳へられてゐる有名な物語りであつて、近くは北國へも活動寫眞となつて紹介され、映畫界の人氣者ドーグラス・フェヤバンクスによつて演ぜられ、世界的の評判になつてゐました。この金の星社の編になる「ロビン・フッド物語」は、原作を忠實に紹介したものだけに、得難いものです。シヤーウッドの森のロビン・フッドの生立ちから、最後に毒殺されるまでの、變轉極りない物語りは、如何に讀者を喜ばす事でせうか。

四六判箱入美本
定價金九十錢
送料十五錢

世界少年少女名著大系第七編・金の星社編

アラビアン・ナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年齡の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかゞわかります。傳說によれば、アラビヤの王が毎日一人づゝ新しいお妃を迎へては、翌日は殺して了ふので、遂に或一人の婦人が現れ、自ら進んで王妃となつて、その夜から話しはじめて、遂に千一夜の間語つたのが、此のアラビヤン・ナイトだといはれてゐます。

四六判箱入美本
定價金九十錢
送料十五錢

金の星社

東京市外田端一五三
振替東京五九五六番
電話小石川五八三七番

目次

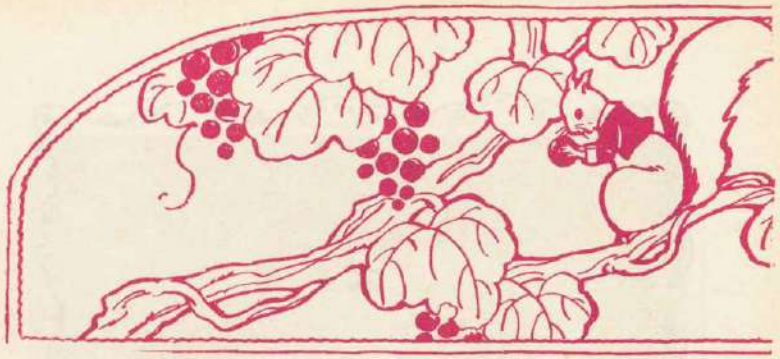
（第六卷・第九號）

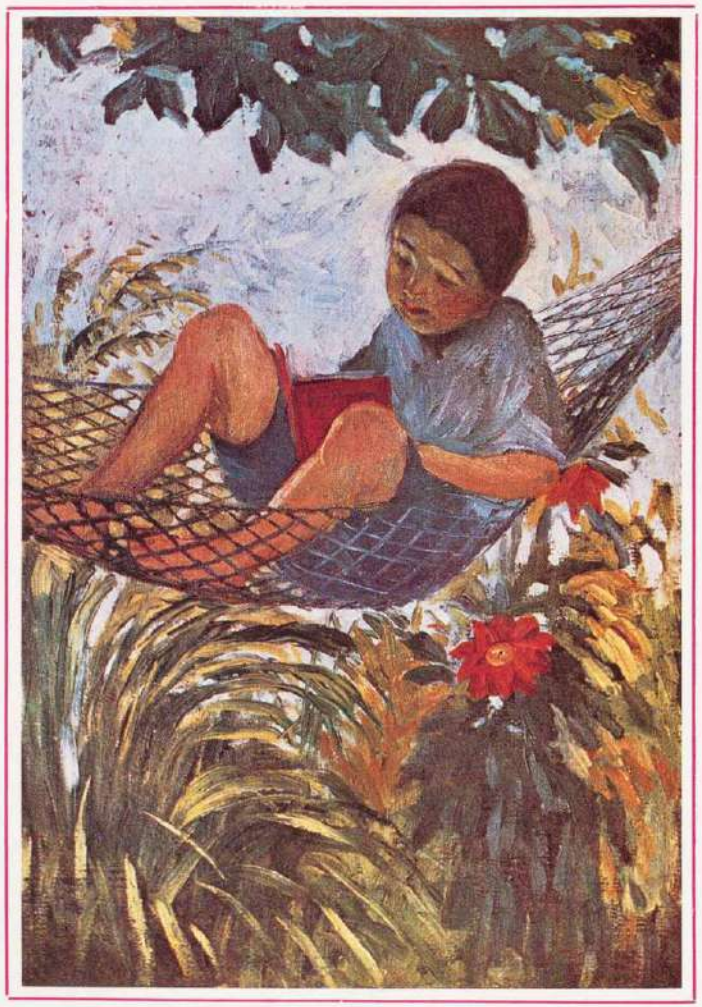
秋のおとづれ（表紙・原色版）……寺内萬治郎
木かげ（口繪・三色版）……岡本歸一
グウグウウウ！（口繪・一色版）……寺内萬治郎
高野山（名所めぐり子守唄）……野口雨情
同作曲……中山晋平
百足の選手（童話）……江口渙
カリフの鶴（童話）……三宅房子
彌次と北シクジリ日記（童話）……小島政二郎
天の川（童謡）……若山牧水
ラム王の一生（童話）……武井武雄
豚小僧（童話）……畑耕一
ホシローヒルム（シャボテンの巻）……寺内萬治郎
神崎與五郎の子（童話）……三島霜川
夜叉御前（歴史童話）……鈴木善太郎
兎と龜後日譚（童話）……松平三千夫
十五少年漂流物語（長篇）……霜田史光
雨乞唄（童謡）……野口雨情
附錄 山の少年（長篇童話）……沖野岩三郎
月見草（童謡）……野口雨情選
算術（幼年詩）……若山牧水選
綠蔭（自由畫）……山本鼎選
田植の有樣（綴方）……齋藤佐次郎選
講演だより……沖野岩三郎

（特別附錄）

バルコニー夜話

狐の鳴き聲……鈴木氏亨
餅男……同
兎の耳が長くて前足の短い……沖野岩三郎
陣太鼓……田中實
ひよひよらひよん淵が……齋藤佐次郎
おすわどん……山野虎市
……西川喜平





木かげ（金の星書房）

岡本歸一畫

蕗谷虹兒詩畫集 **睡蓮の夢** 定價金一圓七十錢 送料書留十五錢

蕗谷虹兒詩畫集 **銀沙の汀** 定價金一圓三十錢 送料書留十三錢

蕗谷虹兒小曲畫集 **夢の跡** 定價金四十五錢 送料金十一錢

水谷まさる先生著 詩集 **水色の花** 定價金一圓五十錢 送料書留十五錢

水谷まさる先生著小曲集 **寶石の夢** 定價金九十錢 送料書留十三錢

水谷まさる先生著少女 **詩の作り方** 定價金八十五錢 送料書留十三錢

西條八十小曲集 **靜かなる眉** 定價金九十錢 送料書留十三錢

西條八十先生著詩集 **砂金** 定價金一圓七十錢 送料書留十五錢

西條八十先生著新しい **詩の味ひ方** 定價金一圓六十錢 送料書留十五錢

吉屋信子先生著 **花物語** 第一 第二 第三 各定價一圓三十錢 送料金十五錢

間司つねみ先生著 詩集 **夜の薔薇** 定價金一圓三十錢 送料書留金十三錢

野口雨情童謡先生著 **作方問答** 定價金一圓二十錢 送料金十三錢

吾が親愛なる本誌愛讀者諸君の机上に、内容裝幀共に他に比類なき 交蘭社發行の良書を備へ、朝夕の清き心胸に繙かれむことを敢て推奬する！

東京振替 交蘭社
市ヶ谷神田 田町
東京區 南四番
神保町 ○七十九番

ウグ、ウグ！

（第四四頁の「豚少僧」を御覧下さい）

寺内萬治郎畫

◆海へ山へ イデアの子供讀物をお持ち下さい◆

童話	童話	童謠	童話	童謠
黄金島（たからじま）	西遊記	鈴草	マッチの兵隊	木の葉の使ひ
赤阪清七編 武井武雄裝幀	吉田助治編 武井武雄裝幀	河野三郎著 伊藤齋裝幀	水谷勝著 武井武雄裝幀	野口雨情著 田中齋裝幀
六版 四六版 二二〇頁 定價一、八〇 送料一、〇八	新刊 四六版 二〇〇頁 定價一、二〇 送料一、二〇	六版 四六版 一九〇頁 定價一、六〇 送料一、〇八	六版 四六版 二八〇頁 定價一、八〇 送料一、〇八	近刊 四六版 二〇〇頁 定價一、八〇 送料一、〇八

目のクルクルした賢い小さなジムが、村長さん達と黄金島を探しに出かける冒險譚。チンパンや盲者の海賊が出ます。怪物も出れば戰爭もやる此れは世界的童謠家スチヴンソンのお話です。

支那の名篇「西遊記」を子供の爲めに書きかへたものです。奇拔な强い孫悟空がいたづらしたり、仙術で三藏法師の危難を助けたりするユカイな冒險記行です。

詩を讀んだり書いたりする事も心を磨くものです。子供の心から出たふとき童謠を集め一つ〳〵にその大事な所を説明して童謠の味ひ方を敎へたものです。

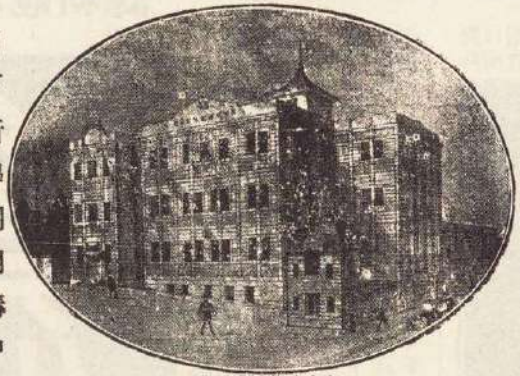
水谷まさる氏が心から摘んで下すつた花です。なつかしいやさしい、晶のよい童話集です。どうか御母樣、御姉樣も御一緒にお讀み下さい。

朝日に輝く葉末の露を一滴二滴三滴と手の中にはふりおとして下さいました。なぜ葉末の露はかくも美しいのでせう。

發兌　東京市牛込區山伏町一四　イデア書院　振替東京一五四五二三　電話牛込三六五六

■ 天下青少年の登龍門 ■

會長、正三位 尾崎行雄
學監、理學博士 山内繁雄
文學博士 遠藤隆吉



（本會事務所設計圖）

目下新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義錄見本つき會則
—申込次第無料進呈す—

大日本國民中學會あり!!

天下の青少年諸君 意を強うして可也

諸君は學校萬能の迷夢より醒めなければならぬ、中等教育を受くるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は居ながらにして中學校に學ぶことが出來るのである。大日本國民中學會の最善をつくせる講義錄は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

—本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き—
—獨自の特色を獲得せり。—

■ 講義の新いこと……模範的通信教授として推奬せらる。
■ 會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも強せず。
■ 學制の正いこと……正確に中學校令に從ひ全く中學校と同樣也。
■ 指導の良いこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
■ 講師の善いこと……中等教育者として令名ある實際家を選ぶ。
■ 効果の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて本業の榮冠を得らる。
■ 基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的事業として一般に認めらる。
■ 成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと謂ふを用ひず。

東京神田河岸
大日本國民中學會
振替（東京四二〇〇番 電話神田三〇〇二番、三〇〇四番、三〇〇三番）
口座（名古屋四二八〇番 特設牛込五〇九五番）

金の星

九月號

西川勉新譯

メエテルリンク童話集

（四六判三二〇頁裝幀美、定價金壹圓五拾錢　送料拾錢）

素ばらしく面白い童話集が出來ました。世界に有名な童話は澤山ありますけれども、メエテルリンクの童話位、世界から歡迎されたものはありますまい。

その有名なお話しの中から、殊に各國々の少年少女達によろこばれる、（青い鳥）（尼の身替り）（犬）（青髯爺さん）、（十二人の盲人）等の本當に面白いものばかりを、皆樣におなじみの最も深い西川先生が書かれたのです。各篇には澤山の繪を入れ、三色刷も添へてあり、それに色刷の箱入りですからそれはそれは奇麗な本であります。此の童話集は皆樣に讀んでいただきたい本です。

民謡集　うり家札

野口雨情先生は本書に序して民謡復興運動の基調となる黎明期の烽火であると

野口雨情　時雨音羽　新先生　序著

新形美　拾錢
本定價　送料　八錢四

發行所　東京神田錦町一ノ一　振替東京五二三三九　米本書店

高野山

中山晋平作曲

♩=94

1. 2 3 5 | 3. 5 6 i | 5. 6 i 2 3 | 2 — 0 |
1. ひぐれにや ひぐれの かねがなー る
2. おひさつ かぞへりや ひがくれー る

3. 3 i 6 | 5. 6 i i | 6 5 3 i 2 3 2 — 0 |
かうやの おやまは きいーのくー に
おふたつ かぞへりや よがーあけー る

3. 2 3 5 | 6. 5 6 i | 2 i 3 2 i 6 5 | i — 0 :|
きしうは みかんの よいーさーーーー ろ
よあひにや かうやで かねーがーなー る

高野山

（名所めぐり子守唄の一）

野口雨情

日暮れにや日暮れの
鐘が鳴る

高野のお山は
紀伊の國

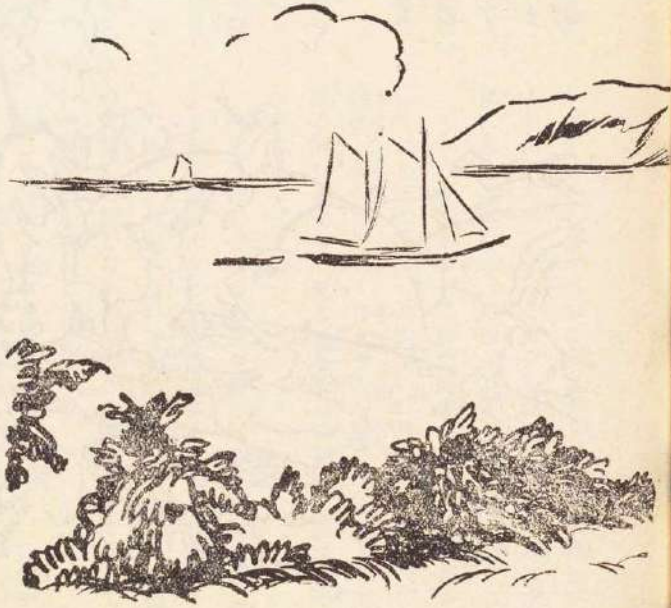
紀州は蜜柑の
よいところ

お一つ數へりや
日が暮れる

お二つ數へりや
夜が明ける

夜明けに高野で
鐘が鳴る

（紀州高野山は佛緣の名山である）



百足の選手

（上）

江口渙

これは昔る昔、ずつと大昔の、まだ人間と云ふものがこの世の中にゐなかつた、今から何萬年も前のお話です。

その頃、この世の中には、冬と云ふものがありませんでした。いや。唯に冬がないばかりでなく、春

も秋もなくて、謂はば年が年中、夏のやうな暑さばかりが續いてゐました。

無論、暑いと云つたところで、堪らない程の暑さではなく、裸でくらして行くのには、恰度、好い加減の暑さでした。で、有ゆる生き物と云ふ生き物はどれも同じやうに裸でゐました。

例へば、今はあのやうに溫い毛や、軟い羽根で體中を包まれてゐる鳥や、獸も、その頃は何處にも一本の羽根もなく、又一條の毛もなく、ほんとうの眞裸でした。それで少しも寒くないどころか、却つて好い氣持でした。

蛇や、蛙や、龜の子や、百足なども、矢張、今と同じやうに、何處に一本の毛もなく羽根もなく、すべすべとした肌を直下におてんとう樣に曝してゐました。そして、それ等の眞裸の生き物達は、到る處の森の中や、野の上を、至極、元氣に飛び歩いたり、涼しさうに這ひ廻つたりしてゐました。

だが、みんながみんな同じやうに眞裸で暮してゐましたから、お互にそれを格別不思議にも思はず又氣にもとめないで、至極、のんきに暮してゐました。

ところが或る時、この世の中に大變な事が惹りました。と云ふのは、その年のお仕舞近くになつて、突然、思ひがけなく冬がやつて來ました。そして世界の隅々までも、見る見る怖しい寒さに襲はれ出したからです。

何しろ世の中にゐる生き物と云ふ生き物は、それまで寒さと云ふものを夢にも知らなかつたのですから、堪りません。生れて始めて冬と云ふものに出逢つて驚くの驚かないのつて、一時は全くどうして好いか解らない程でした。

今まで青々と茂つてゐた森や、野原は、いつかいたいたしい茶色の姿に變りました。空にも地にも、夜となく晝となく肌を突き刺すやうな寒い風が、びゆうびゆうと音をたてて吹きまくりました。到る處

に美しい色を染めてゐた木の葉や、草の花は、見る見る萎れて枯れて、その烈しい風にふきまくられて、悲しさうな聲を立てながら、何處へか飛んで行つて終ひました。

それを見た生き物達は、自分達の身の上に大きな災難の落ち掛つて來た事を知つて、みんな心から悲しみました。だが、始めの裡は、二三日もすれば又以前のやうな幸福な日が返つて來るだらうと思つて、寒さにぶるぶる慄へながらも、とにかく一生懸命に我慢をしました。

ところが案外にも、日數が經てば經つ程、寒さは益々きびしくなるばかりです。何時の間にか朝は必ず眞白な霜が降るやうになりました。夜になると、何處の水にも鏡のやうにきらきらと氷が張りました。その上、どうかすると晝間でさへも、天からちらちらと冷い雪が降つてきます。

何しろ今まで冬と云ふものに一度も出逢つた事のない上に、體中の何處にも一本の毛も羽根もなく、一枚の着物も持たない生き物達の事ですから、その寒い事と云つたら、全くお話しになりません。朝から晩まで、がたがた慄へてゐるどころか、手も足もちぢこまつて今にも呼吸がつまりさうです。

で、始めの內はみんな跳ねたり躍つたり、走り廻つたりしては汗を出してみたり、或はお互にしつかり抱き合つて溫めて見たりしました。が、それもひしひしと體に迫つて來る寒さには、到底、かなひません。お仕舞にはもう少し愚圖愚圖してゐれば、みんな凍え死ぬより外仕方のない位までになりました。

で、どうする事も出來なくなつた生物達は、たうとう揃つて神樣にお願ひしました。

『神樣、神樣、お願ひですからこの怖しい寒さを何とかして和げて下さい。こんな寒さが、後もう一日

でも續かうものなら、私達は凍え死ぬより外に仕樣がございませんから』

かう云つてお祈りをする生き物達の聲は、寒さとひよつこり下界をおのぞきになりました。

それを見ると又みんな聲を揃へてお祈りしました。

悲しさと怖しさとに慄へながら、世界中の到る處の野や森から、細々と天の方へ響いて行きました。

その聲があまりにいたいたしかつたせいか、普段、あまり顏を見せた事のない神樣も、天の扉を開けて

『神樣。神樣一生のお願ひですから、どうかこの寒さを何とかして下さい。どうかして私達の生命を助けて下さい』

すると、神樣は天の上かな嚴かな聲でかう云ひま

した。

『それは今までお前達があんまり樂をしすぎてゐたから、その酬いでこんな事になつたのだ。つまりお前達が自身でかう云ふ不幸を招いたやうなものだ。ほんとう云ふと、かうなる方が、この先お前達のためになるのだ』

『でも、これではあんまり酬ひがひどすぎます』

『いや。さう心配しなつても好い。四月も經てば、又自然と暖くなるから』

『この寒さがまだ四月も續くのですか』

後四月と聞いて驚いた生き物達は、今にも泣き出しさうな聲を出して、思はず知らずかう訊き返しました。

『さうぢや、まだ四月は續くのぢや』

『四月なんて續かれてはとても堪りません。何しろ私達は眞裸なのですから』

『成程、お前達は裸だつたんだな』

『さうですとも。體中の何處にも一本の毛さへもこざいません』

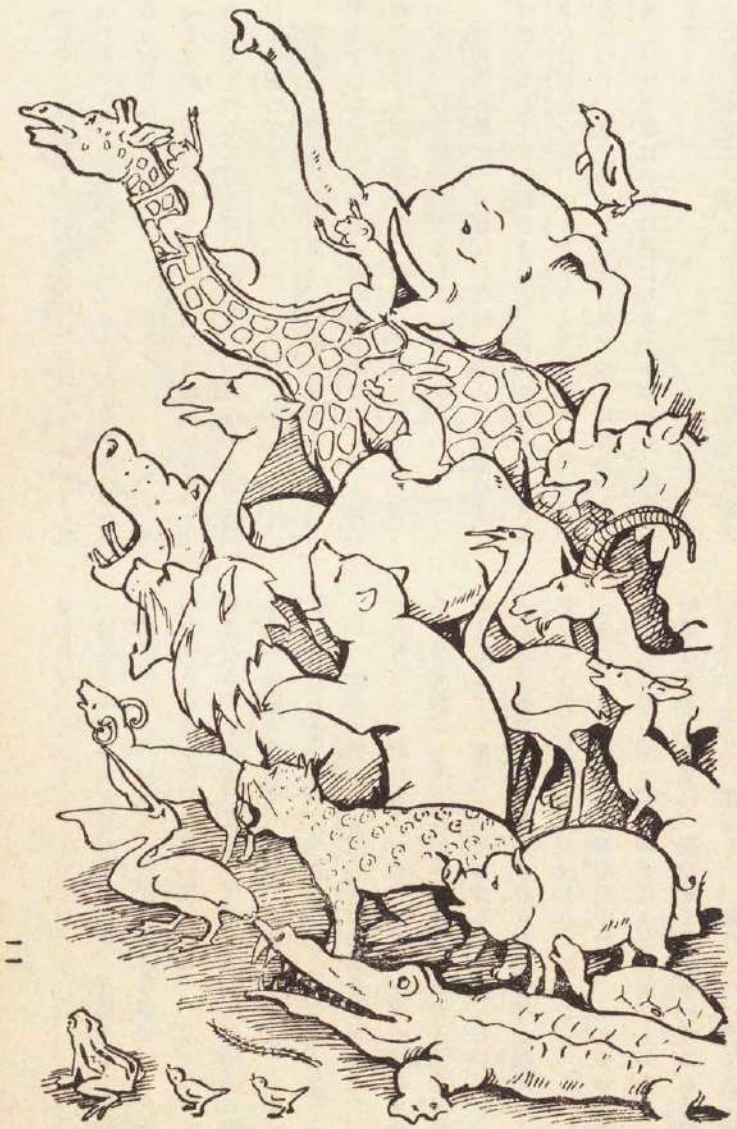
『それは少々可哀さうだな』

『全くでございます。どうか一生お願ひですからこの寒さを和げて下さい。でなければ銘々にせめて一枚の着物でもお惠み下さい』

その聲が如何にも可哀さうだつたためか、神樣は眞裸のままでがたがた慄へてゐる下界の生き物達の樣子を眺めながら、暫時、何か考へてゐられました。

やがて、如何にも困つたらしい樣子を顏に見せながら、かう云ひました。

『お前達には全くお氣の毒だが、俺の手許に着物はあるにはある。だが、今のところ毛皮の着物と羽根の着物と、たつた二通りしかないのだ。だから、それを與るにしても、到底みんなに行き亘るやうにやるわけには行かない』



『ぢや　それを何とかして私達にお分け下さいまし』
『でも、このまま與つては、どうしても恨みつこになるからね』
『ですが、折角、ざう云ふ結構なものがお有りになるのでしたら、何とかして下さい。私達の生命を助けると思つて』
神樣は、暫時の間、又々、何事かを思案してゐるやうでしたが、やがて、好い事を思ひついたと云ふ風な樣子を顏に見せて、靜かに下界を覗きました。
『ぢや、仕方がないからかうしやう』
神樣の言葉が一寸途切れた時、みんなは思はず、呼吸を殺して天を仰ぎました。神樣が果してどんな具合に着物を分けて下さらうとするのか、その分け方一つで、誰が助るか、又、誰が凍え死ぬか、全く怖しい生き死にの岐れ路になるかも知れないからです。
すると神樣は、前にもました嚴かな聲でかう云ひ

ました。
『ほんとう云ふと、誰にも、彼にも、手落ちなく着物を分けてやりたいのだ。だが、殘念な事には、今云つたやうに着物がたつた二種しかないのだ。だからそれをこのまま分けてやつては、きつとお前達は奪ひ合つて喧嘩をするにきまつてゐる。で、一つかう云ふ事にしやうぢやないか。それが一番公平だから』
かう云つて神樣は、又々、一寸言葉をきりました。みんなはもう氣が氣ではありません。又々思はず知らず首を伸ばして、呼吸の詰る程、きつと天を見つめました。やがて、神樣は少し笑ひ顏になつて。一とわたり眞裸で慄へてゐるみんなの樣子を覗めたと思ふと、又、後をつゞけました。
先づ、お前達の同じ仲間の中から、一人づつ選手を出すのだ。例へば、獅子だとか、虎だとか夫だとか兎だとか云ふ風に、四つ足で飛び歩いてゐる仲間から、一人。又、鷲だとか、鶴だとか、鳩だとか、雉

だとか云ふ風な、空をとび廻つてゐる仲間から、一人。又、龜の子だの、蜥蜴だの、鰐だののやうに、四つ足で地べたを這つてゐる仲間から一人。それから百足だの、蛇だの、げじげじだの、みゝずだの、なめくじだのやうにうねうねと地面を這ひ廻つてゐる仲間から一人　と云ふ風にそれぞれ一人づつ選手を出して、競爭をするんだ。さうして、今、俺が立つてゐる、この山の上まで競爭するんだ。一番先きに着いたものには、一番、暖い羽根の着物をやらう。二番目に着いたものには毛皮の方をやらう。だが何しろ着物は二種しかないんだから、三着以下のものはお氣の毒だが、冬中、穴の中にもぐつてゐて春の來るのを待つて貰はう。どうだ。それが一番好いだらう』
『はあ、さうして頂ければ實に結構です』
競爭に勝ちさへすれば着物が貰へると云ふ事を聞いて、皆は思はず手を拍つて喜びました。（つゞく）

鶴のフリカ

三宅房子（きょつ）

一

鳥は話し續けました。

『あの男は私の耳に物凄い聲で叫びました。「お前は醜くなつて畜生にすら嫌はれるやうになつたぞ。若しお前のやうな嫌な者でも、嫁に貰はうと云ふ者があれば兎も角だが、そんなことはこゝあるまいから、お前は多分死ぬまで此處にかうしてゐるだらうよ。かうして己れはお前と、憎らしいお前の父とに仕返しをしてやるのだ。」と申しました。その時からもう永い月日がたちました。妾は世の中から嫌はれ、動物仲間にさへ卑まれて、寂しく悲しく獨りぼつちでこの部屋に住んで居ります。日に輝いた美しい景色も、妾の目からはすつかり閉ぢ込られてしまひました。何故と云ふに、妾は晝の間は盲目なですもの。たゞお月さまが、青白い光をこの壁に投げかける時ばかりが、私の眼はやつと開く位なものでございます。』

鳥は話し終つて又鳶色斑の翼で涙を拭ひました。

カシッドは深く考へ込みながら、その話しを聞いてゐました。

『あなたのお話しが本當なら、私達お互の不幸には不思議なつながりが出來てゐるものと云ふべきです。しかし、私はこの謎を解く鍵を、どこで見付けることが出來るでせう。』とカシッドは、落膽した聲で云ひました。

鳥は答へて、

『おゝ、あなた樣、妾にはどうやら、そのことが出來さうに思はれてなりませんわ。と云ふのは、妾がまだずつと若い子供の時分に、或時、一人の偉い婦人から、鶴が妾に大きな幸ひを與へて呉れるだらうと豫言したからですの。それで妾達は、どうしたら助かるのか知つてゐるのかも知れません。』と云ひました。

カシッドは大變驚いて、その譯を訊ねました。すると鳥は、

『妾達三人をこんな不幸にした魔法師は、毎月一度この城に參りますの。この部屋から、さして遠くない所に一つの廣間があります。そこであの男は、大勢の仲間を連れて來て、宴會を開く習慣になつて居りますの。妾はこれまで、度々あの人達の話を盗み聽きいたしましたわ。あの人達はお互に、自分がした魔法の仕事について話し合ひます。ですから、そんな時にあなた方がお忘れになつた呪文の文句も、話すことがあるかも知れませんわ。』

『おゝ、尊い王女よ。』

とカシッドは、嬉しさの餘り叫びました。そして

『何日あの男達が來つて來ますかね。そして、その廣間は何處にあるのですか、どうぞ聞かせて下さい。』

と重ねて訊ねました。

鳥は暫く默つて考へて居りましたが、

『お話しはいたしますけれど、妾のお願ひも肯いて下さらないではね。』と云ひました。

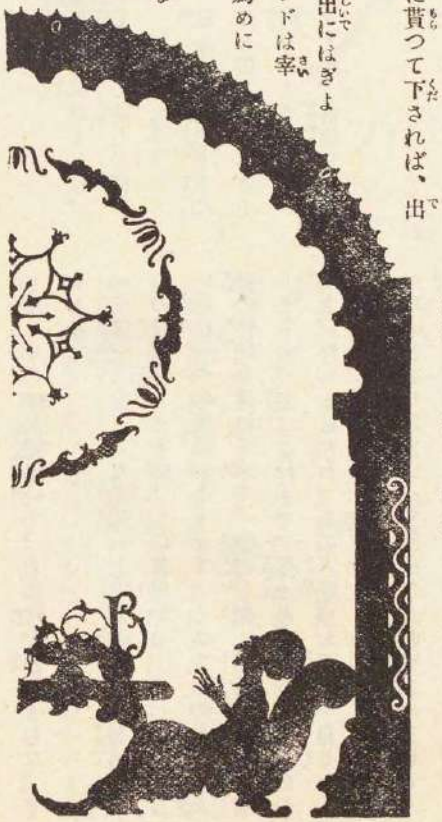
『仰言つて下さい。遠慮なく仰言つて下さい。どんなことでも、私共に出來ることなら屹度いたします。』とカシッドは、息急しく申しました。

『と申すのは、妾もどうぞして御一緒に、自由な元の人間に成りたいのでございます。それは、あなた方の中のお一人が、私をお嫁に貰つて下されば、出來ることでございます。』

二人の鶴は、流石にこの申出にはぎよつとしました。そこで、カシッドは宰相に目くばせして、相談する爲めに戸の外へ出ました。

『宰相、これは大變なことになつたぞ。だがお前は、あの梟を妻にして呉れるだらうな。』

と、カシッドは云ひました。



『王樣、私があの梟を妻にするのですつて？　どうして〳〵、私が若し家へ歸れば私の妻がどんなに怒ることでございませう。その上、私は年寄りでもございます。それに引き換へて、王樣はまだお若いしお后もまだお定まりになつて居りませんのですから、王樣こそ、あの若くて美しい王女をお貰ひになるが宜しいと存じます。』

『だがな、宰相。』と云つて、カシッドは翼をだらりと垂れて、溜息をしながら申しました

『一體全體あの王女が、若くて美しいなぞと云ふことは、誰が申したか、それはまるで見ずに品物を買ふやうなものだぞ。』

かう云ふ工合で、王樣のカシッドと宰相のマンゾルとは、いつまでも、對手にあの王女を貰はせようと云ひ爭つてゐましたが、お終ひには宰相はあのいやらしい梟と結婚する位なら、むしろこのまゝ鶴でゐた方がましだと云はぬばかりでしたから、カシッドはたうとう思ひ切つて、自分があの願ひを叶へてやらうと決心いたしました。

そのことを梟に話すと、梟は涙をこぼして喜びました。そして、あなた方お二人には、今日より都合のよい日は、またと來られなかたらうと申しました。と云ふのは、今夜は、あの惡い魔法師達が、多分集まるらしいからだと打ち明けました。

梟はその廣間へ二人を案内しようと、先に立つて部屋を出ました。カシッド達の鶴は、梟の後について永い間暗い廊下を通つてゆきましたが、やがて壞れかけた壁の間から、キラ〳〵光の洩れる所に出ました。

梟は、『靜かに！』と二人を止めてから、三人はその壞れた壁の間から、中の廣間を覗きました。廣間はぐるりに柱が立つてゐて、また立派に飾り立てゝありました。いろ〳〵のランプが、いろんな色の光を出して方々に點いてゐましたから、洵に綺麗に見えました。

廣間の眞中の圓テーブルの上には、珍らしい御馳走が澤山盛られてありました。テーブルの周圍には八人の男が腰かけてゐましたが、その中には、あの粉藥とラテン語の書いた紙を賣りつけた商人がゐることを、カシッド達はすぐに見て取りました。

その時、その商人の傍にゐた一人の男は商人に向つて、近頃の仕事で何か面白いのを一つ話して呉れと云ひました。すると商人は、カシッドと宰相とのことを話しました。

『成程、そいつはお手柄だつたね。そして一體君はどんな言葉を奴等に敎へてやつたのかね。』と他の一人の魔術師は、商人に化けてゐた男に云ひました。

『それは大變むづかしいラテン語でね、ムーターボールと云ふ言葉さ。』

二

二羽の鶴はこの話を聞いて、嬉しさのあまり氣が狂ひさうになりました。そして、その長い脚で、風のやうに早く、お城の門の方へ走つてゆきました。鶴達はあんまり早いので、梟は後からすぐに

隨いてゆくことが出來なかつた位でした。

門の所へ出てから、カシッドは梟に向つて、心からお禮を云ひました。

『わしとわしの友達を、救つて下すつた恩人の梟さん。わしはその禮の徵として、末永くこのわしをあなたの夫として下さい。』

カシッドは嬉しさに聲を慄はせて、さう云つてから、二羽の鶴は東に向ひました。その時恰度山の端から上つて來た眞赤なお陽さまに向つて、三たびその長い首を下げました。そして二人は聲を揃へて、『ムーターボール！』と高く叫びました。

すると不思議や、はつと思ふ間に、二羽の鶴は元通り二人の人間に變つてゐました。一人は大僧正でバグダッドの王樣であるカシッドでしたし、一人はその國の宰相であるマンゾルに違ひはありませんでした。生れ返つた嬉しさ！　二人はたゞもう泣いたり笑つたりして、互に抱き合ひました。然し二人がふと氣が付いて、振り返つて後を見た時の驚きは、まァ、どうして云ひ表はしてよいのでせうか。立派に着飾つた、それは〳〵美しい一人の王女が、二人の前に立つてゐたのでせう。王女は花のやうに笑ひながら、カシッドに手を差出しました。そして、

「あなた方は、もう梟のことはお分りにならないのでせうか」と云ひました。

この王女こそ、今が今まで醜い梟になつてゐた人です。カシッドはそれと知つて、自分が鶴になつてゐたことが、幸せだつたと叫び聲を上げたほど、その王女の若くて美しい姿に、うつとりとしてしまひました。三人は喜び勇んで、バグダッドの街の方へ歩いて行きました。カシッドは自分の着てゐる服のポケットの中に、例の魔法の粉藥ばかりでなく、お金の入つてゐる財布も見つけましたので、早速村へ出ると、旅をするのに入用な品物を買ひ調へました。かうして、間もなく、三人はバグダッドのお城の門のところまで來ました。

所がそれと知つた人民たちは、何と驚いたことでせう。人民達は、王樣も宰相も死んだものと思つてゐたのです。そこへ、常々敬ひ慕つてゐた王樣が、無事にお歸りになつた姿を見て、皆雀躍りして喜びました。

人民達は元の王樣のお歸りを喜ぶと共に、新らしく王樣になつたミヅラを強く憎み出しました。そして人民達は、一團になつて宮殿におし寄せ、魔法師のカシュヌールと、その息子のミヅラとを捕へてしまひました。そこでカシッドは、この惡い魔法師を王女が住んでゐた荒れた古いお城の中へ押し込めた上、首を釣り上げてしまひました。

それから、息子のミヅラには、自分で死ぬか、この粉藥を臭ぐか、どちらかにせよ、と申し渡しました。ミヅラは粉藥を嗅ぐ方を選びましたので、宰相は例の匣を開いて、たつぷりと一撮みの粉藥を彼に嗅がせ、一羽の鶴にしてしまひました。そしてカシッドは、その鶴を、鐵で出來た籠の中に閉ぢ込めてしまひました。

その後王樣のカシッドは、新らしいお后と共に、長い間幸せに暮しました。

カシッドが一番機嫌のよいのは、何日もお午過ぎに宰相がお訪ねする時でした。

二人は幾度も〳〵鶴になつた時のことを話し合ひました。そして王樣が、大變上機嫌になつた時は、宰相が鶴であつた時に、どんな恰好をしたかを眞似する爲めに、王樣は椅子から下りて來るのでした。

それからカシッドは、眞面目くさつて硬ばつた足つきで部屋中を跳ね廻はつたり、カクカクと嘴でするやうな音を立てて、翼のやうに腕を擴げたり、また宰相が、どんなに無駄骨折つて幾度もお辭儀をしては、東に向つてムームーと叫んだかを眞似て見せては笑ひました。

お后やその子供達は、王樣がそんな眞似をするのを、どんなに面白がつたでせう。

然し、宰相はあんまり長い間王樣に自分のあらを眞似されてゐる時は、あの時王女の梟の戸の前で、二人がどんなことで云ひ爭つたかを、お后さまに打ち明けますよと笑ひながら脅しました。

（をはり）

彌次と北しりくり旅行記

小島政二郎

一

昔、江戸に彌次郎兵衛、北といふ二人の瓢輕者がありました。或時ふと思ひ立つて、上方見物に出かけましたが、江戸を立つてから何日目かに、鹽井川といふ處まで來ました。

見ると、昨夜雨が激しく降つたせゐか、橋が落ちたのでせう。川を渡る人は、みんな腿引をとり、裾をまくり上げて、ザブ〳〵と水に這入つて行きます。で、二人もその眞似をして渡らうとすると、そこへ按摩さんが二人やつて來て

いぬいち『もし〳〵。』と北八に、『川は膝位でございますかな。』

『左樣さ。しかし、流れが早いから、お前さん方には危い。用心してお渡りなさい。』

『はあ、成程、水の音が餘程早い。』と云ひながら、石を拾つて川の中へ投げ込んでは、耳を澄ませて考へてゐましたが

『いや、こゝ等が淺いやうだ。猿市、二人ながら脚絆を取るも面倒だ。お主は若いから、俺を負つて渡れ。』

『ハハハ……。狡い事を云ふわ。――ジャン拳で極めよう。負けた者が負つて渡るのだ。よしか。』

『こりや面白い。さあ、來い。さんなむめで。』

『りやんごうさい。りやんごうさい。』と、片手で拳を打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手を握り合つて

いぬいち『さあ、勝つたぞ勝つたぞ。』

さるいち『えゝ、いま〳〵しい。そんならこの風呂敷包を、お前一緒に背負つて行つてくれ。それよしか。さあ來い。』

猿市が支度をして背中を向けると、それまで傍で見てゐた彌次郎が、『これは有難い』とばかり、澄まして猿市に負さると、猿市は連れの犬市と思つてさつ〳〵と川へ這入り、難なく向うへ渡りました。すると、こつちの岸に殘された犬市が

『やい、猿市よ。どうした。早く川を渡さぬか。』

猿市は向岸でそれを聞いて腹を立てて、

『冗談ぢやない、たつた今負つて渡したのに、またそつちへ歸つて俺を負るのだな。』

『馬鹿を云へ。自分ばかり渡つて、狡い奴ぢや。』

『狡いと云へば、そつちの事だ。』

『おのれ、兄弟子に向つて何といふ言ひ草だ。早く來て渡さぬか。』と、白い目を剝き出して腹を立てるので、猿市は仕方なく、またこちらの岸に渡り歸つて

『さあ、そんなら負さりなされ。』と背中を出しまし

た。

それを見た北八は『〆めた』と思つて、素早く手を掛けて負さると、猿市はまたサブ〳〵と川に這入つて行きました。

犬市の方は、いくら待つても猿市が來ないので

『これ、猿市、どこにゐる。』と呼ふ聲に、猿市は、

『ハテナ。あの聲は確に犬市ぢや。すると、この背中は誰だらう。』と川の眞中で立ちどまりましたが、いきなり手を放したので、北八はドンブリコと川の中へ落されました。

『わッ、助けてくれ。助けてくれ。』と、泳ぎを知らぬ北八は、手足を蹠いて流されて行くので、彌次郎は驚いて飛び込んで、漸くの事で引き上げました。

きた八『エエ按摩めが、ひどい目に逢はせくさつた。』

『ハハハ……。まづ着物を脱ぐがいゝ。絞つてやらう。』

『あゝ寒い、寒い。』と、北八は裸になつてガタ〳〵顫へながら着物を絞つてゐましたが、その間に、按摩さん達は川を渡つて行つてしまひました。

きた八『エエいま〳〵しい。風を引いた。ハクシヤン。』

二

この二人、幾日か經つて奈良へ著きました。奈良の大佛さまは、丈が何尺あるか御存じですか。えゝ、さう〳〵。五丈三尺二寸です。仰向かなければお顏が拜めません。

『なんと北八、話に聞いたよりか大きなものぢやないか。あのかうしてゐる掌に疊が八疊敷けるさうだ。』

『へえ。』

『あの、お鼻の穴から人が傘をさして出られるさうだ。』

『本當かしら。』

『さあ、今度はお後へ廻つて見よう。おや、お背中に窓が明いてゐる。』

『あれは大方汐を吹くところだらう。』

『鯨ぢやあるまいし。』

こんな冗談を云ひ乍ら見物してゐる間に、北八が

『おや〳〵。あれ、みんなが柱の穴を潜つてゐるわ。』と、指さす方を見ると、太い柱の下の方に、恰度人一人潜れる位の穴が切り拔いてあつて、大勢の人がこつちから向うへ拔け出ては面白さうに笑ひ合つてゐます。北八も、同じやうに向うへ潜り拔けて

『こりや面白い。しかし、彌次さんは太つてゐるから、とても拔けられまい。』と云へば

『なんの、お前に出來て私に出來ないなんてことがあるえのか。』と、負けぬ氣を出して、四這ひになつて體を半分ばかり穴の中へ入れたまではよござんしたが、それ以上はお腹が邪魔になつてどうしても進めませんでした。では、後へ戻らうとすると、脇腹の鍔が横腹につかへて、引く度に、キリ〳〵痛んで溜まりませんでした。彌次郎は思はず顏を眞赤にして、

『アイタタ、アイタタ。これは飛んだ事をした。』と云ふ聲に、北八はびつくりして

『どうした。拔けられないのか。だから、私が云はないことではない。』

『そんなことを云ふ暇があつたら、手を引ッ張つてくれ。』

『よし。かうか。』と、彌次郎の兩手をぐッと引ッ張ると

『アイタタ。』

『弱い男だ。少し辛抱するがいゝ。』

『とても我慢が出來ぬ。後の方から足を引いてくれ。』

『よし。かうか。――やあ、えんさ。やあ、えんさ。

『アイタタ、アイタタ……』
『少しは我慢するものだ。大分出て來たぞ。やあ、えんさ、やあえんさ。』
『待つてくれ、待つてくれ。腰の骨が折れさうだ。

やつぱり首の方から引き出して貰はう。』
そこで、北八はまた前へ廻つて、彌次郎の兩手を持つて
『やあ、えんさ。やあ、えんさ。それ、またこつちへ餘程出て來た。』
『アイタタ、アイタタ。こりや堪らぬ。北八、とても我慢が出來ない。やつぱり後へ引き戻してくれ。』
『えゝ、いろ〳〵なことを云ふ奴だ。』と、また後から足を掴んで、『やあ、えんさ。やあ、えんさ。』
『待て、待て。……やつぱり前の方から引いて貰はう。』
『そんなに前へ廻つたり後へ廻つたり、引き出したり引き戻したりしてゐては、いつまで經つても果てしが附かない。わしにいゝ考がある。』
かう云つて、北八は、傍に見てゐた參詣の人に
『どうかこつちから頭を引つ張つて下さい。私はあつちへ廻つて足を引つ張りますから。』

それを聞いた彌次郎は慌てて
『馬鹿云ふな。兩方から引つ張られては體が千切れてしまふ。』
『でも、前へ廻つたり後へ廻つたりする世話がなくつていゝ。』
すると、參詣の人が
『いや、兩方から引つ張つたら、體が伸びて、細くなつて、ツルリ出られるかも知れない。』
と、北八が
『こりやいゝ事がある。酢を一升買つて來て、彌次さん、お前に飲ませよう。』
『なぜ？　酢を飲むとどうする？』
『だつて、酢を飲むと痩せると云ふぢやないか。』
すると、參詣の人が
『しかし、今の間には合はぬ。それよりも、かうなさい。どこかから槌の大きなのを借りて來て、トンカントンカン頭を打ち込むのです。それに拍手を合はせて、我々總掛りで足を引つ張つたら、どうでせう。』

きた『成程。それはいゝ考だ。しかし、それでは命がありますまい。』

さんけい『左樣サ。そこはどうも講合はれぬ。』

大勢が自分を嬲り物にしてゐるのを聞いて、彌次郎は腹を立てて

『おい、北八。友達甲斐のない奴だ。他人と一緒になつて、友達を笑ひ物にすると云ふことがあるか。無駄口を利いてゐる暇に、早くどうかしてくれ。』

『さう、怒らずに少し待ちなよ。』と云ひながら、北八は、手を柱の中に入れて動かしてゐましたが、『うん、この脇差の鐔がお前の腹横に食ひ込んでゐて痛いのだ。少し我慢しなよ。今抜いてやるから。——ギコ〳〵、ギコ〳〵。』

『さう動かしては益々食ひ込むばかりで、痛くて堪らぬ。』

『なに、もう少しの我慢だ。——ギコ〳〵、ギコ〳〵——そら、抜けたぞ。』

『やれ、助かつた。これでどうにか樂になつた。』

『その勢で、もう一つ彌次さん、今度はお前の體を抜く番だ。——時に、どなたか前の方から押し出して下さい。私が、足を持つてこつちへ引き出しますから。——やあ、えんさ。やあ、えんさ。

さんけい『それ、出るわ。もう少しぢや。もう一息みだ。』

やじらう『ウム、ウム。』

きた八『ハハハ……。出る奴が息むから大笑ひだ。——やあ、えんさ。ズル〳〵。やあ、えんさ、ズル〳〵。』

やじらう『あゝ、痛い、痛い。』

たき八『ぺたぞ。えんやあ。ズル〳〵。そら、出た出た。』

とう〳〵、太つた彌次郎の體が、スツポリ柱から抜け出しました。彌次郎は大汗を拭き拭き、ホツと溜息を吐いて

『有り難い、有り難い。こりや何方も御苦勞でございました。北八、こんなに着物が擦り切れて、肋骨がピリ〳〵する。』と云ふのを聞いて、北八は

『ふだんから、彌次さんは、俺のことをお瘦せのヒヨロ〳〵なんて馬鹿にしてゐたが、さて〳〵、太ツチヨは不便なものだ、と云ふことを今といふ今思ひ知つたらう。どうだ、どうだ。』

『ハハハ……。とんだ處で敵討をされたわ。』

三

やがて、二人は京都へ這入りましたが、前の宿屋で、北八がお風呂に這入つてゐる暇に、持ち物すつくり盜まれて、京都へ這入つた時には、本當の丸裸でした。裸の上へ、彌次郎が貸してくれた合羽をはおつて、ぶる〳〵顫へながら

『あゝ、寒い。寒い。思へば〳〵つまらない目に逢つたものだ。彌次さん、お願ひだ。古着屋を見つけ

て、何か綿入を一枚買つておくれよ。』
『よし、承知した。』
『京都は底冷がして、寒い處とは聞いてゐたが、
――ブル〳〵。おお、寒い、寒い。』
『北八、幸ひこゝにお湯屋がある。ちよつくら暖まつて來たらどうだ。』
『どれ、どこに？　成程、暖簾に「ゆ」の字が書いてある。有り難い。彌次さん、ちよつと待つてゐておくれ。一風呂浴びて來る。』と、一目散に格子造りの家の暖簾を潜つて上へ馳け上つて、合羽を脱いで裸にならうとしました。
　すると、そこへ亭主が出て來て
『もし〳〵。貴方どなた？　裸になつて何をなさるんです？』
　云はれて、初めて氣がついて、あたりを見廻すとお湯屋ではありませんでした。
『いま〳〵しい。お湯屋かと思つた。』

『ハハハ……。暖簾に「ゆ」の字が書いてあるので、錢湯と間違なされたのだな。家では、振出藥を商つてゐるので、振出は湯をついで飲むもの故、それで「ゆ」の字の暖簾を出してゐるのですよ。』
　北八が頭を掻いて外へ出ると、彌次郎も
『大阪で蘆と呼んでゐるものも、伊勢へ行くと、濱荻と云ふさうだ。江戸流に、暖簾に「ゆ」の字が書いてあれば、お湯屋と思つて大に失敗をした。』
『彌次さん、お前は笑つてゐられるが、俺はお湯へ這入れなくなつたかと思ふと、一層寒さが身に泌みるやうな心持がする。』と小言を云ひながら行くうちに、いゝ鹽梅に、道端に小さな古着屋が一軒見つかりました。見ると、お誂へ向き、紺の綿入が店先に吊下つてゐるので、北八喜んだの喜ばない
『この綿入は幾らだね。』
　ところが、亭主は京都生れの氣長と來てゐます。
ノロ〳〵とした口附で

『はい〳〵。こちらへお掛けなされ。これ、長吉お茶を持つてお出で。お煙草の火もないぞ。赤いのを一つ、ちよつと持つてお出で。』と京都流に、まづお客にお茶を出さうと云ふのです。ところが北八の方は、寒くつて堪りません。早く買つて着ようと云ふのですから、
『いや、茶も煙草も入りません。それよりも、これは幾らだと云ふのに。』
『はい〳〵。それはなか〳〵上等でございますよ。しかし、お安うして、進せませう。』
　そこへ小僧が
『はい、お茶あがりませ。』
『長吉、そりやお溫いぢやないか。なぜ熱い茶あげんぞい。』
『いえ、お内儀さんが、朝がお茶漬だから、新しい茶を入れないでも大事ないと仰しやいました　それは昨日の出からしです。』

『これ〳〵、餘計なことを云ふでない。』
『おい〳〵御亭主、そんな事よりも、この綿入は幾らだね。早く極めておくれ。俺は寒くつて堪らないんだ。』
『お寒ければ、もつとこつへお寄りなされ。そんなによく日が當つてゐます。昨日も着物を買ひに來られたお客樣が、なんと云ふ暖い家ぢやらうと云つて、一日そこで日當ぼつこをして行かれました。その方が云はれるには、もう着物を買はないでも大事ない。毎日こゝの家へ日當ぼッこをしに來よう、なんと云つて歸られました。』
『えゝ、じれッたいナ。この綿入は賣らないのかい賣るのかい。』
『いえ〳〵、賣らうと思つて店を開いてゐます。どの品ですかいな。』
『その紺の綿入さ。』
『あ、成程。この方ですと……』と、算盤をパチ〳〵

彈いて、
『左樣サ、ズント安くして、五兩に負けて置きませう。』
『そりや高い。俺達は江戸の者だが、古着のことは商賣柄で詳しく知つてゐる。本當のことを云ふがいい。』
『ぢやァあなた方も古着屋さんで……』
『いゝや、俺は質屋さ。』
そこへ彌次郎も口を出して
『だから、安く負けて置きなされ。』
『ようございます。朝商ひぢや。唯の一兩に負けて置きませう。』
北八は大喜びで
『有り難い〳〵。まづは、綿入に有り附いた。』と、彌次郎にお金を拂つて貰つて、その代りに早速合羽を彌次郎に返し、日當で、その綿入れと着替へました。

かうして二人して、三條の賑ひを見に行きましたが、
『どうだ、彌次さん。俺の買ひ方は旨からう。五兩のものを一兩に落した手際なざあ、誰も眞似者があるまい。古着と云つたつて、未だ襟垢も附いてゐないんだからネ。』と、途々も、北八は大自慢でした。
ところが、だん〳〵賑かな町筋へ出た時に、向うから二人連れの若い綺麗な女が歩いて來ました。擦れ違ひざまに、
『お姉さま、御覽遊ばせ。あの人の着物には、大きな紋が附いてをりますわ。おゝ、をかしい。オホホホ……。』
『ほんに阿呆らしい人だこと。』
それを聞いた彌次郎は、一足さがつて北八の背中を見てゐましたが
『おい〳〵、北八　お前の着物をよく見てごらん背中の眞中に大きな紋がくッついてゐるぞ。』

さう云はれて北八も
『どこに〳〵。』と、振り返つてよく見ると、ちよつと見たゞけでは知れませんが、日當へ出ると、大きな紋があり〳〵と透いて見えました。
『こりや大變大變。』
『おや〳〵、裾の方には鯉の瀧のぼりが見える。それで分つた。これは五月のお節句の幟を、染め直したものに違ひない。』
『畜生、古着屋奴が、とんだ目に逢はせくさつた。道理で安いと思つた。よし、これから一つ引つ返して、あの古着屋の店へ呶鳴り込んで、息の根のとまる程毆りつけてやらなくてはこの胸が收まらぬ。』と駈け出さうとするのを、彌次郎が引き止めて
何だい、今のさつきまで、五兩のものを一兩に負けさせてなんと古着の買ひ方は旨からうと自慢をしてゐたぢやないか。素を糺せば、みんなお前の買ひ方が旨いせゐで起つたことだ。恨むところはない。』
『だつて、あんまり忌々しいものを。』
『しかし、考へて見るがいゝ。あの一兩の金だつてお前が損をした譯ではない。俺の懐から出た金だ。なあに、旅の恥は掻き捨てと云ふから、その着物で方々見物して歩くサ。どうだ、これから芝居でも見ようか。』
『彌次さんの人の惡い。この裝で人中は眞平眞平。早くどこぞ宿を取らうぢやないか。』
『ハハハ……。さうしよう、さうしよう。』
これからまだ、二人は方々でさん〴〵失敗ばかりして歩くのですが、大分長くなつたから、今度はこれで止めて置きませう。

（をはり）

天の河

若山牧水

天の河原を誰渡る
天の河原を誰渡る
千年萬年昔より

まだまだ誰とて渡らない
千年萬年末かけて
まだまだ誰とて渡るまい
天の河原の美くしさ
天の河原の美くしさ

ラム王の頬に、薔薇いろが見えてくると、洞穴のおもてで雉子が鳴き、曙の光がさしこんで來ました。この時魔法使ひと海草の婆さんとは思はず顔を見合せてニッコリしました。

ラム王は、この二人の非常な苦心のおかげで、やうやく生きかへることの出來たのを、どんなに喜んだかわかりません。五へんも六へんも、お禮を云つて洞穴を出てまゐりました。ラム王を持つて來た商人は、この時まだ腰を拔かしたまゝ、恰度木から落ちた熟柿の樣に、ペッタリと洞穴の床にうづくまつてゐました。

ラム王は、洞穴から十五歩ばかり歩いてきた時、ハテナと思ひました。はじめて妙に左の靴のゆるいことに氣がついたのです。さては魔法爺さんのとはき違へて來たのかな、と思つてよく見ると、矢張り自分が故郷エッペ國を出るときからはいてゐる、藤

色に染めた豚の革の靴なのであります。こいつはをかしいな、と思つて切株に腰をおろして脱いでみると、アッとあきれかへつてしまひました。いつの間にか、左足の小指が一本無くなつてゐるのです。しばらく考へてゐるうちに、そのわけが、おぼろげながらわかつて來ました。それは、谷間で商人が鏡の碎けたかけらを拾ひ集めるときに、その一番小さい精心丹位なかけらを一つ忘れて來たからのことだ、と氣がついたのであります。

ラム王は、何だか小指の無のは氣持がよくないといふので、そのかけらを探しに前の谷の方へ戻つてゆきました。全くバクイクイには とんだ災難でした。

谷間に程近いある峠の凹みに出ると、すばらしい人だかりがありました。だんだんそれに近づいてゆくと、沼の端に立つてゐた一人の赤い服の番兵が、いきなり襟首をふんづかまへて、

『貴樣は何だ。』と云ひますから、

『俺はラム王だ。』と答へますと、いきなり大きな聲をはりあげて、

『敵の王を生捕つたよう。』と怒鳴りながら、縄でしばり、ひっぱつてゆきました。そこには繪の樣な美しい王樣や、澤山な兵隊が雀踊をして待つてゐました。まづ八字髯の王樣が、可愛らしい唇をあいて、

『不埒極まる敵の王よ。胸に手をあてゝよく／＼考へて見い。我が領土内に於て拾得したる得がたき金屬の寶物を、何の理由もなしに慾得に目を眩ませて攻め取らうとは、犬畜生にも劣る了簡ではござらぬか。』と、ベラ／＼喋りはじめました。

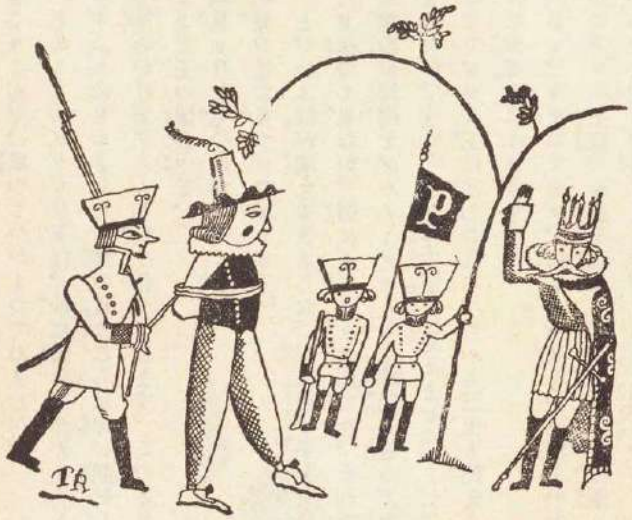
『何を云つてるんだい。僕は只通りがゝりの旅人でお前さんに「敵の王」などゝ云はれる覺えはないんだ。いくら睡眠不足だつてねぼけちや困るよ』

ラム王の返答を聞いて、王樣は一寸變な顔をしました。

『然れども其方は、先刻我兵に捕縛さるゝ際に、王と

名のつたといふではないか。』
『王には違ひないがラム王だ。』
この時王様は一寸白髯侍従長をふりかへつて、
『おい、こいつは間違ひの品物らしいぞ。』
と、蚊の様な聲で囁きました。それから又向直つて、
『そのラム王とやら申す男、この國内に於て、朕より勝れたるものは、いつ何時たりとも王位を受け継ぐ掟なるにより、今其方と「物試し」を致すであらう。覺悟を致せ。』
と、申しました。ラム王は、

『覺悟なんざァとつくに致したよ。』
と、すましてゐました。
『然らばまづ、朕は數度の戰ひにより、左足の小指の爪に彈傷を受けて居る。其方にかゝる武勇の記念があるか。』ラム王は靴を脱いで、
『僕は左足の小指なんぞ第一ありやァしないよ。』
と、四本の指をさし出しました。王はたちまち、
『ヤ、セヤセヤセヤ。』
と、叫んで自分の額をピシリと打ちました。これは「正にまゐつた。」といふ言葉なのであります。
『然らば、エヘン、名前の長さに於て朕を凌ぐことが出來ると思ふか。』
『ちやァまづ君の名前から云つて見たまへ。』
『あまり長いので朕は一寸程忘れ致した。こりや侍従長、朕の名前をこの者に申し聞かせい。』
侍従長はまづべら棒に長いお辭儀を一つしてから
『恐れ多くも畏くも、陛下には御名を、カラカラカ



ツト、エンヤラヤツト、ペコペコ、ピラピッピ王と申し上げます。』と、朗らかな聲で呼びあげました。ラム王はクスリと笑つて、
『なんだ、そればつちか。たつた二十二字だ。我輩は通稱ラム王　本名は、フンヌエスト、ガーマネスト、エコエコ、ズンダラー、ラム王といふので、王は位ではなく名前の内にくつついてるんだ。そこで君より二字も多いや。』
『ヤ、セヤセヤセヤセヤ。』と、ピッピ王は、また、たちまち、まゐつてしまひました。
『然らば、エヘン、これよりかくれん坊を致すであらうぞ。』と云つて王は居なくなりました。
ピッピ王は急いで宮殿へはひり、白粉をつけて女の着物に着かへ、二百人程の宮女の中へ紛れ込んでキューキュー胡弓を鳴らしてすましかへつてゐました。ラム王はカナブンブンになつて、窓から忍びこみ、それからまた蚤になつて、ピッピ王の袖口から

もぐりこんで、默つてつかまつてゐました。

そのうちにビッビッ王は、妙に體をモヅ〳〵〳〵ゆすぶりはじめました。外の官女たちは赤い顏をして袖のかげでクス〳〵笑ひ合つてゐます。このときビッビ王の懷の中で、

『見つけた見つけたビッビ王』

『見つけた見つけたビッビ王』

と、いふ聲が聞えてきました。王は懷へ手を突込んで探つて見たが、何にも居りませんでた。それから御殿の周圍をグル〳〵グル〳〵二時間も廻つてゐましたが、とう〳〵ラム王の姿は見えませんでした。そこでビッビ王は悲しさうな、しかも三里も聞えさうな大聲をはりあげて、

『あゝ、セヤセヤセヤ、何とかで何とかで何とかのダラーラム王樣、お姿を現はして下さい。位は讓りましたよ。』と、叫びました。ラム王は袖口からポロリとこぼれ落ちて、

『そんなわるでかい聲をするなよ。』と云ひました。

ビッビ王は男の着物にきかへ、急にペコペコして

『陛下には御機嫌美はしく渡らせられ、臣恐悅至極に存じ奉ります。』と云つて、恭しく頭をさげました。

ラム王は、わざとそり身になつて、

『朕は、其方を今より家來と致すであらうぞ。其方は名を、カラカラット、エンヤラヤット、ペコペコ、ビラビッビなどゝ申し、生れながらにしてペコペコ致して居る。家來にはいともよろしき名前であるぞよ。』

と、申しました。ビラビッビは急いで、

『時にラム王樣、我國は目下危急の場合でございます。先程も生禮申上げましたる通り、敵王が無法にも……。』

と、云つてるうちに、喇叭と太鼓の音が聞えて、バラバラと敵の攻めよせる氣勢ひがしして來ました。

『無法にも……、そのヱヽトどこまで申上げましたか。』ビッビはブル〳〵とふるへ出しました。

『左樣です無法にも、我國の領土内で拾ひました金屬の寶　奪はんが爲め……』

ドン、ドン、ドカン、バラバラバラッ。

『そそその、あゝいけない、あゝ。』

ドカン、バン、バチバチバチ。

『しつかりせい。』

『ヘイ、只今攻めよせてをります。どうかお救ひを……。』

『兎に角、その寶の金物と申すを朕に見せい。』

『これにてござります。』

ビラビッビがふるへながら、青い箱の蓋をあけました。ラム王が、

『おゝこれか。』と云つて拾ひあげた時、敵兵は宮殿の中へドカ〳〵ッとはひり込んで來て、

『寶はあつたぞ、サアこつちのものだ。グヅグヅ拔かすと臍の穴を蹶上げてしまふぞ。』

と、眼をむき出しました。ラム王はフンと鼻で笑つて、その小さな金物にちよいと唾をつけて、左の足の小指にくつつけたかと思ふと、そのまゝ小指になつて接かつてしまひました。

『これだよ、俺の探しに來たものは、寶物だとか何とか云つて、何物かと思つたら、俺の小指ぢやないか。人のものを寶物も聞いてあきれるよ。アッハッハッハ……。』

ラム王は笑ひ出してしまひましたが、敵も身方もびつくり仰天してしまつて、中には重なり合つて尻餅をついた者さへありさす。敵の兵隊はすつかり力抜けがして、

『ナーンダ、馬鹿馬鹿しい。不思議な寶物はラム王の足の小指なんだよ。狐につまゝれた樣ないくさだ。引上げろ、引上げろ』

と云つて、歸つて行つてしまひました。

處が、この時何を思つたかピラビッビは、キッと四角ばつて、

『こらラム王、其方は最早王たる資格は失つてしまつたぞ　先程朕との「物試し」に、其方は左足の小指の無いのを以て一勝致し　ではないか　今では足に立派な五本の指のある以上、朕より一段と下つたる次第なるぞよ　今よりこのペコペコ、ピラビッビ王の臣としてつかへるならよし、さもなくば一刻も早くこの城下より消えて無くなれ』!!!　と、とんでもない威張の方です。ラム王も、なるほどうまい處へ氣がついたものだ、と思つたし、第一指さへ滿足になれば、こんな玩具の樣な國の王樣に未練はないので、潔よ　四度目の王位をすてゝ、

『ちや　失敬。』

と、云　たまゝ出かけてしまひました。

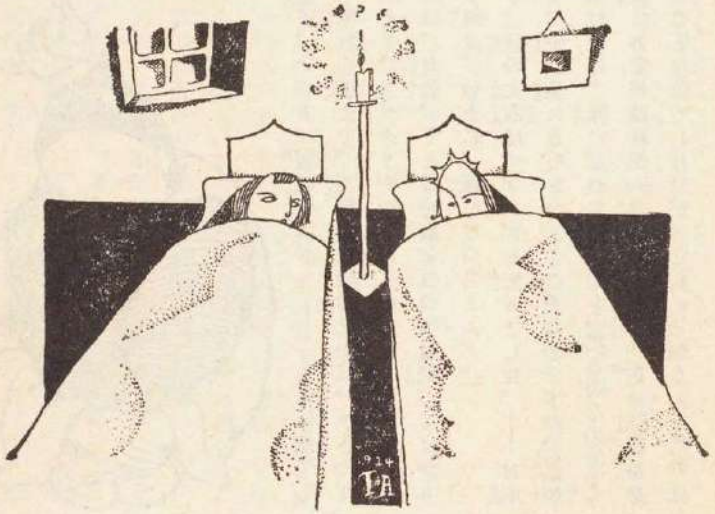
する　恰度それから十二晩目に、湖水のへりを、向ふの方からトボ〳〵と歩いてくる一人のお星樣に出喰はしました。お星樣は無愛想にたづねました。

『君は今迄よく方々で出逢ふ男だが、一體どこへ行く氣でブラ〳〵してるんだい。』

『西の方へ行くんだ。』これを聞いてお星樣は、鈴の樣な聲を出して笑ひました。

『西つて君、馬鹿だなア、地球といふものは圓いんだから、折角西へばかり行つてゐると、又もとのところへ戻つてしまふよ』

『まあ、何でもいゝよ　西の方に用があるんだから



仕方がない。』

『とにかく今夜は、この湖水端のホテルへ泊らう。それから君の了簡をよく聞いて、僕の知つてることはみんな教へてあげるとしようから。』

それから間もなく、二人はホテルの一等室へ泊りこみました。ホテルの入口には……、、、くらげの面ホテル……とかてありました。

ラム王は、星なんかといふものは一體、どんなものを食べるものかしら、　思つてゐると、お星樣は『とろゝ』と、螢草と、角砂糖とを注文しました。やがてお星樣は、小指と母指とで、巧みにスプーンを持つて『とろゝ』を啜りながら、

『僕は流れ星だからね。』

と、云つてニヤリと笑ひさした。

二人は食事がをへると、ベッドの中へはひつて、互にチョコン　首だけ出して話しはじめました。

（つゞく）

豚小僧（支那滑稽童話）

畑耕一

旦は、いつも、居眠りばかりしてゐる小僧でした。朝から晩まで、飯を食ふ時のほかは、きまつてコックリ、コックリやつてゐるのでした。

『おい、旦公、そんなに飯を食つては眠つてばかりゐる奴は、いまに、豚になつちまふぞ。』

と、旦の主人は、プンプン怒りました。――日本なら、牛に生れるぞといふところなのですが、話が支那だけに、豚になつちまふぞと、叱る譯なのです。

旦にあてがはれた一日の仕事は、一疋の豚の番をすることなのでした。が、なにしろ暇さへあれば――いや暇がなくても居眠つてばかりゐるのですから、とても豚の世話をすることなんかできません。主人は叱つたり、おどしたり、時には癇癪を起して、居眠りしてゐる旦の頭に、拳固グワンと喰はせたりしましたが、旦は一向平氣で、痛いといふ顔をするでもなく、またコックリ、コックリとやつてゐるのでした。

『いや、こいつはもう、とうに豚になつてやがるんだ。』

と、主人は叱るよりも、まつたく呆れかへりました。

或る夏の暑い午でした。

『おい、旦公。今日は、豚を賣つてしまふんだ。貴樣みたいな居眠り番人に、豚一疋だつて安心して委かされやしない。おれはこれから町へ出て、買手を見つけて來るから、せめてその間なりと、一度居眠りをしないで番をしてゐろよ』

と、主人はいひました。

『承知しました。今日は大丈夫、居眠りなんかしませんよ。早く行つていらつしやい』

と、旦は元氣よくこたへました。

――が、主人が出てゆくと、旦はすぐ、例のとほりコックリ、コックリ、心持よささうに居眠りをはじめました。それでも今日はしつかり豚の番をしようと思つてゐるので、旦は、夢うつゝのなかにも、豚のグウグウ啼く聲だけは、氣をつけてゐました。

しばらくすると、どうも豚の啼き聲がせぬやうです。おや、變だなと氣がついて眼をあけると、自分のそばにゐた豚が、どこかへ行つたのか、姿を見せません。

『さあ、大變だ。今日はあれほど大丈夫だと、うけあつたのに、居眠りした間に豚がゐなくなつたとすると、旦那は、おれを足で蹴飛ばすくらゐでは、すませないにちがひない。これはえらいことになつたぞ！』

旦は、蒼くなつて、あたりを見廻はしました。すると、家の裏口のところを、白い長い衣をきた、白い長い髯を生やした爺さんが、ノッコリ、ノッコリ杖をついて彼方へゆくのが眼につきました。

『グウ、グウ、グウウ！』

豚の啼き聲が、どうやらその爺さんの蔭から、聞えて來るやうです。

旦は、爺さんの傍へ、駈けつけました。

『おい、お爺さん。白い衣のお爺さん！　お前だね、おれの番してゐる豚を盗つたのは！』

と、旦は、大聲でどなりつけました。

『なんだ？　豚だ？　わしはそんなものは知らんよ』
と、爺さんは、ちょつと立ちどまつて、迂散くさい眼で、旦を振りかへりました。
『嘘をつけ、そら、そんなに、お前の衣の蔭で、グウグウ豚が啼いてるぢやないか』
『これは豚の啼き聲ぢやないよ。わしは今朝、瓜をたくさん喰つたから、それでわしの腹がグウグウ鳴つてゐ　んだよ』
『馬鹿いふな。お前はその長い衣の下に、豚をかくしてゐるんだ』
『はゝゝ、お前こそ馬鹿をいふ。豚の啼き聲と、腹の鳴る音と、聞きわけがつかんのかい』
爺さんは、輕く笑つて行かうとしました。
『どつこい。この豚泥棒奴！　お前をやつてなるものか！』
旦は、いきなり、爺さんの持つた杖を、グッと強くつかみました。

すると、不思議！　旦は、なんだか、總身がしびれるやうな心持がしました。と、思ふと、バッタリ兩手を地面に突きました。旦はあわてゝ起きあがらうとしましたが、どうしたことか、起きあがることができません。おや？　と、思へて、よくよく自分の身體を見ると、いつ　間にか、鼻が漏斗のやうにとんがつて、胴が馬鈴薯のやうにまるく肥り、いつぱいに汚い毛が生えて、彼は立派な一疋の豚になつてゐるのでした。
『おい、小僧！　お前は居眠りして、豚をどこかへ逃がして置きながら、むやみに人を疑ふとは、怪しからん奴だ』と、爺さんは、嚴かな眼でにらみながらいひました。『わしは南の山に住む、白松子といふ道士（學問のある魔法使ひ）ぢや。お前のやうな不埒者に疑はれては道士としての面目がたゝぬから、その罰として、お前を豚にしてやつたのぢや　どうだ、思ひ知つたか！』

旦は、びつくりしました。これは自分が惡かつた、なんでもこの爺さんに詫びをいつて、もとの人間にかへして貰はなくちやならぬと、頭をさげて、おゆるしください〜〜と泣きましたが、その聲はたゞ、『グウ、グウ、グウウ！』と豚のやうに響くばかり、爺さんにすがりつかうとしても、四つの足は　ヨチヨチ動くばかりで、とうとう足早に立ち去る爺さんに追ひつくことはできませんでした。
『グウ、グウ、グウウ、グウ、グウウ！』
旦は、ゆゑしてください、わたしが惡かつたのです、と泣きましたが、それはもう爺さんの耳には通じ

ません。――たうとう、爺さんを見失つてしまひました。

『グウウ！　グウ！　グウウ！　グウ！』

彼は、地面にころがり廻つて泣きました。

そこへ、旦の主人は、豚買ひをつれて歸つて來ました。眼のギョロリとした、鼻の平たくひしやげた唇の厚い、意地惡るさうな男でした。

『おや、旦の奴はどうしたのだらう？　こんなところへ豚を棄てゝ置いて、またどつかで居眠りをしてゐやがるんだな。よし、今に探し出して、思ひきりひどひ目に會はしてやらなくちや……』

と、主人は、眞赤になつて怒り出しました。

『もし、もし、御亭主、まあ、怒るのは後のことにして、これがお前さんの賣るといつた豚かね？』

と、豚買ひは、持つてゐる繩で、旦の頭をピシリと擊ちました。

『おゝ、さうだよ。この豚だよ』

『なるほど、お前さんのいふとほり、よく肥つた美味さうな豚だ。これなら、銀貨十枚の價値はある。すぐ買ひますよ　……今夜は、まちの庚といふ金持の家で、大酒宴があるんだ。丸煮にするやうな、肉のやはらかな豚を探して來てくれと頼まれてゐるんだ。この豚なら、きつと肉もやはらかく、美味いにきまつてゐる。さあ、賣つて貰ふぜ』

と、豚買ひは、殘忍たらしさうな笑ひ聲で、繩をしごきながらいひました。

旦は、いよいよびつくりしました。――こいつは大變だ。この豚買ひに賣られたら、すぐこの繩で堅く縛られて、長い道路を、ゴロゴロみじめにひきずられて、それから恐ろしくドキドキ光る大きな斧で、腦天をグワンとやられて、皮を剝くと、すぐグラグラ油の沸えかへる釜のなかへ投げ込まれる――こいつは、大變だ。あゝ考へても恐ろしい。もし、旦那樣、わたしは、ほんとうの豚ではありませんよ。わたし

は旦ですよ。あなたの忠實な小僧の旦ですよ！』

と、旦は兩手で、いや、二本の前脚で、バタバタ地面をたゝきながら泣きましたが、それはたゞ、

『グウ、グウウ！』と、豚の聲が繰りかへすに過ぎませんでした。

『ほう！　こいつはよく啼く豚だ。なかなか元氣がある。こんな豚は、きつと美味いよ。丸煮には持つて來いだ』

と、豚買ひは、大よろこびです。

――大變だ。わたしは殺される――わたしは豚ぢやない。人間の、小僧の、旦ですよ――助けてくれ助けてください！――

と、彼は、もがきまはりましたが、遂に、銀貨十枚に代へられて、四つの脚に、犇々と繩をかけられました。

『さあ、これから、旦の奴を探し出して、うんと叱りつけてやらなくちや……』

と、主人は、裏の納屋のほうへゆきかけました旦が、旦那樣、旦はこゝにゐるのですよ。どんなに

ひどい目に會はされてもいゝから、この豚買ひに、わたしを賣ることだけは、ごめんください——と、一生懸命にわめき立てましたが、やつぱり、どこまでも『グウ、グウウ！』だけのことで、たうとう彼は、豚買ひに、十文字に繩をかけられ、ゴロゴロひきずられてゆかねばなりませんでした。

『グウ、グウウ、グウ、グウウ！』

『おや、こいつはありがたいぞ　こんなに元氣よく啼く豚は、よつぽどいゝ食物を　てがつてあつたに違ひない　丸煮には極く上飛切りの豚だ！』

『グウウ、グウ！　グウ、グウウ！』

『いや、いつまでも騒らないで元氣な豚だ。ありがたい〳〵！』

——旦は、遂に、豚買ひの家に、ひきずり込まれました。

豚買ひは、旦の考へたとほり、すぐ、壁に懸りさげてある、ドキドキ光る大きな斧を取つて、エイッと兩腕に力をこめて身構へました——わつ！　た、た、助けてくれ！　た、た、た、助けてくれ！——と、旦は、聲をかぎりに叫びました。

グワン！……！……旦は、腦天をやられて、氣が遠くなりました。

『……また、居眠りやがつた。こいつ奴！』

倒れた旦の耳に、はげしい怒鳴聲が入りました

ハッと眼をあけると、主人が拳固をにぎつて、自身の前に怒つた顏で立つてゐます。

『おや？　わたしは死んだのぢやありませんか？』

旦は、寝ぼけた眼を、パチパチさせました。

『死んだのぢやないかつて？　馬鹿！　いつでも死んでるやうに、眠むりこけてゐやがるぢやないか、馬鹿！』

主人は、拳固で、旦の頭を、また、ポカリとなぐりつけました。

『グウ、グウウ！　グウ、グウウ！』

旦の傍で、豚が啼いてゐました。

『はゝ、こいつは、いゝ豚だ。よく肥つてらあ。すぐ言ひ價で買ひませうよ。——さあ、銀貨十枚！』

眼のギョロリとした、唇のひしやげた、鼻の厚い男が、手にもつた繩で、ピシャピシャ豚の頭をたゝきながらいひました。

——旦は、三度びつくりして、しきりに二つの眼をこすりました。

『はゝゝ、この小僧かね。お前さんかさつき、居眠りの厄介小僧といつたのは？』

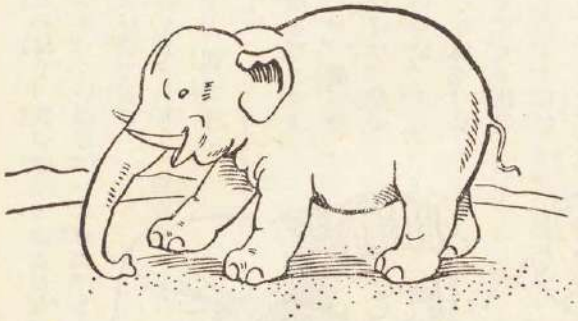
豚買ひは、惡地惡るげに笑ひました。

——お話はこれでおしまひです。なぜなら、わたしは居眠り小僧の旦のお話をしてゐるので、その居眠り小僧の旦はいま、眼をさまし、そして、これから以後は、もう、決して居眠りをせず、忠實に主人のために働いたからです。

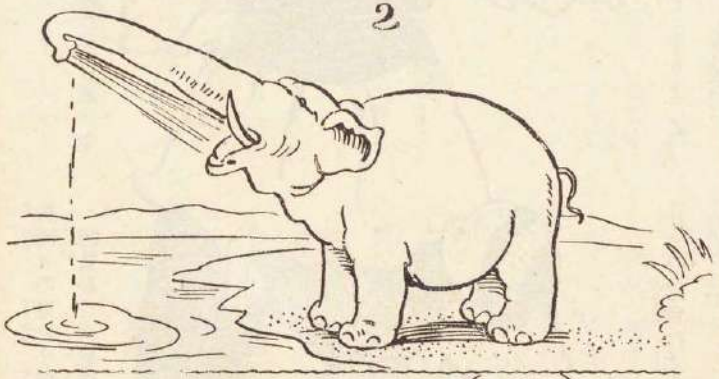
（をはり）

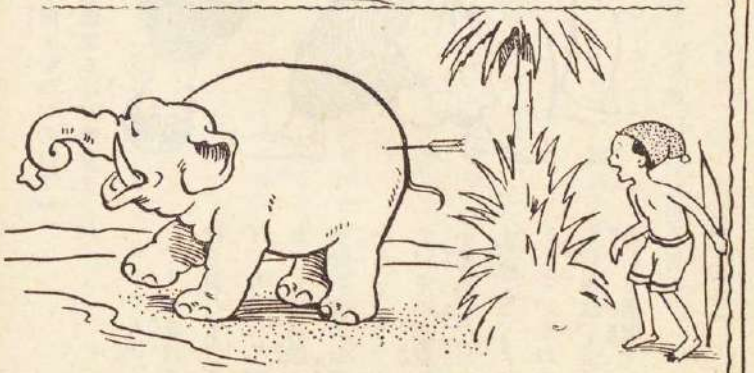
ホ・シロー・ヒルム
（シャボテンの巻）

1

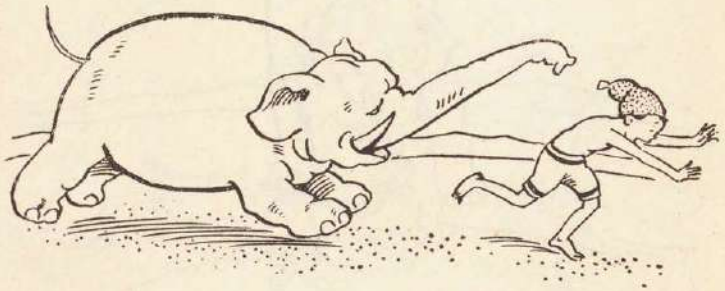


2

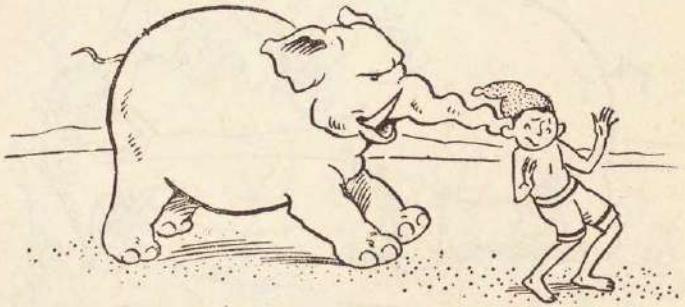




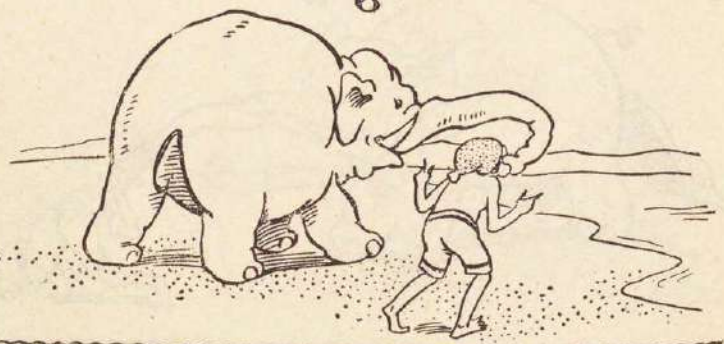
4

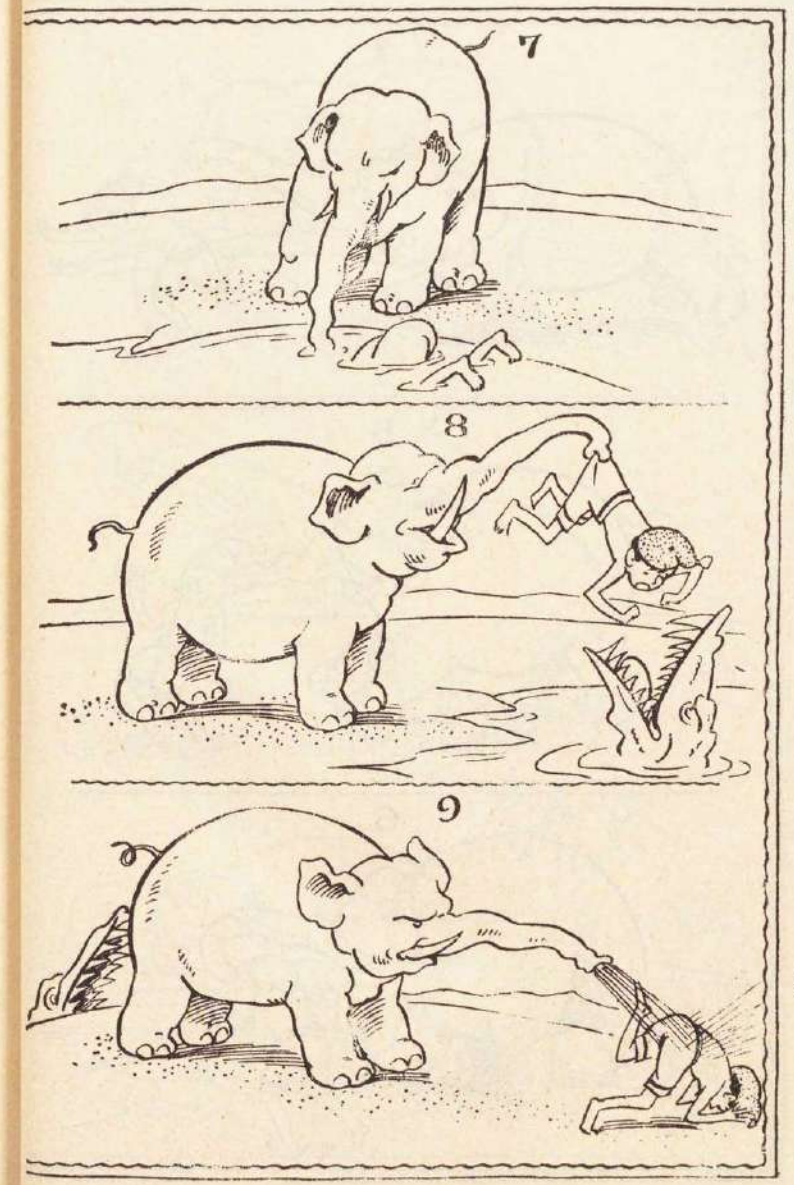


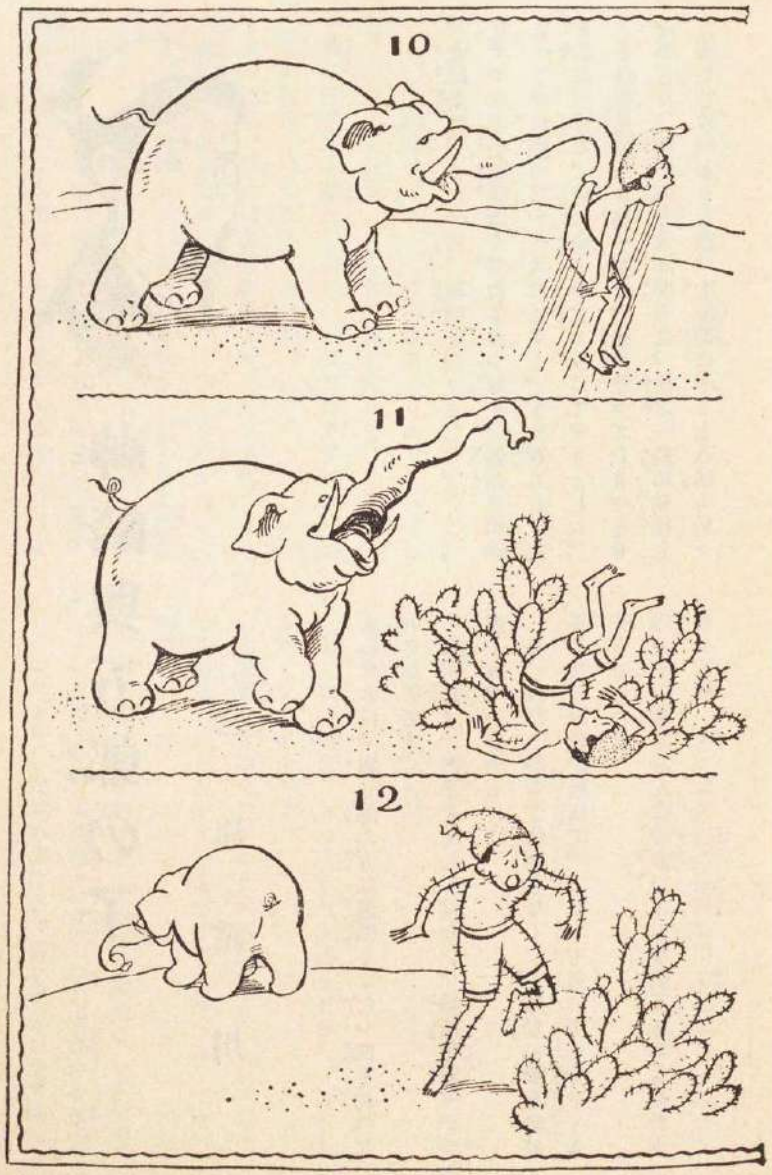
5



6




7
8
9


10
11
12

神崎與五郎の子

三島霜川

一

太郎助は、また一匹、黒鯛を釣りました。そして、ピチ〳〵と小氣味よく刎ねてゐる奴を、器用につかまへて、魚籃のなかへ入れますと、また新らしい餌を鈎につけて、靜に向ふの方へ投げてやりました。

それを見てゐた與一郎は、腹が立ッてたまりませんでした。與一郎と太郎助とは、殆ど一緒に釣出したのでございましたが、太郎助はもう七八匹も釣りましたのに、與一郎の方は運惡くまだ一匹も釣れなかッたのです。

與一郎は、ヂリ〳〵して、『おい、場所を取りかへてくれないか』

と、さッきから、何度となく、太郎助に聲をかけました。それが横柄で、まるで下男にでも命令するやうでした。

『いやです。そんなづるいことを云ふものぢやありません』

と、太郎助はその度に、叮嚀に斷りました。

『だッて、こゝは少しも釣れないのだ。意地の惡いことを云はないで、お前、どッか好いところへ行ッてくれ』

と、與一郎は、そんな勝手なことを云ひました。

『可けません。坊樣こそ、どッか好いところを探したら可い』

と、太郎助は、どうしても動きませんでした。そして、後から後から、すてきな奴を釣りました。二人の間は五六間と離れてゐなのに其れですから、與一郎は口惜しくてたまりません。

與一郎は、後に、『赤穗の義士』として名高くなッた神崎與五郎則休の一人子で、このとき年が十一でした。太郎助はまた、赤穗城下に近い『かりや濱』といふところの庄屋の悴で、年は九ッ――いくら子ども同志でも、赤穗の家中、三百石取りの侍の子と、領内の百姓の子とでは、身分が違ッてゐました。それで、與一郎は、百姓の分際で、生意氣な奴だ』と、思ッて、無理に、太郎助をどかせて了はうとしたのでございます。

『どかないか、こらッ』

與一郎は、釣竿を投出して、ヅカ〳〵と太郎助の傍へよッて行きました。

太郎助は、傍目もふらずに、じッと釣竿のさきを見つめてゐました。

『どかないか、いよ〳〵……』

と、與一郎は、きッとした決心を見せて、おどしてかゝッたものです。

太郎助も意地でございます。『誰がどくものかね。この海は、あなた一人の海ぢやありません……』

『何をッ！』

と、與一郎は足をあげて、太郎助を蹴飛ばしました。

ふいを喰ッて、太郎助は、危く磯の岩端から落ちさうになりました。『あぶない。何をするンです』

と、よろめく足を踏みしめて、きッとなる――土足にかけられては、そのまゝでは濟まされぬといふ反抗心が、顏ぢうに迸ッて來ました。

『どけといふに、どかないからだ』

『蹴るといふ法があるものか』

『おれは、侍だぞ』

と、與一郎は、相手の權幕が、思ッたより烈しいのに、ちよッと怯えながらも、小さな腰刀に手をかけて見せました。

『侍だッて、亂暴なことをして可いといふ法があるものか』

と、太郎助は、ひるみません――しかし、手出しをしようとはしませんでした。

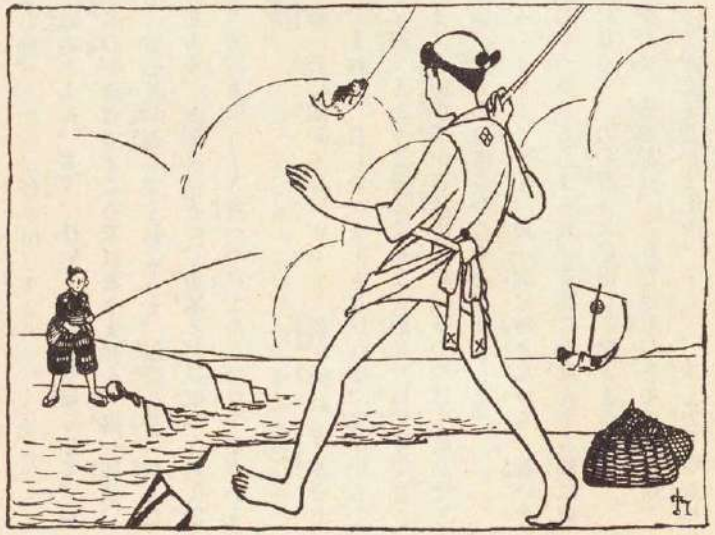
そこへ付込んで、『何ッ』と、云ひざま、與一郎はぐいと一ッ突飛ばして置いて、前よりも勢込んで蹴る――その足と手とが、殆ど同時に太郎助に襲ひかゝりました。

もし、太郎助が、なみ〳〵の百姓の子でありましたなら、むろん、へたばつて、泣出したかも知れません。與一郎も、多分、さう、うまく行くだらうと思つてゐました。さうして、背なかを思ふさま踏みにじつてまんまと『釣の場所』を占領してやらうと思つてゐたのでございます。

ところが、太郎助は、すばやく身をかはしましたそれで、蹴るには蹴つたが、當りが弱かつたので、與一郎の方が反つて、はずみを喰つて、前へ踏つたのです。そして、手を突いた拍子に岩角で掌を擦りむいた――眞つ紅な血が滲出て、タラ〳〵と手首へ流れました。

その血を見て、與一郎はかつとなつて了ひました。そして、亂暴に、太郎助に武者ぶりついて行きました。

日は朗かに照つて、渚も、沖も、一樣に靜な秋日和でございました。濱には、鹽を作る人が、あちこちに働いてゐましたが、磯の方の二人の喧嘩に氣を留める者はありませんでした。



二

與一郎が、我むしやらに武者ぶりついて行きましたときには、太郎助も『よし、やッて遣る』と決心をしました。さうして、突き飛ばせば、はづして、撲りつける。撲つて來れば、蹴かへす。蹴つて來れば、ヒラリとかはして、組みつく。やがて、双方、滅茶苦茶に撲り合つて、それから上になり下になりして、さん〳〵に取つくみ合ひました。

太郎助は、九つにしては大柄でありました上に、親々が自慢するほどの力がありました。與一郎も、『義士』と云はれるほどの父の血筋を引いて、きかぬ氣の侍魂はありましたが、力では、とても太郎助にかなひませんでした。さうして、とう〳〵組伏せられて、太郎助に、ぎゆう〳〵首筋を押へつけられ

ました。

二人ともに、もう、ひい〳〵、息を切らして、お互に口がきけるどころではありません。與一郎は、どうかして刎返してくれようと、無茶苦茶に蹠くだけであり、太郎助はまた、出來るだけ取つちめて遣らうと、ぎゆう〳〵押へつけてゐるだけでございました。

與一郎の眼からは、ボロ〳〵涙が流れて來ました。それは、苦しいからでもなければ、痛いからといふ譯でもありませんでした。敗けた口惜さでございます。侍の子が百姓の子に、『やつつけられた』といふ、只その口惜さからでございました。

『ム……ム……』と、與一郎は呻きながら、蹠いて刎ねかへさうとしました。それこそ死んでも闕はぬ氣になつて、力の有りたけ出して蹠きました。

やがて、太郎助は、これだけ取つちめて遣れば、もう充分だと思ひました。そして、少し力をゆるめて、傍へ退かうとしますと、その途端、與一郎は太郎助の股のあたりを蹴つて飛起きました。

『まだ、やつて來やがるな。弱蟲め』

『なにつ……』

と、與一郎は、腰刀を拔いて、いきなり斬つてかかりました。

双の光に、太郎助は惚つとして、思はず知らずたじろぎました。しかし、それに怖れ縮んで、狼狽へもしなければ逃げもしませんでした、彼には、不思議な落付と、勇氣とがございました。

與一郎は、口惜まぎれでございます。踏込み〳〵滅多やたらに斬りかけました。その眼は、殆ど眩んで了つてゐました。

太郎助は、棒きれ一つ持つてゐませんでしたが、しかし、背を見せて逃出しては、反つて、苦もなく斬伏せられて了ひさうに思はれました。それで左へ避け、右へかはし、或は、すばやく、かいくぐつて、

双さきを逃げ廻りました。

けれども、與一郎も狂氣の勢でございます。鋭く迫つて行く双のさきが、危く太郎助の頰や肩さきへ觸れかゝつた事も三度や四度ではありませんでした。

氷のやうな双の光は、秋の日に閃いて、キラリキラリと光ります。濱の方から見ますと、その恐ろしい喧嘩も、まるで廻燈籠の影のやうに、たゞ二つの人影が、靜に、しかも、目まぐるしく動いてゐるとしか見えませんでした。

『喧嘩らしいな。や、片一方が、双物を振り廻してゐる……』

間もなく、鹽を作つてゐる者のうちで、それと、氣がついた者がありました。

『危ない、危ない……よさないか、お――い、よさないか』

と、聲をかぎりに喚き出しましたが、しかし、二人の耳には入りません。それほどに二人は、一生懸命になつてゐました　また、距離も、だいぶ遠かつたのでございます。さうして、やがて濱ぢふの者が大騒ぎに騒ぎ出しました。

『一體、どこの子どもな』

『解らないよ。一人は、たしかに御家中の坊樣らしいが……』

『何んにしても、どえらい喧嘩をするもんだ……あつ、あぶない……これあ、うつちやつて置けないぞ、さあ、ござれ〳〵』

さう云つて、三人、五人と、磯ばたの喧嘩場へ駈けつけました。

恰度ど、そのとき、太郎助は、何かの、はずみで、與一郎の背から組みついてゐました。そして、與一郎の刀をもぎ取らうとして、互に、必死に爭つてゐました――必死に爭ふといひますと、いかにも、しつかりしてゐるやうに聞えますが、その實もう、二

人ともに、ひよろ〳〵して、たゞ、やつと最後の氣力を出し合つて、刀を取らう、遣るまいとしまして、覺束なくも手先きを動かしてゐるだけでございました。太郎助も、二の腕に三ヶ所も、かすり疵を受けて、血が手首から甲の方へ流れて、ポタリ、ポタリ滴つてゐました。

此うなつては、强いも、弱いもありません。勝負は、運、不運でございます。二人は、只、眼を光らせ、刀を取合つてゐるだけで、もう格別、相手を何うしようといふ、ハツキリした考もなかつたのでございます。さうして、二人ともに、顏ぢうに油汗を流して、ひい〳〵云つて居りました。

もし、濱から駈けつけて來ました者が、二人を引き分けましたならば、二人は何んの意地張りもなく、双方へ引き分かれて了つたでございませう。それほどに二人は、へと〳〵に疲れ切つてゐました。

しかし、濱から駈けつけて來る者の來ようが、一と足、遲かつた！　それで、二三人の者が駈けつけて、もう十歩ほどで二人に近づかうとしましたときに、二人は、よろ〳〵として、折重なつて倒れました。そして、與一郎が下になつたのでございます。

『やッ、あぶない……』

と、駈けつけた者は、ヒヤリとして、思はず立停まりました。

太郎助は、すぐに起上りましたが、與一郎は、起上がり得ずに、ム、ムと、かすかに呻きながら、手足を突つ張つて、二三度ほど恐ろしく眼ききました。そして、バツタリ、靜になつて、手足をビク〳〵させるだけになつて了ひました。

『えらいことになつたぞ』

と、駈けつけた者は、固唾を呑みました。そして、ソロ〳〵與一郎の傍へ立ちどまりました。與一郎の脇腹から、血が泉のやうに流れ出してゐました。

『とんだ事になつたな』

と集つて來た者は、皆な顏を眞つ青にしました。與一郎はもう、息が有るか無いかになつてゐました。

三

太郎助さん、大變なことをしちやつたな、御家中の坊樣を、こんなにしちや、下手人と云つてな、お前さんもお仕置を受けなけりアなるめえよ』

少くして濱の者が云ひました。そして二三人の者に神崎の邸へ、二三人の者は、庄屋太郎兵衞の方へ、この血塗れ騷を知らせに行きました。

太郎助は、さすがに顏色を變へてゐましたが、しかし、落ちついて俛れたまゝ、じつとして居りました。そして、大勢から、かはる〴〵尋ねらるゝまゝに、喧嘩になつた一部始終を答へました。それが、一言々々、版を押したやうにハツキリしてゐて、小氣味が好いほどでございました。

『いくら侍だツと云つて、あんまり無法だから、や

つてやつたんです。しまひに刀を拔いてかゝつて來たから、こんなことになつたんだ』

と、云つて、太郎助は與一郎の死骸を見て、暗い顏をしました――その顏つきに、氣味が好いといふよりも、氣の毒だといふ心もちが、溢れてゐました。

『お前、相手が刀を拔いたら、何故逃げて了はなかつたのだ。』

と、濱の者の一人が、詰るやうに云ひました。

太郎助は、チラと其の男の顏を見上げたまゝ、何んとも答へませんでした。そして、また、うつむいて、じつとなりました――皆なは、めそ〳〵泣かないだけでも、けなげな事だと思つて、その度胸の据つてゐるのに感心しました。そこへ、庄屋の太郎兵衞が、息を切つて駈けつけて來ました。

濱から、與一郎横死の悲しい報せが行つたときに神崎與五郎は、お城から下つて來て、衣服を着かへてゐるところでございました。

若黨が、それと取次ぎますと、『ナニ、倅が……』と、與五郎は、さつと顏色を變へて、『とにかく、その濱の者どもを、庭さきへ廻すがよい』と、指圖しました。

與五郎が、大石内藏助等四十七人の一味と共に、吉良上野介の邸へ討入つて、首尾よく主君の讐を取りましたのは、卅七の年でございます。それで、この與一郎横死のときは、卅四五まだ〳〵血氣盛な頃でした。それが、最愛の子が、喧嘩で非業の死を遂げたと聞いたのですから堪りません。

『よし〳〵、次第によつては、その庄屋の小倅の細首を打落して、與一郎に手向けてくれよう』

と、さういふ量見もありました。そして嘆くよりも、武士の意地と憤とが、體ぢうに燃え立つて居りました。

しかし、與一郎の母は女心でございます。『あなたどう致しませう。かういふ事になりますのが、蟲が

知らせたのでございますか、あれが、今日、出て參りますときに、わたくしは何故か心がかりでなりませんでございました』

と、泣き沈んで、正體がありませんでした。

それを聞きますと、與五郎も、胸が張り裂けるやうでございました。が、與五郎は、赤穗の家中でも、『氣が練れてゐる』と、云はれまして、讃められてる武士でした。氣が、かつとなつてゐましても、我慢をすることを知つてゐました。

『未練らしく、何を泣く、武士の家に生まれた者のならひ、いつ、どこで命を果すか知れぬのだ』

さう云つて、與五郎は妻を叱りつけました。それが、切ない〳〵思をこらへてゐるのでしたが、傍から見ますと、落ちついて、いかにも潔く見えました。そして、若黨等に、疾く與一郎の死骸を引き取つて來るやうに吩つけました。

やがて、濱の者等は、オヅ〳〵庭さきへ廻つて來ました。

『御苦勞であつたな。まア、それへ掛けるがよい』

と、與五郎は、いつもより、いつそ落ちつきを見せて、穩に云ひました。さうして、濱の者どもに、縁に腰をかけさせました。

それから、だん〳〵樣子を聞て見ますと――元よりざつとした話ではありましたが、どうも與一郎の方に無理があるやうに思はれました。喧嘩のおこりも然うなら、第一、與一郎が刀を振廻し、太郎助の方が素手であつたといふだけでも、與一郎の方が不所存をしてゐるやうに思はれて來ました。

『これは困つた、與一郎め、親の顏へ泥を塗り居つたのかも知れん』

さう考へますと、與五郎は、憤も悲しみも、どうすることも出來ないやうに苦しい心になりました。

『太郎助は、しかと、素手ぢやつたな』

與五郎は、きつと念を押して見ました。

『へい〳〵、毛頭、いつはりは申し上げません。太郎助ことは、棒きれ一つ持つてゐなかつたのでございます』

與五郎は、いよ〳〵暗い心もちになりました。それに死にざまも惡い！――折重なつて倒れた拍子に、自分の刀で自分の協腹を突いたといふことも、武士の子として、この上もない恥辱でした。

『どう考へて見ても、與一郎の方に好いところがない』

與五郎は、ます〳〵心苦しくなるばかりでございましたけれども、武士の意地もあります。親の情の愛着もあります。どうかして、不運な與一郎の手向になるやうな處置を取りたいのが腹一杯でございました。

『ともかくも、太郎助を邸へ引立てゝ參るがよい。身ども、直々に詮議しよう。いづれの道にも、人を殺めた奴、そのまゝに差措かれまい』

と、與五郎は嚴しく言渡しました。三百石の歴々の御家中の言渡しでございます。殆ど、命令にひとしいのです。

『これア駄目だ。かはいさうに、太郎助はお手打だ』

と、濱の者どもは、頼みの綱も斷れはてたやうにがつかりしました。さうして、スゴ〳〵と、そこを引上げました。

四

その日の暮方に、太郎助は、親の太郎兵衛や、五人組の者に附添はれて、神崎の邸へやつて來ました。いや、やつて來たといふよりも、引立てられて來たといふ方が、眞んとです。太郎助は、罪人のやうに、後手に縛られてゐました。

太郎助父子も、五人組の者も、すぐに若黨に導かれて、内庭に廻されました。與五郎は、緣さきに儼然と坐りまして、氣味の惡いほど靜にしてゐました。前のときとは違ひまして、もう誰にも緣に腰を掛けろなぞとは云ひませんでした。太郎助父子を始め、いづれも土の上に、かしこまりました。奥の方子を、チラと見ますと、すぐに其の眼を太郎兵衛の方に移しました。

『かりや濱の庄屋、太郎兵衛といふのはお前か』

『へい。これが、悴、太郎助めにございます。時に拍子とは申しながら、何んとも申上げやうもない間違を仕出來しまして、恐入りまする次第でございます。即ち、縄をかけまして、召しつれましてございから、濕つぽい線香の芳が、かすかに流れて來ました――與一郎の死骸に、もう手向がしてあるやうでした。

與五郎は、神妙に、うなだれてゐる、太郎助の樣

ますが、何分ともお情を持ちまして……』

と、さすがに庄屋を勤める者だけに、太郎兵衛は言葉に淀もなく、詫々入れかからうとしました。

與五郎は、輕く、それを聞流すやうにしてゐて、ふいと、太郎助に訊ねかけました。『太郎助、そちは人を殺めたら、自分も御仕置を受けるのが、天下の御定法ぢやといふことを存じてゐるか』

『はい、存じて居ります。でも、私は、與一郎樣を殺めは致しません』

と、太郎助は、おとなしやかに、しかし、少しも惡びれずに云ひました。

太郎兵衛は、ハッとして、我が子を小突いた。『これ〳〵……づけ〳〵と、うつかりしたことを申上げるのでない。へい……一體その、事の、おこりと申しまするは……』

『お前に、たづねるのではない。控へたが可からう』

と、與五郎は、太郎兵衛をたしなめて、『そちが殺さなければ、誰が殺したな。さ、その殺手は誰ぢや』

『與一郎樣は自分で死なしやッたのでございます』

と、太郎助は、キッパリと云ひました——平氣で落ちついてゐました。

『與一郎は、自分で死ぬといふ筈はない。それは嘘だらう』と、與五郎は、少し、おどしつけるやうに云ひました。

太郎兵衛も、五人組の者も、どんな難題を云ひ出されることかと思つて、胸をドキ〳〵させながら、與五郎の顏を見上げました。しかし、太郎助は、やはり靜に落ちついてゐました。そして、喧嘩になりました、おこりから、與一郎に力を拔かれ、防がうにも獲物がなく、逃げやうにも逃げるだけの隙がなく、とう〳〵組打になりまして、自分も、三ヶ所の淺い痍を受け、與一郎は自分　刀で、自分の脇腹を深く突きさすやうになるまで、そのいきさつを、少しのまぜ事もしないで、有りのままに話しました。

手當はしてありましたが、後手に縛られた腕や、頰などに、まだ生々しい血潮が滲み出て、髮も亂れ、顏も蒼ざめてゐました。

『ア、よく云つてくれた、大人も及ばぬ、立派な申して、情のある捌方をして下さることだらうと、その言葉を待受けてゐました。

ところが、案外にも、與五郎の方は、いつそ苛々しゝ樣子で、言葉さへ荒々しく致しまして。『それは

開きだ』

と、太郎兵衛は、太郎助の雄々しさとけなげさとに感心して、眼に一杯、涙をためてゐました。さうして、これほど立派な、理非、明白な申しひらきをしたのだから、多分、與五郎の方でも、酌酌をし然うとしても、喧嘩の相手は、そちに、相違あるまい。まして、死人に口なし……喧嘩の現場は、誰も見て居つたものがないのだぞ』

太郎助は、うなだれて、じつとなりました。太郎兵衛は、『名高い神崎樣も、御子息を亡くなして、心

の目がつぶれてしまつたのだ』と、思ひまして、太郎助の運命を悲觀して了ひました。

與五郎は、どこまでも、太郎助一人だけを相手取つて、口をさきました。『そこで、太郎助、もしも、そちの親、太郎兵衛と、身どもとが喧嘩を致して、太郎兵衛が、與一郎のやうに、死んだと致したら、そちは、身どもを何んと思ふな』

『お恨み申します』

太郎助は、それが當前だといふやうに云ひました。

『恨んで如何致すな』

太郎助は、ちょつと考へてゐまして、やがて、『讐討を致します』

と、キッパリと云ひました。

『たとへ、身どもの方に理があつても然うか……云はゞ、そちの親が、自業自得で死んだと致しても然う思ふか』

『は……はい』

と、太郎助は、だいぶ、ためらひ氣味ではありましたが、結局、さう云ひきつて了ひました。

五郎兵衛は、『とんだことを云ふ奴だ』と、いふやうに、さつと顏色を變へましたが、もう取返しがつきませんでした。慌てゝ、何か云ひかけようとしますと、それは、與五郎に、『控へて居れ』と、差止められて了ひました。

『太郎助、身どもも、與一郎の讐が討ちたいのぢや。よいか、そちの命は貰ひうくるぞ』

と、與五郎は靜に顏の筋も動かさずに云ひました。

『はい』と、太郎助は、尋常にうなづきました。

『だが、この與五郎は、三百石の祿を頂戴する武士ぢや、百姓の悴とは立合ふことはならん。假に、そちを武士の悴にして、運を天にまかせ、勝負をして遣はすぞ』

『わたしを、お侍にして下さいますのでございますか』

太郎助の眼には、活々とした『悅』が輝きました。

『然うだ』

『あの刀も下さいますか』

『勿論、やる』

『喜しいな。眞んとに下さいますか』

『やるとも。その代り、そちは、眞つ二つに斬つて了ふのだぞ』

『えゝ。それあ斬合つて、敗けるんだから、仕方がありません』

と、太郎助は、かすかに笑ひかけまして、ジッとなりました。

『太郎助の繩目をといて遣はせ』

與五郎は、傍にゐる若黨に指圖を致しました。

そして、太郎兵衛に向ひまして、『今、聞いてゐる通りの始末だ。太郎助は、今夜一と晩、身どもの邸にあづかつて、充分に保養させ、明日の朝、六ッ半に勝負をする。依つて、その頃に、死骸を引取りに參つて可からう。これ、いづれの道にも、太郎助は武士の悴と喧嘩をして、相手を死なしたのぢや。おかみのお咎をのがれることは出來んのだぞ』

と、何事か、太郎兵衛に納得させるやうに、穏に云ひ渡しました。太郎兵衛は、痛くなるほどに、切ない、悲しい胸をかかへて、スゴ〳〵と歸つて行くほかありませんでした。

五

あくる朝になりました。小さな赤穗の城の白壁にも、秋の日影が、あかるく、朗に輝いてゐました。

太郎兵衛は、與五郎に云はれました刻限に、神崎の邸へ出かけて行きました。やはり、五人組の者がつき添て居りました。

神崎の邸の門の扉は、八文字にひらかれてゐました。門の外から玄關さきまで、塵つぱ一つ見えぬやうに、掃き清められて、打水までしてありました。

それが何んとはなしに改まつて、物々しく見えましたので、太郎兵衛は、『いよ〳〵怜は、やられてしまつたのだ』と、とどろく胸を押へて、ある覺悟をしました。

昨日の通りに、若黨が導いて、すぐに内庭に廻されました。見ると、そこに、與五郎と並んで太郎助が、袴を穿き脇差をさし、髪まで綺麗に武家風にして、縁の上にキチンと坐つて居りました。

『ヤ、太郎助……』

と、太郎兵衛は、思はず聲をかけました。

『これ〳〵、太郎助は、身ども、手にかけた。死骸は、すなはち其の棺に納てある。念のため、改めて引取つたが可からう』

と、與五郎は、太郎兵衛の粗忽を、とがめるやうに云ひました。

なるほど、一つの白木の棺が、大地に荒莚を敷いて、そこに置いてありました。

太郎兵衛には、すつかり、與五郎の考が解りました。そして何んとも云はずにハラ〳〵と涙を落して、棺の前にうづくまりました。『有難い思召、いかにも太郎兵衛、この佛をお引取り申して參ります』

『どうぢやな、身どもが怜は、立派なものであらう。親ながら身ども行末がたのもしいのぢや。しかし、その棺のなかの太郎助とても、おろか者ではあつたが、格別惡氣があつたといふではない……、親心には、おろか者が、一としほ不便に思はるるものぢや、懇に弔うて遣はしくれい』

と、云つて、與五郎は、暗い顔をして、しきりに眼をしばたたきました。さうして、弔金にと云つて五十兩の金包を太郎兵衛に渡しました。

太郎兵衛は、ただ『はい〳〵』と、承つて、これも、しきりに涙を落して居りました。

太郎助は、名も與一郎と改めまして、與五郎の嗣子になつたのでございます。

（をはり）

夜叉御前

鈴木善太郎

一

美濃の國の山の中に青墓の宿と云ふのがありました。青墓の名物は女天下に大炊の屋敷と云はれた程で、青墓の女達は男も及ばない位よく働きました。だから女の方がいつも威張つてゐたので、女天下と云ふ名が起りました。又大炊の家と云ふのはこの界隈での豪家で、まるで御殿のやうに立派なものでした。それもその筈、大炊の娘が延壽は源義朝――あの頼朝のお父さんの義朝の妻でした。

義朝と延壽の間に夜叉御前と云ふ娘がありましたが、義朝は源平の戰に出て行つたきり歸つて來ませんでした。

夜叉御前は段々物心が附いて來るにつれて、父親も居なければ、兄弟も居ない家内の淋しさを心細く思ひました。友達の家に遊びにゆくと、そこには友達のお父さんや兄さんがゐて、夜叉御前に優しくして呉れました。夜叉御前は悲しくなつて家に歸るのが常でした。

『お前のお父さんは大將軍義朝です。お前の兄さんは右兵衛佐頼朝です。さむらひと云ふものは、いつも家の中にばかりゐられるものではありません。』

と母さんの延壽は、涙組んで凋れてゐる夜叉御前に云ひました。

『お父さんや兄さんは、なぜ百姓ではなかつたんでせう……そしたら親兄弟睦まじく家の中に揃つて、樂しく暮らせますのに……』と夜叉御前は云ひました。

すると母さんは又かう云ひました。

『家内揃つて睦まじく暮らす丈けがいゝものではありません。人間と生れた以上は、何か世の中の爲めになる事をしなければなりません。お父さんや兄さんは、この日本の人達をもつと仕合せにする爲めに戰爭に出てゐるんです。』

夜叉御前はこの話を聞いてから、ほんたうにさうだと思ひました。もう涙を零したり、淋しがつたりするやうな事はありませんでした。そしていつかお父さんや兄さんに逢へる時を待つ氣になりました。

その時、夜叉御前の年は八つでした。

源平の戰は遂に源氏の負けになりました。夜叉御前の兄さんの頼朝は、お父さんの義朝と一しよに、東の方に落ち延びる事になりました。その時義朝頼朝の親子に附いて來た家來達は僅か六人、皆馬に乘つてゐました。頼朝も自分で馬に乘つてゐました。頼朝はやがては日本國中の草木までもなびかせた程の勇者ですが、その時は僅か十三歳の少年でした。

この事は風の便りで夜叉御前の耳にも入りました夜叉御前はお父さんと、兄さんの身の上が心配になつてなりませんでした。どうかしてお父さんや、兄さんのお身の上に何事もないやうに、そして今に平家の人達を亡ぼすやうにと、日頃信心してゐる明神樣に日參して祈りました。

平家のきびしい詮議の中を落ち延びてゆく兄の頼朝、青墓の宿に兄さんの無事を祈つてゐる夜叉御前――その二人の兄と妹は、めぐり合ふ事が出來るでせうか。

二

頼朝はお父さんや家來達と一しよに、晝となく、夜となく、馬の上の旅を續けました。六波羅の合戰以來、ほんの一晩もゆつくり眠つた事はありませんでしたから、身體はすつかり疲れて了つて、馬の手綱を取つてゐる手も、自分の手のやうな覺えがありません。草津あたりまで來た時、遂うとうとしたと思ふと、馬の上からどつと地上に轉げ落ちました。恰度あたりは草原でしたから、何處も怪我はしませんでしたが、起き上つて邊りを見ると、お父さんも家來達も、もうそこにはゐませんでした。一行の人達は、頼朝が落馬した事も氣附かずに、どんどん先へ行つて了つたものと見えます。

月のない空には、撒いたやうな星がキラキラと光つてゐました。頼朝はその星明りを頼りに、只一人で夜更けの道を辿つて、お父さん達の跡を追つてゆきました。

夜も餘程更けた時分、頼朝はやつとの事で森山の宿に着きました。とある一軒の家の中からまだ眠らないで、何かしやべつてゐる聲が外まで聞えて來ます。あたりがしんとしてゐたので、その話聲は道を歩いてゐる頼朝の耳にも聞えました。

『さつきから馬の足音が聞えるが、屹度落人が通るに違ひない。あいつ達をつかまへて、清盛樣の御褒美を戴かうではないか……』

頼朝はギクリとしました。うつかりして、捕へられては大變だと思ひました。馬の足を急がせてその家の前を行き過ぎようとしましたが、もう遲かつたのです。家の中からどやどやと出て來た人達が、矢庭に頼朝の馬の前に立ちふさがつて、馬の轡をひしと捕へたり、それから長刀を持つて、ぐるりと馬の廻りを取り圍んだりしました。

『やア、やア汝は源氏の落人であらう。かく申すわたしは、源内兵衛眞弘である。清盛樣のお布令によつて、その方を引き捕へる爲め、かうして待ち伏せしてゐたのだ。』と馬の轡を取つた男が吐鳴りました

頼朝は腰の刀を拔くより早く、この眞弘目掛けて馬の上から斬り附けました。眞弘は見事に眞つ二つにされて倒れました。

それを見たあとの途中は急に怖ぢ氣が附いたと見えて、遠くから長刀を振つて騷ぐばかりで、誰も側に寄つて來ませんでした。頼朝はこの時だと思つて馬に一鞭あてると、まつしぐらにこの宿場を馳け拔けました。落ち行く先は野洲の河原です。

三

夜叉御前は待てど暮らせど、お父さんや兄さんに逢へないばかりか、その消息さへ少しもわかりませんでした。夜叉御前は毎日河原に出ました。そして落人の影が見えないか、落人ならばたとへお父さんや、兄さんでなくとも、その消息がわかるに違ひないと思つてゐました。

ある日の事、その日も朝から待てど暮せど、落人の影が見えませんでしたから、又すごすごと自分の家の方に歸りかけて來ました。すると向うの蘆の葉の蔭から馬に乘つてゐる女の姿が見え出しました。界隈の百姓の妻か娘だらうと、夜叉御前は思ひましたので、別に氣にも留めませんでした。

馬に乘つた女は段々近づいて來ました。見ると、馬の前には一人の百姓が何か莚包みの物を背負つて手綱を引いてゐましたが、その男はいきなり夜叉御前に聲を掛けました。

『一寸伺ひますが、青墓の宿に參るにはどう行つたらよろしうございませう。』

『わたしも青墓の宿へ歸るんです。それでは一しよに參りませう。』と夜叉御前は云ひました。

少し歩いた時、夜叉御前は又かう云ひました。

『青墓の宿のどこへいらつしやるんですか。』

『大炊樣のお屋敷に參るんです。』

と百姓が答へました。然し馬の上の女は矢張り默つてゐました。

『大炊の家はわたしんとこですよ。』

と夜叉御前は云ひました。そして一體どこの女なのだらうと思つて、馬の上をぢつと見詰めました。馬の上の女もぢつと夜叉御前を見詰めました。それから突然かう云ひました。

『では……もしやそなたは夜叉御前ではないか……』

その聲は思ひ掛けない男の聲でした。

『えゝ、わたし夜叉ですが……』

夜叉御前がかう答へた時、馬の上の女は急に馬を飛び下りました。そして被つてゐる女の着物を脱ぎました。

『わたしは頼朝だ、そなたの兄の頼朝だ！』

その人はいきなり夜叉御前を抱きかゝへて、涙をほろほろと零しました。

夜叉御前は何と云つていゝかわからない位喜びました。それは待ちに待つた兄さんなのです。兄さんはかうして無事でゐて、妹の自分を尋ねて來て呉れたのです。

百姓はその側から夜叉御前に云ひました。

『わたしはこの先きの村の者ですが、今日川に出て網を引いてゐるところへ、この御武家樣がお通りになりました。大分道に迷つてゐられる御樣子で、見兼ねましたので聲をお掛けしますと、これから青墓の宿のこれこれに參るとこだと申されます。然しこの邊りは淸盛樣の御詮議は嚴しうございますから、人目に附かぬようにと存じまして、女の姿になるやうにおすゝめいたし、太刀はこの通り菅の葉で包みまして、わたしが背負つて參りました……』

もうそこから、夜叉御前の家までは幾らもありませんでしたから話の中に、わが家の門に着きました。

母さんの延壽や、おばアさんの大炊は、家の中から轉ぶやうに出て來て頼朝を迎へました。

お父さんの義朝は、落ち延びる途中、長田莊司忠致の計略に掛かつて、たうとう非業の最期を遂げましたが、夜叉御前は兄さんの頼朝とかうして朝夕睦ましく樂しく暮らす事が出來ました。然しそれも永い事ではありませんでした。淸盛の詮議が段々嚴しくなつて來ましたので、頼朝は又何處かへ姿を隱さなければならなくなりました。

『わたしはこれから東國に行つて同志を募り、一旗上げようと思ふ。わたしはもう二度と、お前に逢へるかどうかわからないが、この兄が日本の國の爲めに盡す事を喜んで呉れ。そして今別れる事を悲しまないで呉れ。』

頼朝はさう夜叉御前に云つて、源氏の家の寶刀の鬚切りの太刀を預けて、東に向つて立つて行きました。

（をはり）

兎と龜後日譚

松平三千夫

坊ちやんに嬢ちやん。皆さんは、

『もし／＼龜よ、龜さんよ。』と云ふ唱歌を御存じでせう。恐らくこの歌を知らない方は一人だつてないでせう。ところであの時は足の早い兎が、油斷して晝寢をしてゐましたので、世界中で一番足の遲い龜に敗けたのです。それで兎は皆さんから笑はれるやら、からかはれるやらして、大しくじりして引き下りました。

さて皆さん、それから兎はどうしたでせうか。それを知つてゐる方は一人もないでせう。で私がその話の續きをしようと思ひます。

兎は頭から馬鹿にしてゐた龜に敗けたのですから、それが殘念で／＼なりませんでした。でどうかして龜をひどい目に逢はせて以前の仇討ちをしようと、自分の惡いことを棚に上げておいて、毎日その機會を狙つてゐました。

ある日天氣がいゝので兎は穴から出て來て、野原の上でぴよん／＼飛び廻つて遊んでをりました。するとそこへ恰度この前の龜がのこ／＼と通りかゝりました。兎はいち早く龜を見つけて云ひました。

『もし／＼龜さん／＼。隨分暫くでした。貴方も御丈夫ですか。』

と兎はわざと優しく云ひました。けれども心では今日出逢つたが最後だ、屹度仇を取つてやらうと思つてをりました。

『おやこれは兎さんでしたか、この前は失禮しました。相變り貴方もお元氣で結構です。』

と龜に惡い奴に出逢つたと思ひましたが、何喰はぬ顏をして挨拶をしました。

『いやこの頃はとんと元氣がなくて困つてをります。いろ／＼心配がありましてね。』

と兎は急に心配さうな顏をして、出たらめを云ひました。

『おやさうでしたか、それはお氣の毒な。』

と正直な龜は、すぐ兎の言葉に引き入れられて同情して云ひました。

『ねえ龜さん。私は是非聞いて貰はねばならないことがあるのだが。』

と兎は眞面目を裝つて云ひました。

『何んですかね、私に聞いて貰ひたいと云ふのは。』

と龜は聞きました。

『それはね、私がお前さんと競走して、私が思はぬ不覺を取つたものだから、仲間から、お前のやうな奴は仲間の恥さらしだから、と云つて一切つき合つて貰へないのです。そしても一度お前さんと競爭して、私が勝つて名譽を回復しなければ、一生涯仲間と交際が出來ないのです。で私はも一度お前さんと競爭したいと思つて、毎日お前さんを探してゐたのです。』

と兎はさも誠らしく云ひました。正直な龜はそれを聞いてすぐだまされて了ひました。

『それは氣の毒なことです。では貴方のお望み通りも一度競爭することにしませう。今度は貴方も油斷しないで走つて下さい。さうすればどんなことがあつても私より早いでせうから。』

と龜は云ひました。

そこで又もや一、二、三、で兎と龜とが向ふの小

山まで走り出しました。兎はぴよん〳〵と龜はのそ〳〵と歩くのですから、とても比較になりません。龜が未だ一町も來ない中に兎はもう小山に來て了ひました。そこで兎は振り返つて龜の歩いて來るのを見てをりましたが、やがて何事か考へついたやうに又もと來た道を引き返して行きました。そして途中

にあつた小川の傍まで來ました。

『さうだ〳〵。龜はとてもこの川を渡れないに違ひない。でこゝに隱れてゐて、龜が川を渡れないで考へてゐる所を、不意に飛び出して龜を川の中へ投げ込んでやらう。さうすれば龜の奴、多分ぶく〳〵と沈んで、死んで了ふだらう。』

兎はさう思つて草の中に隱れて、龜の來るのを今か〳〵と待つてをりました。そして兎が待ちあぐんだ頃、龜はやつと出て來ました。そして川の端に立つてあたりを見廻しました。

『俺は川を渡ることは何でもないが、兎の奴どうしてこの川を渡つたのだらう。とてもこれは飛び越せさうにもないが。』

と考へて居りますと、不意に草の中から兎が飛び出して、力まかせに龜を川の中に投げ込みました。不意を喰つて龜は眞逆樣にどんぶと急な流れに落ちました。

『萬歳々々〳〵、到頭仇を討つた。龜の馬鹿野郎やーい。』

と兎は岸に立つて躍り廻りました。けれども川の中へ落ちた龜は、水には馴れてゐますから平氣で浮び上りました。そして兎の聲を聞いて始めて兎の惡企みであつたことに氣がついて、大いに喫驚しました。そしてうかうかしてゐると、又どんなことをされるか分らないので、そのまゝ水の中に潜つて姿をかくして了ひました。

それで兎はてつきり龜が死んだことゝ思ひました。そして大喜びで山へ引返して行きました。時刻を見てそのあとへ龜は這ひ上つて來ました。

『あゝ今日は馬鹿を見た。だが兎の毒馬鹿がすつかり俺が死んだと思つてゐるのは大笑ひだ。やーい、兎の馬鹿野郎。』

と龜は又そのまゝのそ〳〵と歸つて行きました。

それから幾日も幾日もたちました。兎は仇を討つた氣で、もうすつかり龜のことを忘れてゐました。そしてある日草叢で涼しい風に吹かれ乍らいゝ氣持ちで晝寢をしてをりました。するとそこへひよつこりと先日の龜が通りかゝりました。

龜は兎を見ると一寸喫驚して立ち止まりました。けれども龜は兎が寢てゐるのを見ると急に何かいたずらをして、先日の仇討ちをしてやりたくなりました。で龜は思ひ切つて大きな聲を出して、

『もし〳〵兎さん〳〵。』
と叫びました。その聲が餘り大きかつたので、兎は喫驚して飛び上りました。
『あゝ喫驚した。誰だい。そんな大きな聲を出して！』
と兎は、未だ眠さうな眼をこすり〳〵見ますと、先日の龜がにこ〳〵と立つてゐるのではありませんか。兎は二度喫驚して、今度は急に聲も出ず只眼をパチクリさせて、龜の顏を穴のあく程見つめてゐました。
『まア氣を落着けて下さい。私です。龜ですよ。分りましたか。』
と龜はわざとゆつくり落着いて云ひました。それでやつと兎は氣を取り戻して、
『あゝ龜さんだね。お前さん一體どこから來なさつた。』
と聞きました。龜はわざと平氣な顏をして、
『龍宮と云ふところから來ました。』

と云ひました。
『えッ龍宮？』
と兎は喫驚したやうに聞き返しました。そして言葉を續けて、
『龍宮と云つたら、たしかに浦島太郎と云ふ人の行つたことのある、海の底の御殿だね。』
と聞きました。
『さうです。さうです。浦島太郎を龍宮へつれて行つたのは私の祖父さんです。』
と龜は云ひました。
『龍宮と云ふ所は非常に結構な所ださうですね。そして乙姫樣と云ふ美しいお姫樣もゐらつしやつて。』
と兎は聞きました。
『えゝそれは〳〵あんな結構なところはありません。本當に世界中の結構なものを一つ處に集めたやうなものですよ。おいしい御馳走は毎日遊んでゐて食べられるし、美しい鯛や平目が面白い踊りを見せてくれるし、あんな面白いところはありませんよ。浦島さんが餘り面白いので日が立つのを忘れて了つた位ですもの。』
と龜は手振り身振りで話しました。兎はそれを聞くと自分も龍宮へ行つて見たくなりました。そして、
『どうしてお前さんはこんな結構なところに行つたのかね。』
と聞きました。
『私の祖父さんは龍宮のお使ひですから、私たちは行きたいと思つた時は、いつでも行けるのです。でこの間貴方のために川へ突き落された時、つく〳〵もうこの世の中がいやになつたので、急に思ひついて龍宮へ行つたのです。』
と龜は云ひました。
『じやあの時は何もお前さんを突き落すつもりでやつたのではない。お前さんが川を渡れないだらうと思つて、私がお前さんを向ふ岸へ投げて上げようと

思つたのだ。けれどもうまく行かなかつたので、お前さんが川の中に落ちて了つた。お前さんが沈んで行くのを見て、本當に氣の毒なことをしたと思つたが私は泳ぎも知らないので、助けることが出來なかつたのです。どうぞ惡く思はないで下さい。』

と兎は嘘ばかり云ひました。龜に腹が立つやら却つてをかしい位でしたが、平氣な顏をして、

『さうでしたか、それとも知らずに恨んですみませんでした。さうだと分ればこゝで仲直りして、一つ龍宮へ御案内しませうか。』

と龜は云ひました。

『えつ龍宮へ！』

と兎は飛び立つて喜びました。そして二つ返事で、龍宮へつれて行つて貰ふことにしました。

そこで龜と兎は川へ行きました。

『さア私の背の上へお乘りなさい。それから少し位浪が來ても辛抱してゐなければなりませんよ。』

と龜は云ひました。

『よし來た、それは大丈夫。』

と兎は龜の背の上に乘りました。龜はそれと同時に水の中に潜り込みました。兎は初めの中は目をつぶつて、息もしないで辛抱してをりましたが、とても苦しくてやり切れなくなつて來ました。

『あゝ、龜さん、未だ龍宮へ來ないの？』

と兎は思はず口を開きました。すると一時に兎の口の中へ水が一ぱい這入りました。

『ワアッ、助けてくれ。』

と兎は悲鳴を擧げました。そして無茶苦茶に手足をもがいて苦しみました。

龜はいつの間にか岸へ這ひ上つて來て、兎の苦しんでゐるのを尻目にかけて、

『兎の馬鹿やーい。』

と云つてのこ／＼と歸つて行きました。

（おしまひ）

十五少年漂流物語

（前號までの梗概は一一〇頁にあります）

霜田史光

一、ゴルドンの仲裁

ドノバンとブリアンは、環投げをしてゐましたが、ブリアンがうまく針に嵌めましたので、ドノバンが、

『一寸待つてくれたまへ。』と云ひ出しました

『どうしてつて、ブリアン君は狡猾いよ。』

ブリアンは顏色を變へました。

『なに、僕が狡猾いつて？』

『さうだ、君は線から足を踏み出してゐたぢやないか。』

すると サービスは、我慢しきれずに叫びました。

『そんな事があるものか。君の見損ひだよ。ブリアン君の足は、いつも線の内にちやんとあつたことは、皆よく見てゐたよ。』

ブリアンも、またいひました。

『それは嘘だと思つたら來て見給へ。ほら、こゝに僕の靴跡がついてゐるぢやないか。君の見損ひでないとすれば君に嘘を云ふんだ。』

『なに、僕が嘘を云つた……』

とドノバンの言葉は、荒々しくなりました

そして、今にも手をあげようと見構へました

ドノバンの背後には、ウエッブ、クロースなぞが、いざと云へばドノバンを助けて喧嘩をしようと、これもまた見構へました。

またブリアンの背後にも、サービス、パクスターが助太刀をしようとしてゐます。ブリアンは顏を赤くして怒りましたが、急に思ひ返したやうに、

『ドノバン君、君は僕に喧嘩を吹つかけやうとしてゐるんだね。』

『ふん、君はそれが怖ろしくなつたのかい。』

『馬鹿を云ひたまへ。僕はこんなつまらない事で、喧嘩をするのが馬鹿らしいと思つたゞけなんだよ。』

『てれ隠しに云ふな、卑怯者の腰抜け奴！』

『何な！　腰抜けだと？』

ブリアンも、もう我慢が出來ないで、二人

の間には、正に喧嘩が始りました。そして助太刀同士も入り交つて、撲り合ひ蹴り合ひが激しく起りました。

そのすこし前、どうやら喧嘩が始まりさうになつたので、ドールとコスターは洞に駈け込んだ。ゴルドンに知らせましたので、ゴルドンは大急ぎに駈けて來て、二人の間に割つて入り、やつと止ることが出來ました。

喧嘩はこれで納まりましたが、納まらぬのはドノバンの胸の中です。それにゴルドンもプリアンよりも自分の方を責めるので、ドノバンはゴルドンにも皮肉を云ひながら、向うへ行つてしまひました。

二、燕のお使

その翌日から、ドノバンは別にプリアンの事は一口も云はずに働いてゐましたが、それでも、プリアンやゴルドンを恨んでゐることは、その樣子で知れました。

五月に入るとすつかり寒くなつて、洞の中では、ストーヴを焚かなければ、耐へられない程になりました。鳥類は暖い國へ飛んで行くと見えて、一日々々少くなりました。

そこで、少年達は燕を捕へては、一羽々々その頸に、自分達が流されたことから、この島で助け船を待つて暮してゐることを書き、そして、『その手紙を拾つた方はすぐに、ニユージーランドの都オークランドにお知らせ下さい。』と書きそへた紙片を結び付けて、燕達を逃がしてやりました。

五月二十五日は初雪が降りました。今年は去年より寒いかも知れないと、少年達は話し合ひました。しかし、今年は前々から薪を始め、油類から食べ物まで澤山に用意してありますのでその方の心配はありませんでした。

六月の十日は、ゴルドンの首長としての役目が一先づ終る時でした。そしてまた改めて首長を選ぶことになりました。

ゴルドンは、自分が少年達の中から、少しは厭きられてゐることもよく知つてゐますので、また首長になることは望みませんでした。

選擧の日が近づくにつれて、不安の色を顯に出すのはドノバンでした。ドノバンは自分が首長になりたいけれども、どうやら多くの少年達は、プリアンを選びさうなので、それが氣にかゝつてゐたのでした。

その日となりました。少年達は各自選ぶ人の名を書いて箱に入れましたが、箱を開いて見ると、プリアンが八點、ドノバンが三點、ゴルドンが一點でした。

ゴルドンの一點はプリアンが入れたものだし、ドノバンの三點は、ウエツブ、グロース、キルコクスの三人がドノバンに入れただけでした。

これを見たドノバンの顏が、見る〳〵變つて來たのは可哀さうな程でした。プリアンは自分が選ばれたのを斷わらうかと思つて、急に立ちかけましたが、また思ひ返して、弟のジヤックの方を見ながら、

『有りがたう、諸君。それでは僕は謹んでお受けいたします。』と、きつぱりと首長になることを承知いたしました。

この日、ジヤックは人のゐない折を見計つて、兄さんのプリアンにそつと云ひました。

『兄さん、兄さんが首長になることを承知したのはどういふ譯ですか。』

『僕もね、一度は斷らうかと思つたのだけれど、よく考へて見ると、僕とお前とが身を捨てゝ諸君の爲めに盡すには、僕が首長になつた方が都合がいゝと思つたからだよ。』

『兄さん、有り難う、若し命を捨てゝ諸君の爲めに盡すことがありましたら、その時は是非私にさせて下さい。』とジヤックは涙を浮べて云ひました。

三　湖上のスケート

スロウ灣の岩壁の上に立てた英國々旗は、もう古びてさん〴〵に破れて、今は目じるしの役に立たなくなつてしまひましたので、プリアンはバクスターに云ひつけて、沼の邊に澤山生えてゐる芦をとつて來させ、それで一つの球を作つて、それを旗の代りに竿の先に掲げて置きました。

やがて寒い冬がまたやつて來ました。プリアンは少年達に親切を盡す上に、少しも威張らずに一生懸命自分から働いて、首長の役目をつとめましたので、少年達の氣受けはすばらしいものです。それと云ふのはゴルドンが選んでプリアンの云ひ付けに從つてゐましたのでそれが手本となつて、大層年下の少年達に工合がよかつたのです。ドノバン達も表面では少しも逆ばずに、プリアンの云ひ付けに從つてゐましたが、心の中で不平であることは隱すことが出來ませんでした。

センキンス、キパーソン、ドール、コスターなどが、學問の上で大層進んだより外は、別に變つたこともなく、六月も過ぎ、七月も過ぎ、八月の始めとなりました。もうその頃は肌を刺すやうな寒さになつて、百度ゐりの寒暖計が零度以下三十度に下つたことが、四日も續きました。

プリアンは少年達が、久しい間運動不足でゐるのを思つて、湖の上で氷滑をやらうと云ひ出しました。少年達は大喜びで、すぐにバクスターは、二三人に手傳つて貰つて氷靴を作り、その月の二十五日には、イパーソンドール、コスター、モコー等を除いた外は、皆湖の上に出かけて、樂しく氷の上を滑つ

て遊びました。

少年達の中で、スケートの一番上手なのはジャックでした。ドノバンとクロースは、日頃名人だと自分で云つてゐましたが、氷の上で種々の曲藝をしながら、自由自在に走り廻ることはとてもジャックに、及ばないのでした。

嫉み深いドノバンはジャックが、皆の者から頻りに拍手喝采されるのを見て、氣持惡く思ひました。そして、クロースをそつと呼んで、

『君、向うの方へ鴨が澤山下りたやうだれ。』

『あゝ。』

『君も僕も鐵砲を持つてゐるから、行つて撃たうぢやないか。』

『でも、ブリアン君が遠くへ行つちやいけないと云つたぢやないか。』

『なに、ブリアン君には内密にだよ。いゝから僕と一緒に來給へよ。』と云つて、ドノバンは無理にクロースを誘つて氷の上を滑り出しました。そしてぐん〳〵遠くへ行つて、見てゐたブリアンやゴルドンの眼からは、たうとう見えなくなつてしまひました。

まだ夕方までには大分時間があるから、二人は方角に迷ふことなく、歸つて來るだらうなぞとブリアン達は心配しながら話してゐました。

ところが、それから二時間もたつと、急に孤の上一面に深い霧が下りて來て、あたりは薄暗くなりました。

ブリアンは二人のことを心配し始めました。そして合圖の喇叭を吹き鳴らすと多くの少年達はすぐに集つて來ましたが、ドノバンとクロースの二人は歸つて來ません。仕方がないので、今度は鐵砲を打ち鳴らしました。そして何か答へがあるかと、じつと耳を澄ましてゐましたが、湖の上は森としてゐて何の物音も聞えません。

『困つたことが出來た。どうかして二人を救はなければならない。誰かが二人の行つた方へ走つて行つて、走りながら喇叭を吹いたら方角がわかつて歸つて來るやうになるかも知れないね。』と、ブリアンは云ひました。

『それがいゝ、それがいゝ、ぢや僕が行かう。』

と云つたのは、パクスターです。

すると二三人『僕が行く』『僕もやつて吳れ』と云ひ出す少年が出て來ました。然し、ブリアンは、

『いや、この役目は僕がしよう。』と決心して申しました。

『いや、兄さん、僕に行かせて下さい。僕はスケートが得意なんだから、僕が行くのが一番いゝんです。』と弟のジャックの云ふ聲を、兄ばしみ〳〵と見てゐましたが、

『よし、お前が行つて吳れ。行きながら喇叭を吹いて、そして向ふの鐵砲の音を聞き洩らさないやうにするんだよ。』

ジャックは喜び勇んで滑り出しました。スケートの上手な彼は、氷の上へ立つたかと思ふと、もう霧の中に隱れて見えなくなつてしまひました。

四、ジャック、熊に追ひかけらる

やがて半時間もたつたけれども、ドノバンとクロースからも、ジャックからも何の便りもありません。

そこでサービスの思ひつきで、二三人が湖へ歸つて大砲を發つことになりました。いつもの大切にしてゐる火藥も、今はそんなことも云つてゐられませんので、二門の大砲に交る〳〵火藥をつめて、どん〳〵それを打ち放ちました。流石に大砲の聲は大きく、岡を震はせ、氷の湖の上に、何哩も遠く走つてゆくやうでした。しかし暫くはそれでも、何の物音もしませんでした。

午後五時頃、湖の北東の方から岡かに、二三發の鐵砲の音が聞えました。それに勇氣がついて少年達は、尙も盛んに大砲を發つてゐると。それから四五分たつと、霧の中から二つの人影が現はれて來ました。一同は喜びの叫び聲をあげて二人を迎へました。けれどもジャックの姿は見えませんでした。聞けばドノバン達は喇叭の聲を聞かなかつたと云ふことです。それも道理、二人は湖の北の方へ行つてゐたのに、ジャックは東の方へ向つて行つたからです。

今度はジャックの事が心配になりました。もしもジャックが、この零度以下の寒さの中で、一晩中氷の上を迷つてゐたら、とても生きて歸れるものではないのです。

さア、少年達の心配は前の二人の時よりもつとひどくなりました。何しろもう一時間もたつと、眞暗な夜がやつて來るのですから、氣が氣ではありません。キルコクス、パクスター、サービスなぞは、焚火をしようと云つて、枯枝を濱邊に澤山積んでゐますと、その時望遠鏡で見てゐたゴルドンが、

『おやッ、彼方に何か動いてゐるやうだ。』と叫びました。

ブリアンもすぐ望遠鏡で見ると、なる程動いてゐるものがあります。よく〳〵見ると、それは間違ひもなくジャックでした。その時少年達はジャックとの間は、十町以上もあるやうでしたが、ジャックの巧みなスケートで走つて來れば五分とたゝぬうちに、皆のゐる所まで歸り着く事が出來るやうに思はれました。

『何かジャック君を追ひかけて來るやうだよ。』とパクスターは、驚いて云ひました。

「何んだらう。」
「人間かれ。」
「獣らしいぞ。」
「おや、狼らしいぞ。」と云つたドノバンは、すぐ様銃を持つて氷の上に走り出しました。そして二發を撃つと、その獣は怒ち引き返して行つてしまひました。

ジャックを追つて來たのは狼ではなく、二頭の熊でした。少年達はこれ迄、この島にこんな恐ろしい獣が棲んでゐることも知らなかつたし、それにそんな跡さへ見ませんでしたから、これは屹度氷に乘つて大陸から流れ着いたか、でなければ、凍つた大海の上を渡つて來たものに違ひない、と話し合ひました。若しさうだとすれば、この島から遠くない所に大陸がある筈になるので、少年達は疑ひながらも、幽かな望みを持ちました。

ジャックの話すことを聞くとかうです。

ブリアン達に別れてから、東の方を指して走つて行きましたが、いくら行つても二人に逢ひませんでした。喇叭も吹き鳴らしましたが、その答へらしい鐵砲の音も聞えません。

さうして深い雪の中をあちこち探し走つてゐるうちに、いつか、自分も方角を間違へてしまひました。その時大砲の音が聞えましたので、ほつとしてその音を目あてに歸つて來ると、途中二頭の熊が自分を追ひかけて來るのに氣がつきました。幸せにもジャックは、スケートの、名人でしたから、ふらん隅りの速さで突ッ走りました。その爲め熊がいくら駈けて來ても、いつも十間位の間を置いて逃げることが出來ました。しかし、若しジャックが一度躓いて倒れたら、それこそ生きて歸れなかつたのであります。

ブリアンは皆を集めて洞へ歸らうとして、ドノバンに向ひ、

「ドノバン君、僕は君に皆と離れちやいけないと云つて置いたのに、君はあんな遠くへ行つてしまつて、僕達に隨分心配をかけたよ。僕は君を責めなければならないんだが、然し君が命の危いのも顧はずに、眞先に僕の弟を救つて呉れたことは有難く思ふよ。」と云つて握手しようとして手を出しました。

「いや、僕は自分のやるべきことをしただけだよ。」と云ひ放つて、ドノバンはブリアンの差し出した手を握らうともしないで、さつさと洞の中へ這入つてしまひました。

五、ドノバン黨の分離

こんなことがあつてから、六週間も過ぎた或日のタ方、家族湖の南の岸に一生懸命になつて露營を張つてゐる四人の少年があります。時はもう寒い冬を過ぎて、春も終らうとする頃で、樹の上も地の上も、一面に綠に包まれてゐる時分でした。和らかい風が湖の面を吹いて、小鳥も樂しく啼きながら、宿巢に歸つてゆく頃です。

一株の柳の木の下には、焚んに火が燃えてゐて、そこには二羽の大鴨が串に刺されて、甘さうに焼けてゐました。四人の少年は晩飯が終ると、各自毛布にくるまつて、火のそばに横になりましたが、やがて翌る朝太陽が高く昇つて來ても、ぐつすりと寢込んで、眼が覺めません。

この四人は、ドノバン、クロース、ウエッブ、キルマクスでした。四人は佛人洞の少年達と別れて、別に住む爲めに、此處にやつて來たのです。

ドノバンにとつては、ブリアンの下に働いてゐるのは不愉快でならなかつたのです。そしてたうとう三人を誘つて、自分は別に洞に住居を作らうと決心したのです。

このことを皆に話した時、ゴルドンを始めブリアンやバクスターも頻りに止めましたがドノバンは肯き入れませんでした。仕方なく當分別れることになつた。ブリアンは鐵砲や火藥や、斧や釣り道具、毛布その他の入用なものを分けてやりました。

ドノバンは、いつかブリアンがジャックとモコーを連れて行つて見て來た東の海岸に行つて、そこの湖に住居を作らうと思つたのです。

かうして今、四人の少年は此處に露營してゐるのでした。やつとの事、眼が覺めてから四人はまたそこを出發して、湖の岸傳ひに進んでゆきました。

夕方の六時頃、ドノバン達は川に出合ひました。これは屹度、「東方川」に違ひないと思ひながら、とある樹の下に露營を張りました。その樹の下は、八ケ月も前に、ブリアン達がやはり野宿した所だつたのです。

翌る日はドノバンの云ひ出して、川を渉りその左の岸に沿うて下つてゆきました。

草が深くて脛も埋まる位な上に、時々林があつて、びしびしと樹が立ち並んでゐますので、それを斧で斬らなければ通れぬことがあつたり、また沼地へ出てしまつて、大廻りしなければ通れなかつたりして、四人は隨分と苦しい思ひをして、やつと林を抜け出て海近く來た時には、もう日が暮れて七時になつてゐました。

またその翌る朝、四人は起きるとすぐ渚邊へ出て見ました。そして東の海を見渡しました。しかし、海の上は限りない波のうねりが續いてゐるばかりで、眼に入る何物もありませんでした。

「だがれ、諸君、僕はどうしてもこの島が南アメリカ大陸に近いと思ふのだよ。チリーかペルーに行く汽船が、屹度この沖を通るに違ひないね。僕が君達と一緒に此處に住まうと

決心したのはそんな理由もあるんだよ。プリアン君はいつか此處へ來た時に、妙な白い點を見て遂つたと云ふので、『惑はし潟』と云ふ名をつけたけれども、僕はこの潟が僕達を欺かないことを信ずるね。近いうちにここの沖の方に船の影を見付けることを疑つてはゐないんだよ。』とドノバンは、三人に向つて云ひました。

この日は濱邊を散歩しながら、これから住居とする洞を、あれかこれかと探し廻りました。そして魚を漁つたり、貝を拾つたりしてゐるうちに、夕方になつてしまひました。

それから、プリアンが登つて見たと云ふ熊の形をした大岩の上に、四人が登つて、東の海を見渡しましたけれども、プリアンが見たと云ふ白い點なぞは、何處にも見當りませんでした。『プリアン君は大方夢でも見て居たのだらう。』と云つて四人は笑ひました。

六、北方探檢

この夜、四人は晩飯が濟んでから、これからのことを相談しました。住むべき洞も決つたから、この次には佛人洞からもつといろいろな、道具や食物を持つて來る事ですが、それにはどうしても、氷の上を舟でやつて來なければ駄目だと云ふことは、今迄四人が歩いて來た困難でもわかつてゐます。

然し、佛人洞に歸る前に、まづこれなら北の方の海岸を探檢して見ようぢやないかと云ふことを、ドノバンが云ひ出しました。

他の三人も贊成しましたので、翌る朝、すつかり仕度をして出かけました。半里ばかり行くと、細い川に出合ひましたので、それを『北方川』と名付けました。

それから幾度も、深い森を拔けては砂濱に沿うて、北の方へ、北の方へと進んでゆきました。途中で鐵砲を撃つたけれども、獸の皮が厚くて彈がはね返され、逃げられてしまつたことなどあつて、四人は途中で野宿をし、翌る日、また足を早めて北の方に進みました。

この日は朝から天氣が惡くて、どうも嵐でも來さうな空合ひでしたが、もう間もなく目指す北の海岸の端に出たれると思つてどん〳〵急いで參りました。しかし、風はだん〳〵とひどくなつて、午後五時頃には頭の上で電光が閃き、恐ろしい雷も鳴り出しました。風は森の樹々を震はせ、雷の響と一緒になつて實に物凄い嵐となりました。それでも四人は勇氣を出して、やつとこすつとこ、進んでゆきますと、八時頃になつて森の向うからどうやら浪のやうな響が聞えました。もう北の海岸へ來たのだと思つて、急いでその森を駈け拔けて見ますと、なる程前には、海が一面に擴がつてゐます。

もう四圍は暗くなりましたが、まだ海の上はいくらか見えます。四人は今のうちに海の樣子を見て置かうと、砂濱に飛び出しました。

光へ駈けて行つたキルコクスは、前に横になつてゐる黑いものを指して驚いて叫びました。あとの三人も續いてその傍に寄つて見ると、四人の前十間ばかりの所の一隻のボートが浪に打ち上げられてゐますが、その四五間左の方の藻草の澤山打ち上げられてゐるところに、二人人間が倒れてゐます。四人はぎよつとして暫くは言葉も出ないで立竦んでゐましたが、やがて恐る〳〵近づいて行きました。

しかし、何んとなく恐ろしさが身を震はせて、七八間の所まで近づきましたが、それから先へ進むことが出來ません。それで、その人間が死んでゐるのか生きてゐるのか、それさへ見分することも出來ないで、四人とも森の中へ逃げ込んでしまひました。

その時はもう空も海も眞暗になつて、雷の音、風の音、浪の聲、それ等が轟々と鳴り響いて、その恐ろしさつたらありません。

四人は森の中の大きな山毛欅に囓り付いて慄へながら夜を明しました。その夜の恐ろしさ、そして、夜明けを待つことの長かつたこと、まるで一世紀（百年）も待つやうな思ひでした。

恐ろしさは、嵐の盛めばかりではありません。暗がりの濱で見た難破船と、二人の倒れた人。しかし、あの人達をよく見定めて來なかつたことは、如何にも殘念でした。

時々、嵐の音の中で人の叫ぶらしい聲が聞えました。しかし、それははつきりと人の聲とは解らないのですが、時々耳のせいかそんな風に聞えました。人の聲とすれば、あの二人の外に助かつた人もゐて、この濱邊を歩き廻つてゐるのかも知れないと思ひました。

夜が明けるとすぐ、四人は濱邊へ出て見ました。まだ風が強くて砂や小石を吹き飛ばし少年達も油斷してゐると吹き飛ばされさうでしたが、四人は手を繋ぎ合つて、昨夜見たボートの近くへ行つて見ました。

すると、ボートは昨夜見たよりもつと上の方に浪に壓し上げられてゐましたが、あの二人の倒れた人の姿は見えませんでした。さては浪に攫はれてしまつたのか、ひよつとしたら、昨夜助ければまだ命があつたのかも知れないのに、と思ふと少年達は、あの二人が氣の毒でなりませんでした。そして、昨夜意氣地がなかつた自分達が後悔されました。

四人はボートのそばへ寄つて、その內外をよく檢べて見ました。ボートは長さ五間ばかりの傳馬船で、帆檣は折れ、右側も大分破れてゐますから、これを繕はなければ航海が出來ません。船の中には帆と帆綱の切れ〴〵になつたものがあるばかりで、外には何もありません。船尾の方を見ると、其處にこの船の船らしい名が書いてありました。

セベルン號　サンフランシスコ

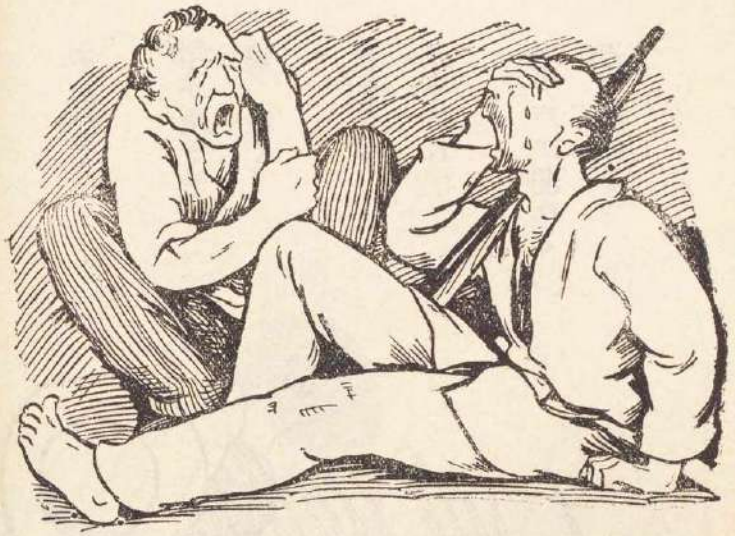
（つゞく）

雨乞唄

野口雨情

お天道さん
雨下され
畑が枯れる
田が枯れる
田が枯りや

子が泣く
子が泣きゃ
親　泣く
お星さん
水下され
堀井戸ア涸れる
沼ア涸れる



山の少年（長篇）

（前號の梗概は一一〇頁にあります）

沖野岩三郎

夜の襲撃者

三人は日の暮れるまで、獵夫ごつこをして遊んでゐますと、山の上から薪を肩げて降りて來た伊平は、『おうい、孫四郎……まだ遊んでゐるんか。一緒に歸らう。』と呼びました。すると善太は伊平の所へ駈け寄つて、

『伊平さん、俺は明日から河合山へ木挽の弟子になつて行くんだから、今夜一晩だけ孫四郎さんを貸してお呉れよ。』と言ひました。

『孫四郎を貸せ？　お前は孫四郎を悟りてどうするんだい？』

伊平は薪を持ち替へ乍ら言ひました。善太はにこにこ笑ひ乍ら、

『信次さんと孫四郎さんとに、俺の家へ行つて貰つて、明日の朝まで面白い話をするんだよ。朝まで……』と言ひました。

『うん、さうか。送別會をするんだな。では孫四郎を伴れて行つて、泊めてやつてお呉れ。喧嘩をしちやァいかんぞ、喧嘩を……』

伊平は案外優しい聲で、さう言つて山を降りて行きました。

『あ、うれしいなァ。今晩は三人で朝まで話さう。あの芝の平のカシヤン坊の話をしよう。夫れから高々坊の話も……』

善太は嬉しさうに輕く手を拍きました。信次も調子に乘つて、

『私は笠松峠の夜討の話をするぞ。あの川合權の守の話を……』と言つて善太の顏を覗き込むと、孫四郎は負けぬ氣になつて、

『俺は天狗の話をする。天狗が蟬に殺された話をる……面白いだらう、天狗が蟬に殺されたと云ふのは。』

話してゐる時、與兵衞爺さんの聲で、山の下の方から、

『おうーい、信次……もう歸つておいで。御夕飯だぞ……』と呼びました。で、三人は急いで白い裏葉を見せて風に吹かれてゐる眞葛原を走つて、家の所まで行きますと、井戸端で鍬を洗つてゐた與兵衞爺さんは、憐むやうな眼で善太の方を見ながら、

『善さん、あんたは明日から山へ行くのかい。』と訊きました。

『はァ、お父さんが行けつて言ふから、半年か一年行つて、木挽を習つて來ます。』

善太は此の優しい爺さんに別れを惜むやうに言ひました。

『半年や一年ぢやア、木挽になれないぞ。どうしても五年は稽古しなきやア、一人前の板は挽けない。行つたら五年は辛抱しておいで。ね、善太は偉いから、その辛抱は出來るぢやらう。』

與兵衛爺さんは優しく、さう言つて大きな手の平で善太の頭を輕く撫でました。

『はい、お父さんもそんなに言つてゐます。一人前の職人になつて來いつて……』

氣の弱い善太は、もう聲を顫はせてゐました。

『さうぢや、一人前の職人になるまで辛抱するんだ。』と言つた與兵衛爺さんは、思ひ出したやうに、『善太、今夜はこゝでお夕飯を食べてお出で。孫さんも一緒に食べても善いだらう？　今夜はネ、栗飯を炊いてあるから……』

與兵衛爺さんは腰を屈めるやうにして、善太と孫四郎の顏を見較べてゐました。其時恰度坂の下から上つて來たお松は、

『善太、まだそこに居るのかい、早くお歸り……』と言ひ乍ら與兵衛爺さんの方に對つて叮嚀に叩頭をしました。

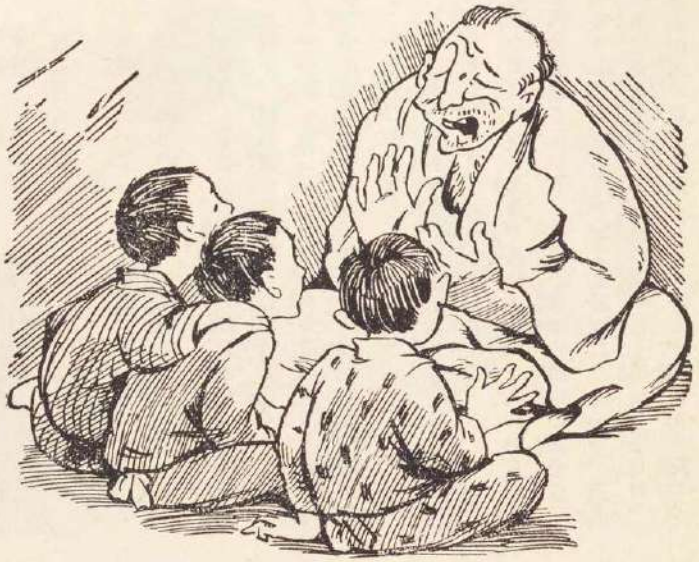
『あ、お松さん。恰度いゝ所へ來た。今晩はネ、私の所で善太さんに夕飯を上げるつもりですよ。夕飯がすんだら、信次と孫四郎さんが送つて行きますから……』

與兵衛爺さんは鍬を物置の中に措きながら言ひました。

『まア、夫れは濟みません。あの子も今少し學校へ通はしてやりたいんですが、何を言ふにも御覽の通りの貧乏ですから、一人でも口を減らさなければならないので。』

お松の聲は涙に潤んでゐました。與兵衛爺さんは其の言葉を遮るやうにして、

『あの子は屹度善い木挽になる。身體も達者だし、第一辛抱强い。五六年經つたら立派な一人前の木挽



になりますよ。』と言つて、お松を勵ましました。

『さア、どうなるものか……』と言つて、輕く頭を下げたお松は『夫れでは旦那樣、私は一寸用事がございますので……』と言ひ置いて、坂を降りて溝つ縁を左に曲りました。

『さア〳〵お出で。今晩は俺の歌を聞かせてやるよ。木挽の歌を……』

與兵衛爺さんは善太と孫四郎の手を執つて家へ入つて行きました。

夫れから三人は、表の五疊と臺所の堺目になつてゐる敷居の際にお膳を並べて、栗御飯を食べました。與兵衛爺さんはお酒が好きだつたので、ちびり〳〵とお酒を飲んでゐたが、大分醉が廻つたと見え年に似合はぬ美しい聲で、

木挽ア　いとしや　川合の奥で
半疊むしろの　小屋ずまひ

木挽ア　米のめし　炭燒ア茶粥
百姓男は　麥のめし
木挽さんかよ　お國はどこぢや
くには紀州の　日高奥

と、節面白く歌ひました。三人は面白がつて手を拍いたので、與兵衞爺さんは、口を少し尖らかして、『も一つ歌ふぞ。こいつは少々失敬な歌ぢやが、俺の作つた歌でないから、善公怒らないやうに願ふぞ……』と言ひわけをして置いて、

こびき　乞食は　一宇のちがひ
一宇ちがへば　みな乞食

と歌つてはゝゝと大聲で笑ひました。夫れから三人は與兵衞爺さんから、木挽や杣職の面白い話を聞いてゐましたが、もうやがて九時頃になるので、三人は小い炬火を燈して善太の家へ行く事にしました。善太の家は與兵衞爺さんの家から十町ばかり隔たつてゐて、其の間には竹藪があり、廣い野原があり、墓場もあつて、可なり寂しい路でした。で、三人は大きな聲で『木挽アいとしや、川合の奥で　』といふ歌を歌ひながら川の流れに沿うて急ぎました。

籟て善太の家の燈火が見える所まで來ますと、家の障子がさッと開いて、人の影が黑く見えました。『おうーい、鈴ちやん……』と孫四郎が呼ぶと、黑い影は手拭のやうなものを打振りながら、『おうーい……早く入らつしやい。』と呼返したのはお鈴の聲でありました。三人は柿の木の下を走つて、溝の上に架けた丸木橋を渡つて家の表まで行くと、今日まで留守であつた善太の父の與吉が歸つたと見え、床柱の前には赫黑く光る火繩銃が一挺立てかけてありました。

『あ、お父さんが歸つたの？』と善太は嬉しさうに叫びました。

『あア、今歸つたが、秋川さんの所へ御用があるつて出て行きました。』

お松は爐の傍から表の方を見ながら言ひました。すると善太は急に元氣を得たやうに、家の中へ駈け込んで、其の火繩銃を取上げながら、

『お父さんは猪か鹿か、なんか射つたか知ら？』と言つて、其の鐵砲の臺尻を頰の所に當てゝ狙ひを定めるやうな眞似をしました。

『さア、善さん、高々坊の話をしてお呉れ。』と言つて孫四郎が火鉢で爐の中を掻き廻したので、善太は高々坊の話を初めました。孫四郎もお鈴も信次も、一所懸命になつて其の話を聞いてゐましたが、話の終らぬうちに、お松は頻りに頭を傾げて、耳を欹てゐますので、善太は不思議さうに、

『おッ母さん、どうしたのです？』と話を中途で斷つて尋ねました。

『不思議だよ。誰か來てゐるやうです。裏の壁と石垣との間に……』

お松は又た耳を傾けました。善太は少し〳〵顔の色を變へて、

『うん、來當に……そうれ跫音がした……段々あつちへ行く……』と言つて眼をきよろ〳〵させました。活潑な孫四郎は裏の障子を引きあけて、首を突き出しながら、

『こりや、誰だ！　人の家の裏へ默つて入つて來る奴は……』と言ひました。其時お松はカンテラに火を點けて、高く孫四郎の頭の上に差出しました。

『お、あすこに居る。石垣へ身體を押つけて隠れてゐる。泥棒だ・泥棒だ……』と孫四郎が言つたので善太は鐵砲を持ち出して來て、

『こりや泥棒、鐵砲でうつぞ……』と叫びました。すると石垣に凭れかゝつてゐた人影は、矢のやうに畑の方へ消えうせたが、薄い月明りに畑を横ぎつて裏山の方へ逃げ込む姿が、はッきりと見えました。

『泥棒だ。表の吊し柿を盗みに來よつたのだ。』

お松も血相を變へて言ひました。其時表の所に下駄の音がして、與吉が歸つて來ました。

『あ、お父さんだ、お父さんだ！』と云つた善太は中から障子を開けると同時に、『お父さん、泥棒が來てゐるよ、泥棒が……』

『えッ？　泥棒が……』

與吉は信じられないやうな顔つきで、座敷の中を覗き込みましたが、一座の人々が皆な顔色を變へてゐるので、

『泥棒が何所へ來たんだい？』と問返しました。

『裏の石垣と壁の間に來てゐる……たしかに姿を見ました。』

善太が確信あるやうに言つたので、與吉は上り框の所にあつた山刀を腰にさして、

『善太、其の炬火をもつておいで……』と言つて表の障子をあけたが、善太は炬火をいちり乍ら、まごまごしてゐました。すると活潑な孫四郎は、

『よし、俺がもつて行く！』と言つて、與吉のあとについて出ました。

信次と善太は薪を一本づつ提げて孫四郎の後へ續きました。

そして四人が吊し柿を乾してある竿の所まで行つた時、バタ、バタといふ足音が聞えたと思ふと石垣の所から後の畑へ、駈け込んだ黒い影が見えました。

『こりや、川原乞食か、泥棒か……そこらで愚圖々〳〵してゐたら打ち斬るぞ。』

與吉はやッぱり恐しいやうに躊躇しながら畑の方へ二三間近寄りましたが、不圖足もとに木の箱が横はつてゐるのを見ました。

『炬火々々〳〵、早く炬火をもづて來い！』

與吉が大きな聲でさう言つたので、孫四郎は元氣を出して與吉の所へ走つて行きました。善太も信次も暗闇の中を炬火の方へ走りました。

『あ、蜜蜂の巣だ。蜜蜂の巣を盗まれた。いよ〳〵川原乞食に違ひない。』

與吉は怨めしさうに碎かれた箱を引くりかへして見ると、箱の中にあつた蜂蜜を貯へた窠は、すッか

り綺麗に掻取られてありました。
『川原乞食は蜜蜂の窠を取るんですか。』
孫四郎は不思議さうに言ひました。
『さうだ、川原乞食はかうして蜂の窠を取つて、夫れを米袋の中へ入れて蜜を搾るんだ。怪しからん奴だ。おのれ……夜が明けたら其のまゝには置かないぞ……』
與吉は足で毀れた蜂の窠の箱を蹴返し乍ら呟きました。そして四人は飼つてある蜜蜂の窠を一通り見廻つたが、五つの窠の中で、一番大きいのが一つだけ盗まれて殘りの四箱はそのまゝ無事でした。
四人が家へ戻つて爐の傍で、川原乞食の話をしてゐると、又た裏の石垣の所で人の跫音が聞えました
『又た來やがつた。ようし、一つ嚇かしてやらう！』
與吉は火繩銃を提げて、火繩に火をつけました。そして裏の障子を引開けて、
『こりや、又た來やがつたか、射ち殺すぞ！』と呶鳴りますと、泥棒らしい黒い影は、バタ〳〵と跫音を立てゝ畑の方へ走りました。
『孫さん、炬火をもつて來ておくれ。一つ嚇かしてやらう。』と云つて與吉は直ぐ裏口へ出ました。孫四郎はあとから續きました。
其所は狹い三尺足らずの屋蔭で、石垣の石が皆なじめ〳〵と汗をかいてゐるやうに濕つてゐました。年中日の目を見ない土の黴臭い香がぷんと鼻を衝きました。
二人は屋蔭を出て庭の所へ行きますと、又た其所に新しい蜜蜂の窠が碎かれて、其の箱が白い裏を見せてゐました。
『あ、又た一つ盗まれた。大膽な泥棒だ。おのれ其のまゝには置かないぞ。』
與吉がさう言つた時、後の笹籔の中で、ばさ〳〵と人の跫音が聞えたので、與吉は大きな聲で、
『こりや、出て來い。出て來なければ鐵砲をうち込

むぞ！』と呶鳴りましたが、籔の中からは何の返事もありませんでした。
與吉と孫四郎が家の表の方へ廻らうとした時、孫四郎が炬火を打ふり乍ら、
『與吉さん、與吉さん、泥棒々々……あ、あれ、蜜蜂の窠を……』と叫んだので、與吉は畑の方を見ますと、三つ目の蜜蜂の窠を肩げて悠々と裏山の方へ歩いてゐる泥棒の姿が、はツきり見えました。
夫れを見た與吉は直ぐ孫四郎の持つてゐた炬火を奪ふやうにして、溝ッ縁の所へ走つて行きました。そして細路を川に沿うて、一町許り上の方へ走つて
『おうーい、秋川さん。俺の所へ泥棒が蜜蜂の窠を盗みに來て、もう三箱盗まれたぞ。鐵砲をもつて助けに來てお呉れ……俺のは火繩銃だから、あんたの村田銃をもつて來てお呉れ……』と叫びました。
川の向ふの小高い所にある秋川の家の戸が開いたと思ふと、
『どうしたんだい？　何が來たんだいッ』と呼ぶ聲が聞えました。で、與吉は同じ言葉を繰返すと、秋川は二人の若者を伴れて、村田銃を片手に提げながら川の方へ走つて來ました。そして、
『泥棒だつて？　そいつは實彈ぢやァいけない。成るべく相手に怪我をさせないやうにして引捕へなければ……と言つて空砲ではまずいし、さうだ、この撒彈で射つてやらう。』と言ひ乍ら、鳥射に使ふ撒彈のケースを鐵砲にはめました。夫れから四人は急いで與吉の家の表まで來ましたが、家の中から、
『お父さん、泥棒はやつぱり居ますよ。早く來て引捕まへてやりなさい……』と呼んだのは善太の聲でありました。
『また出て來たか。しぶとい奴だなァ。』
與吉は庭の人口の所から云ひました。そして秋川と若者と四人で、裏の方へ廻つてみますと、四つ目の蜜蜂の窠が又た持つて行かれたと見え無くなつて

ゐました。

若者は左の手に炬火を一本づゝ差上げて、右の手には薪雑棒を握つて、秋川と與吉について後の畑の方へ突進しました。

『おい泥棒！　出て來い。出て來ないと鐵砲で射つぞ！』

秋川は鐵砲を構へながら叫びました。

『蜜蜂を四箱も奪りよつたな。承知しないぞ！』

與吉も火繩銃を向け乍ら言ひました。

『出てうせろ！　出てうせなきやア、石を投げ込むぞ！』

若者は口々に叫びました。其時笹籔の中でばさばさと跫音がしたと思ふと、四人の直ぐ目の前へ、ぬッ！　と姿を見せたのは、人間では無くッて、大きな眞黒い熊でした。

『あ、熊だ！』と言つた秋川は鐵砲を差向けたが、其の物凄い姿を見た若者は、炬火を持つたまゝ、生命からく〳〵一目散に畑を下の方へ逃げてしまつたので、秋川と與吉は、

『おうい、炬火々々……こりや、炬火をもつて來い……』と一生懸命に叫びましたが、若者は何所へ行つたやら、もう影も形も見えませんでした。炬火の火影さへ消えはてゝ四邊は眞暗闇でした。

秋川は、ふうーンといふ熊の鼻息を直ぐ顏の前で聞いたので、鐵砲を其所へ投げ捨てゝ置いて、一目散に畑の方へ走りましたが、足を踏み辷らして二三十間もある高い傾斜面の草原を、ころ〳〵と下の方へ轉がつて行きました。

秋川が其所へ足を踏辷らして、轉がつて行く前に與吉は鐵砲を肩げたまゝ其の草原を轉がり落ちて下の田圃の岸に落込んで、唸り乍ら身を潜めてゐました。所が間もなく畑の所から、ど、ど、ど、とけたゝましい音を立て乍ら轉がつて來るものがあるので、與吉は夫れを、てッきり熊だと思つたので、逃げ出

さうとしましたが、悲しい事には、腰を抜かしてゐたので、一尺も膝る事は出來ません。で、もう絶體絶命だ、いよ〳〵熊に咬み殺されるのだと思つて、息を殺してゐると、恰度自分の頭の上に、ど、ど、どうん……と轉がりかかつて來た怪物は、與吉の上に落ちかゝつた時、きやーッ！　と悲鳴をあげました。

きやーッ！　と叫んだ聲で、夫れが人間だと知つた與吉は、

『誰だ、誰だ。秋川さんぢやないか。』と叫びました。すると秋川は、

『與吉さんか。やれ、安心した。私はあんたを熊だと思つた……』と言つたが、急に泣聲になつて、

『與吉さん、どうかしてお呉れ。私は腕を折つた、左の腕を折つた！』と叫びました。

『困つたなア、私は腰をぬかして一尺も動けない……』與吉も泣き出しさうに言ひました。

『困つたなア。』『困つたなア。』と言ひ合つてゐた二人は、

『おうーい、來て呉れ……早く炬火をもつて來て呉れ……』と叫び續けました。

（つゞく）

長篇（前號まで）の梗概

十五少年漂流物語

漆州にニュージーランドといふ島があります。この島にオークランドといふ市があつて、そこにチエイマンといふ學校がありました。夏中休暇には二ケ月間の休みがあります。そこで、この學校に通學してゐる十五人の少年達が集つて、夏中休暇を利用してニュージーランド島を一周しようといふことになつて、少年の一人ガーネットのお父さんの所有船であるスロー號に乘つて、船出する事になりました。船には十五人の少年の外に、船長としてガーネット少年のお父さんが乘組み、外に副船長が一人、水夫が六人、料理番が一人、これは皆な大人が乘る事になつてゐました。ところが、いよいよ明日は航海に出ようといふ前の晩、ヤヤックといふ少年のいたづらの爲めに、まだ大人が一人も乘込まない内に、船が離岸してしまつたのです。沖へ出た時、船は大風に出遇ひ、遂に太平洋の眞つただ中を、風のまに〳〵吹き流されて、一つの無人島へ着きました。十五人の少年達は、この島で暮さなければならなくなりました。いつか助け船が來るだらうといふ微かな望みから、不自由なこの島で、艱難辛苦の生活をしました。寒い冬が來た後には春が來て、困難な生活にも慣れて來ました。ゴルトン、ブリヤン、ドノバンなどが年長者で、皆の世話をしてゐました。ところが、ブリヤンが何時も皆に人望があるので、ドノバンはそれを嫉んで、輪投げのことから二人の間に喧嘩がはじまりさうになりました。

山の少年

この長篇は、紀州の山の中に育つた三人の少年の物語です。三人の名は、信次、孫四郎、善太といひました。三人は山の中で思ふ存分毎日を樂しく暮してゐました。その日も三人は、山で、棕櫚の葉な尻に敷いて丘の上から辷つたり、川原へ行つて泳いだりしてゐますと、丁度そこへ、與兵衛爺さんが猪を追つて來て、美事に鐵砲で撃ち殺すのを見ました。三人は面白がつて、與兵衛爺さんに手傳つてゐますと、善太の妹のお鈴が兄を迎ひに來ました。善太は急にしをれ返りました。信治が善太に向つて、何故そんなにしをれた顏をしてゐるのかと尋ねると、「お父さんは、俺に木挽になれと云ふんぢや。俺は明日から川合山の奥へ行かねばならん……」といつて氣の弱い善太はもう涙をぽろ〳〵落してゐます。その内に善太の母親のお松も迎ひに來ました。善太はいよ〳〵今日を限りに遊び友達と別れて、木挽の弟子となる事になりました。

ラム王の一生

ラム王はエッペ國の瑚珊閣の子供として生れました。しかし、生れながらに變身術を覺えてゐましたので種々の不可思議現しました。大くなつてからは、諸國をさまよひ歩いて、困つてゐる國を救つて、種々の手柄を現しましたが、或時、ゴールデンバットといふ船に乘込みました。すると惡い妖婆の爲に、海底深く沈められて水邪鬼といふ鬼にされてしまひました。併しラム王は例の變身術によつて、海上に浮び上り、ある島へ來ました。ところがそこも怖しい島でバクイクイといふ、鷲の百倍もある鳥にさらはれて、空中から落されましたが、幸にも、例の變身術のお蔭で、命だけは取止める事が出來ました。

狐の鳴き聲

昔ある町に、人にものを訊くことの嫌ひな染物屋さんがありました。この染物屋さんは大へん利口な人で、お得意先からどんなむづかしい注文が來ても、立派に判斷をつけて拵へ上げるので、評判になつてゐました。

ある日、染物屋さんの店に一人の侍が入つて來ました。

狐の鳴き聲

——問答ばなし二つ——

鈴木氏亨

『ご免よ！』

『いらつしやいまし。』染物屋さんは丁寧にお辭儀をしました。

『お前の店で、どんな染物でもいたすな。』

『へえ！　どんな色にでも、お染めいたします。』

『然らば、これを染めて貰ひ度い。』侍は立派な絹布を、包みの中から出しました。

『お色はどんなものにいたしませうか？』

『狐の鳴き聲を染めて貰ひ度い。』

侍は染物屋さんの噂を聞いて、難題をもちかけて、困らしてやらうと思つて來たのでした。

『へえ！　狐の鳴き聲……』

『それから紋もつけて貰ひ度い。』

『どんなご紋にいたしませうか。』

『十足らずの紋をつけてほしいのぢや。』

『十足らずの紋！　お色が狐の鳴き聲で、ご紋が十足らずの紋、へえ……！　承知いたしました。』

染物屋さんは、二つともわかつてゐるやうな顔して、ひきうけました。

『では、しかと賴んだぞ。』

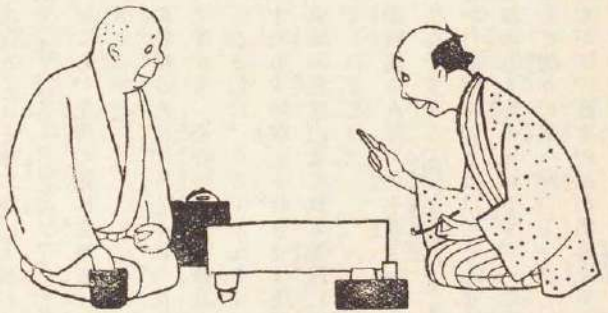
侍はきつく云ひつけると、さつさと歸つて行きました。

しかし染物屋さんは、引請けてはみたものの、狐の鳴き聲とはどんな色で、十足らずの紋とはどんな紋か、かいもくわかりません。

『こまつたことが出來たわい！』

人にものを訊くことの嫌ひな染物屋さんはいろ〳〵と考へてみましたがどうも判斷がつきません。

そのうちに、だん〳〵日數がたつて　侍　と約束した日が近づいて來ました。染物屋さんは氣が氣でありませんでした。どうしたものかと一人で心配してゐましたがどんなものかわかりません。すると、ある日、旦那寺の和尚さんのことが胸に浮びました。



『うむ、さうだ。あの和尚さんのところへ行つて見よう。』

染物屋さんはさう云ふと、仕度をして出かけて行きました。

『和尚さん、しばらくでした。』

『おゝ、これは珍らしい。誰れかと思つたら染物屋さんか、ようおいでだ。今日は一つ碁でも圍まうかな。』

『これは早速ですな、お相手をいたしませう。』

二人は寺の方丈で、ぱちり〳〵碁を打ちはじめました。ところがこの和尚さんには妙な癖がありました。それは碁を圍みながら、相手がなんか云ふか、かけ聲でもすると、すぐそれに答へると云ふの

でした。

『山の鯨と行きませうか！』相手がさう云つてさしますと、

『向ふ見ずの猪、と來たな。』和尚さんはすぐそれに答へながらさすのです。

染物屋さんは、その癖をよく呑込んでゐました。で今日こそ侍の難題を碁で解いてやらうと思つて來たのでした。さうすれば自分の嫌ひな訊くことをせずに濟むからでした。で、染物屋さんは和尚さんの癖の出てくるのを待つてゐました。

恰度いゝ頃になると、染物屋さんは

『狐の鳴き聲とは、これ如何！』

とひやうきんな調子で、石を打ちますと、和尚さんも

『上こん／＼と來たか。』と負けん氣で、答へながら石を打ちました。

『はゝあ、上等の紺に染めてくれと云ふのか。』

染物屋さんは、うまく行つたものですから、心中一人で笑壺に入つてゐました。そこでこんどは、

『十足らずの紋。』と行きますと、

『九曜の星よ。』とこれも速座に解いてくれました。

染物屋さんは、色も紋もわかつたもんですから、内心大歡びです。しかし碁がすむまでは、そんなことは少しも顏へ現はさず、一二番さして匆々に家へ歸つてきました

やがて、注文の品が出來上つたので、それを屆けると、侍も思

惑通り出來たもんですから、今更ながら染物屋のすぐれた才に感心して、大そう褒めました。

それからと云ふもの、このことが評判になつて、ものを訊くことの嫌ひな染物屋さんの店は、以前にもまして繁昌しました。

餅男

これも問答のお話です。

むかし、朝鮮の田舍に李憲尚と云ふ、大そう餅の好きな男がゐました。

ごはんをたべずに、餅ばかり喰べてゐるもんですから、誰れもその名を呼ぶものがなく、

餅男！　餅男！』と云つてゐました。

いつの間にか、『餅男』の名は、都にゐる王樣のところへも響いてゆきました。

ある時、支那から『あなたのお國の一番名高い人に、來て貰ひ度いと思ふがどうだらう。』

と云つて、一人の使が王樣のところへやつて來ました。

王樣は大勢の役人を集めて、會議を開き、誰れをやらうかと相談しました。

學者とか、音樂家とか、畫家とか、その頃有名な人は澤山ありましたが、これと云つてずば抜けて名高い人がゐませんでしたから、役人達は誰れにしたものかと、撰擇に迷つて了ひました。

するとそのうちの一人が

『餅男の李憲尚ではどうでせう。あれ程有名なものは、いま朝鮮にはゐないではありませんか。』と申しました。

他の役人は、あんまり變つてゐるもんですから、直ぐ贊成もしかねてゐましたが、頻りに考へてゐた王樣が、

『うむ、あれなら有名だからいゝだらう。』と仰つて、贊成されたもんですから、餅男は、朝鮮一の名高いゞとして、支那へ行くことになりました。

餅男はこれまで着たことのないきら／＼する着物を着て、立派な轎子に乘り、お供を澤山つれて支那へ出發しました。

支那の都では、『朝鮮一の名高い

人が來た。』と云つて大騒ぎです。

『それにしても、どんな物識りが來たのか、こちらも學者を出して一つ驗してやらうぢやないか。』と云ふことになりました。

餅男は、そんなことは少しも知らずに、大得意で威張つて行きますと、出迎へに出た支那の學者が餅男の顏を見るなり、兩方の指で圓をつくつて見せました。

餅男はそれを見ると、不審に思ひましたが、『支那でも、俺の餅好きを知つてゐると見えて、粟餅ではどうかと云ふのだな。』と推量しました。（朝鮮では粟餅を丸く、米餅を四角にこしらへるのです。）

『馬鹿にしてゐらあ、米の餅なら喰つてもいゝが、粟餅なんか誰が喰ふもんか。』と憤慨して、兩方の指で四角をつくつて見せました。

これを見た支那の學者は、どうしたのか大へん驚いた樣子でしたが、今度は三本の指を出しました。

『なんだつて、三つしか喰へないと思つてゐるのだな、まだ馬鹿にしてゐやがる！』こんどはほんとうに怒つて了ひました。そして、

『五つ喰へるぞ。』と五本の指を突き出しました。すると、支那の學者は、ひどく感心した樣でしたが、

『ほう！　これは偉い學者がやつて來た。』とつぶやいて、それから餅男を大へんに尊敬し下へも置かずもてなしました。

餅男は、なぜこんなにもてなすのか、わかりませんでしたが、きつと自分が立派な着物を着てゐるので、それで怖れてかう丁寧にするのだと思つてゐました。

それから、天子樣にもお目にかかり、諸々方々を見物したり、澤山の土産物などを頂戴したりして歸つてきました。

餅男は歸つてくるなり、王樣にお目にかゝつて、一伍一什を話しました。それを聞かれると、王樣は大そう笑はれましたが、やつと笑ひをやめられて、

『それは大出來だつた。しかし、支那の學者が、指で圓をつくつて見せたのは、天の圓いことを知つてゐるかと問ふたもので、ところで、お前が指で四角をつくつて見せたもんだから、地の角なことまでも知つてゐるのだな！』と解釋して「こりや偉い學者がやつて來たそれではうつかりしたことは聞けない。」と、こんどは指を三本出して、三綱（君と父と夫への道）のことはと問うて來たので、お前に五本の指を出されて、おや五常（仁義、禮、智、信を云ひます）のことまでも知つてゐるのだなと、急にびつくりし、「ほんとうに偉い人だ。」と感心し、それで驚いて丁寧に待遇したのだらう。と云はれました。そして、

『それにしても、うまくやつた。』と大そうお褒めになられました。

それからと云ふもの、餅男の名は誰れ一人、知らぬものがないやうになりました。

兎の耳が長くて前足の短いわけ

沖野岩三郎

兎が、まだ鹿程に大きかつた時分の話です。

三疋の兎は毎日仲よく山へ遊びに行つて、人間の仕掛けてある輪縄を咬切るのを樂みにしてゐました。所が或日、大兄さまは小兄さんとふたりで山へ行きましたがどうしたはずみか、まんまと輪縄に引かゝつてしまひました。で大兄さまは泣きながら、

『早く〳〵村へ走つて行つて、兄さんが人間の輪縄に罹りました。助けてあげて下さーいッ……て呼びなさい。』と申しました。小兄さんは直ぐ村さで走つて行きました

が村の入口まで來た時、何と云つて呼ぶのだつたか、すつかり忘れてしまひました。で、も一度大兄さまの所へ戻つて行つてみますともう大兄さまは其所にゐませんでした。

大兄さまがゐなくなつてからは小兄さんと弟兎とが毎日、山へ輪縄を毀しに行きました。所が或日、小兄さんは、まんまと人間の輪縄にかゝりました。で、小兄さんは泣きながら、

『早く村へ行つて、小兄さんが人間の輪縄に引つかゝつてゐるから直ぐ助けに來て下さーい……ッて呼びなさい。』と弟兎に申しました。弟兎はそれを聞いて泡を食つて村の方へ走つて行きましたが

待つても待つても、弟兎も村の人も來て呉れませんでした。

暫くすると一人の若い男が來ました。男は右の手に大兄さまと、左の手に弟兎の耳を握つてゐました。そして言ひました。

『いたづらをする事と、物忘れに上手な外に、何の取柄もないお前達に、こんな大きな身體はいらないものだ。』と言つて、見る〳〵大兄さまも小兄さんも弟も、耳だけ元のまゝに殘して置いて、小さい身體にしてしまはれました。

どうした間違ひか、その時若い男は兎の前足を少しく短くし過ぎたまゝ、引伸して呉れなかつたのです。

若い男といふのはオキキリムイといふ神樣であつたのです。

―知里氏のアイヌ神謠集に因る―

陣太鼓

田中實

昔、或お殿樣が、夕方の江戸の町をお忍びで、お供のものもつれずに、一人で歩いておいでになりました。方々歩いてゐるうちに、ふと小さな道具屋の前を通りかゝりますと、店に並べてあつた陣太鼓に、殿樣のお目が留りました。

『ホゝウ、これはおもしろいものをめつけたわい。』と思はれましたので、殿樣は表に立つて、その陣太鼓を手にとり上げポン〳〵と二つ三つ叩いてみながら、

『こりや〳〵亭主。』と呼ばし

『へゝえ――』

道具屋のおやぢは、その時算盤をはじいてゐましたが、誰か呼ぶので頭を上げて見ますと、そこには立派なみなりをしたお武家が立つてゐましたので、おやぢは慌てて飛び出して來て、丁寧にお辭儀をしました。

『お出でなさりませ。何ぞ御用でもござりませうか。』

『あれにある太鼓の代は何程ぢや。』

太鼓の値は二兩でしたが、おやぢは慾ばりものでしたから少し高く賣らうと思ひました。が、しかし若し高く云つて、お咎めがあつ

ては恐いと思ひましたので、
『ごりやうで……』と、口のうちで小さく呟くやうに、ベラ〳〵と早く云つてしまひました。そして二兩のものを五兩と云つたから、お叱りを受けるとばかり思つて、恐れ入つてゐますと、殿『何と申す。聞えぬぞ、ちと高う云へ。』
『あれでもまだ安いとおつしやるのか』
おやぢは目ゲバチバチさせて、ちよつと驚きましたが、
『ひちりやうで……』とまた呟きました。
『少しも聞えぬぞ、高う云ふがよい。』
おやぢ『へえ、じうりやうで……』

『何、遠慮には及ばぬ、高う云はぬか。』
こゝぞとばかりおやぢは、

『へえ、二十兩でござります。』と大きな聲で云ひました。
すると殿樣は、その陣太鼓を高く差上げて、ドンと一つ打つてみました。そして、さも感に入つたやうに、
『亭主、よい音（値）ぢやな。』と申されました。
亭主はギクッとして、
『いえ、いえ、決してお懸引は致しませんので御座ります。』と、慌てゝ答へました。
『よい〳〵。安いものぢや、余が買つて取らすぞよ。』
かう申されて殿樣は、二兩の大鼓を二十兩で買ひ取られました。
そこで、道具屋のおやぢは、思はぬ儲けをして、大喜びをしました。

ひよひよら ひよん

齋藤佐次郎

むかし、飛驒の山の中へ、大變に有難いお坊さんが來ました。お坊さんはさつそく村のお寺へお爺さんお婆さんを集めて、お說教をしました。ところが、そのお話がありがたかつたので、皆な涙をこぼして喜びました。
『皆さん、私は皆さんが極樂往生の出來ますやうに、いゝ歌を敎へてあげませう。この歌さへ唱へれば、どんな惡人も極樂往生うたがひありません。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……』といつて一段と聲に力をこめて、
『心かな、心まよはす心かな
心の内のたづなゆるめそ』
と、三遍唱へました。
お爺さんお婆アさんの喜びつたらありません。極樂往生が出來る歌だといふので、皆な耳を立てて聞きました。
ところが、それから二日たつての事、お坊さんの有難い歌を聞いたお婆アさんの中に、お初婆アさんといふのがありましたが、縁側に出て、日なたぼこをしながら、ふとお坊さんの歌は何といふのだつけなと思ひ出しました。
お初婆アさんはすつかり忘れてしまつたので、切りと首をかしげて考へてゐましたが、とうしても思出せないのです。しかし、その内にひよいと思出しました。あゝさうだ〳〵とつぶやいて、
『とゝらから、とゝらまよはす、とゝらかな。あゝさうだつた、有難い。』といひました。お初婆アさんは、すつかり喜んでしまつて、
『とゝらから、とゝらまよはす、とゝらかな。』とやつてゐましたが、その内にどうも變だぞと思つて來ました。少し間違つてゐるやうな氣がするのでどうも不安心になつて來たので、おとなりのお熊婆アさんのところへ行きました。
『お熊さんや、あのこの間のお坊さんが仰つた極樂へ行ける歌といふのは、何といふのだつけな。』と聞きますと、お熊婆アさんは、大

得意で、

『まアお初さんや、あんた忘れた

のかい。もつたいないにも程がある よ。』といつて、お熊婆アさんが教へてくれた歌といふのは、

『かゝらから、かゝらまよわす、かゝらかな』といふのでした。

しかし、お初婆アさんは、どうも違つてゐるやうな氣がしますので

『お熊さんや、それぢやア違ふよ。もう少し何とかいふのだつたよ。』

と、いひました。

成る程いはれて見ると、お熊婆アさんも少々變だと思つたので、そこで二人は、村中で一番物識りだといはれてゐる五平爺さんのところへ行つて、聞きました。

五平爺さんは大得意で、

『お初婆アさんも、お熊婆アさんも違つてゐる。私はちやんと覺えてゐるんだ。』といつて教へてくれたのは、

『ひよひよらから、ひよひよら

とびだす ひよひよら ひよん』

と、いふのでした。

お初婆アさんも、お熊婆アさんも、物識りの五平爺さんがいつたことなので、成程と思つて、一生懸命にそれを覺えました。

お初婆さんも、お熊婆アさんも、それから間もなく死にましたが、お初婆さんがいよ〳〵息を引取らうとした時、蟲のなくやうな聲で何かいつてゐるやうなので、子供や孫達が枕もとに集つて、

『お婆さんや、何かいひ殘すことがあるかい。』といひましたがもうお初婆アの耳には、それは聞えないらしく、たゞ一人で何か唱へてゐます。耳を澄して聞きますと、

『ひよひよらから、ひよひよら

とびだす ひよひよら ひよん』

と、繰返し唱へてゐるのでした。

鰐が淵

山野虎市

磐城の國平の町を四里ばかり北へ行くと、久の濱といふ海水浴場があります。この久の濱に、深い淵があるのです。これがこの地方で有名な鰐が淵です。その岸は、きつ立つた崖で、その水は恐ろしい程青く澄んでゐて、淵の眞中には大きな渦が卷いてゐます。今までこの淵に身を投げた者で、その死骸が見つかつたことが無いと云はれてゐます。

さて、この久の濱の邊に、波立の藥師といふ藥師堂があります。昔、何時の頃よりか、この藥師堂に一人のお坊さんが、一人の可愛い娘と一しよに住んでゐました。お坊さんは身に墨染の法衣を纏ひ一心に佛の道に仕へてゐる氣高い人でありましたが、娘一人を、この世にかけ代へのない寶のやうに可愛がつてゐました。

娘はだん〳〵美くしく成長して、立派な娘となりました。

ところが、或る夜、不意にこの娘の姿が見えなくなつたのです。

お坊さんの驚きはどんなだつたでせう。近所の人と一しよに、彼方此方と心當りを探しましたが、遂に娘の行方が分りませんでした。そこで村中の騒ぎになつて村の若い人達が、總がゝりで娘の行方を探して歩きました。併し、娘は何所にも姿を見せませんでした。

その中にいろ〳〵の噂が、濱の人々の口から口へと傳はりました。或る人は、娘が見えなくなる十日許り前から、夜な〳〵藥師堂のあたりを一人の美くしい侍が徘徊いてゐたのを見た、と申しました。

途方に暮れた父のお坊さんは、

『之は魔物の仕業かも知れない。』

と考へたので、一振りの刀に、自分の娘の名前を書きつけて、鰐が淵に投げ込みました。

それから幾日も經たない中に、久の濱から餘り遠くない海邊に、一匹の死んだ大蛇が打ち上げられました。漁夫達は大騒ぎをして、近よつて見ますと、その大蛇の身體に、一本の刀が突き刺さつてゐました。

この刀は、波立藥師のお坊さんが、鰐が淵に投げ込んだ刀でありました。

併し、娘はたうとう歸つて來ませんでした。

今でも、大蛇の身體を刺したその刀といふのが、その藥師堂に保存されてゐるさうです。

おすわどん

西川喜平

今から六七十年も前、東京がまだ江戸と云つた時代のお話です。

その頃、江戸の市中は、商人の家より、大名や、旗本などの屋敷が多かつたので、淋しい所が澤山ありました。

花川戸に、日本橋のある大商人の隱居所がありました。その御隱居は、六十餘りの人柄のいゝ老人で、茶の湯とか、俳諧とかを樂しんでゐる人でした。この家へ近在の田舍から、初めて女中奉公に來た、おすわと云ふ娘があり ま した。

花川戸は觀音樣の近所だけに、晝は賑かですが、夜になるとズツと淋しくなります。田舍とちがつて江戸へ初めて來たおすわは、何んとなく氣味がわるく思つて、遠くから聞える太鼓の音や、按摩の笛、犬の遠吠え、夜番の鐵棒の音も異樣に聞收れました。それに『迷ひ子の〳〵の三太郎やあい』し、鉦や太鼓でまひ子探しをする有樣は、何ともいへない哀れなもので一層淋しさが增しました。

おすわは初めての奉公なので、田舍の家の親のことや、姉妹のことが思ひだされて、涙ぐまれて却却眠れませんでした。だん〳〵夜が更けて外の物音と途絶え、辨天山の鐘が聞えるばかりで世間はヒツソリと靜まりました。すると、

フト耳に入つたのは遠くで、『おすわどん』と呼ぶ聲です。ハツト驚きましたが、もしや耳のせいかと、ヂツト耳をすましてゐますと、又『おすわどん』と呼びます。

おすわはもうたまらなくなつて夜着をスツポリ被つて、息をこらして小さくなつてゐました。それからも二三度呼びましたが、間もなくパツタリ聞えなくなりましたサアおすわは氣になつて眠られません。私の名を知つて呼ぶからには、きつとお化に違ひない、向ふ川岸の本所には七不思議と言ふものがあるさうだが、もしお化としたら、どんなお化だらう。晝にある黑い髮を下げて、白い衣物を着た幽靈か、それとも鐵の棒を持つた鬼か、羽團扇を持つた天狗か、と、いろ〳〵思ひ廻してとう〳〵一ト晩寢ずに明かしました。

翌朝おすわは、主人の隱居さんにそのことを話しました。隱居さんは暫く考へて居ましたが、やがて膝をうつて、アハ、、、、、、と笑ひました。そして

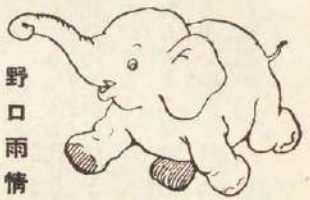
『よし〳〵今夜は私が正體を見現はしてやらう。心配することはない。』と受け合つて下さいました。

やがて夜になつて、其刻限になりますと、又『おすわどん』といふ呼聲が始まりましたので、おすわはソラ出て來たとふるへ出しますと、隱居さんが『今正體を見せてやるよ。』と言つて、その聲が近くなるのを待つてガラリと窓の戸を明けました。そこで、それ御覽と指をさしましたので、おすわは怖はん〳〵見ますと行燈に

（そばうどん、あたりや）

と、書いてありました。

お化と思つたのは、禿頭の爺さんで、『毎度ごひいきさま有難たう御座います。』と、お辭儀をしました。早速皆んなに、おそばとうどんの御馳走が出ました。



童謡

野口雨情選

（大人篇）

海見ていつた
烏賊の行列
見にいかう

澤のむじなの
とんがり口は
月が落ちれば
なほ細い

澤のむじな

東京 林町 梶 茂芳

澤のむじなが
空見ていつた
狸の踊りを
見にいかう

澤のむじなが

ふくろ

横濱市 本牧町 佐藤よしみ

いつ日が暮れた
驚いた ほッ

お月さんそんなか
たまげた ほッ

もう早や夜更けか

寒いぞ ほッ
寝ぼけた梟が
なきだした

青い目の人

横濱市 北方町 久保ひさし

港の小父さん
恐よな小父さん
目の玉青くて
しよろ〳〵高い

とつても大きな
船見てゐたら
とつても澤山
青目がゐたよ

元祿袖に

顔かくして見たら
皆くす〳〵
笑つてゐたよ

鼠の子供

名古屋 東陽町 鳥本 夫二

鼠の子供
天上裏ぬけた

となりの鼠と
月見に行つた

鼠の子供
ちよこちよこ走り

となりの鼠と
ちよつと出て行つた

夜の海

一一

大阪市 鍛冶屋町 田中 美春

一つ
あかりが
よるの海

二つ
ならんだ
舟あかり

空は一ぱい
星あかり

もぐら

臺北 宮尾 土子

もぐら もぐもぐ
もぐつちよ よ
雨が 霽れたで

うれしかろ
裏の はたけの
もぐつちよ よ
トンネル 工事は
いつまでか

もぐら もぐつちよ
もぐもぐ もぐれ

川邊の葦切

群馬縣 粕川村 青柳 花明

川邊で葦切
ホイホイホイ
友達ほしくて
ホーイホイ

水は流れる
日は暮れる

お空は夕燒
あかい雲

船頭は歸つて
舟ばかり
渚にゆらりこ
搖れて居る

川邊で葦切
ホイホイホイ
ひとりぼつちで
ホーイホイ

かへる

仙臺市 米ケ袋 冬木 一

田甫の中から
空見たかへる
山は夕やけ
眞赤にやけた

明日は天氣だ
いゝお天氣さ
お玉杓子は
五十と二匹
山はゆふやけ
あすもお天氣さ

ねんねのお人形

臺北市 兒玉町 野村 詩郎

お人形ねかしよう
ゆりかごに
ねんねの子守に
ねんね草
一とつ二たつ
かざりませう

ねんねのお唄に
鈴の音に
あはしてゆりかご
ゆりませう

童謡

野口雨情選

（子供篇）

月見草

門司市 清見町　出石　三雄

野原の隅に
月見草が咲いた
見てゐたものは
お月さんばかり
野原の隅の
月見草が散つた
見てゐたものは
お月さんばかり

蟻

山梨縣 小笠原校　武田　家繼

ぞろ〳〵と
蟻どう
おはかまゐりか
ひつこしか
どこへぎやうれつ
つくつてく
こん夜
雨でもふるのかい

十五夜お月さん

深川區 明川校　藤本　司郎

十五夜お月さん
まだ出ない
河原ぢや月見草が
待つてます
十五夜お月さん
どうしたの
野原ぢや
うさぎがないてます
よんでもまつても
十五夜の　月は
一晩出なかつた。

夜あけの星

京都府立 第一高女　岡本しな子

夜明けのほしは
ほろ〳〵と
夜明けの空に
消えてゆく
町のあかりも
ほろ〳〵と
夜あけの町に
消えてゆく

あひるの夢

福岡市 女師附屬　野上　工藏

夏の眞晝の
川ばたで
二匹のあひるが
夢見てた。
白いあひるが
見た夢は
銀の卵の
金の夢

黄いあひるが
見た夢は
金の卵の
金の夢

時計

高知市 中村町　永橋　大介

うちの時計は
かち〳〵時計
かち〳〵山の
かち〳〵時計
うちの時計は
かち〳〵時計
たぬきの背おつた
かちかち時計

夕やけ

山梨縣 澤松校　井上　盛三

夕やけこやけ
赤いおべゝを
きてかへる

とんび

濱松市 後道　中村　政雄

とんびは空を
まはつてる
家ぢやばあさん
臼引だ

蝶々雲

東京府 江北校　岸　亮一

可愛い　なつかし
てふちよ雲
きのふはどこで
遊んでた
今日はこゝで
遊びませう
かはいゝなつかし
友等と

ふくろ

長野縣 松代町　坂口　生芽

ホーホーふくろが
森の木で
獨りぼつちで
淋しいの
ホーホーふくろは
親なしか
ホーホーふくろは
宿なしか
ホーホーホー啼いて
ゐる

麥たゝき

香川縣 氷上校　長尾ヨシエ

とん〳〵
とん〳〵
麥たゝき
父さん
「ヤーほい」
合してる
とん〳〵
とん〳〵
麥たゝき
隣りで
「よーほい」
合してる

幼年詩

若山牧水選

算術（賞）

千葉縣安房郡北三原校高一　鈴木　隆司

むつかしいむつかしい算術が
遊んで居たら
ちよつとわかつた
嬉しかつた
土へ書いたら
ほんとにわかつた

評、調子がいかにも自然である。（牧水）

せきれいの子（賞）

山梨縣北巨摩郡北志校分校　津金あつ子

せきれいの子供が
石かけのあなで
四ひきでなかよく
ねむつてた

評、絵にすると可愛いゝ絵になりますね。（牧水）

なはしろ（賞）

香川縣木田郡氷上校高一　入倉　薊

天神裏の
苗代田の水が
あさくなつた
毎朝五位鷺がおりて
足目を
つけてゆく

評、「足目」などいふ言葉は子供でなくては云へない。（牧水）

夜

廣島縣向島校　吉村サカエ

せきれいの子供が
石かけのあなで
四ひきでなかよく
ねむつてた

評、絵にすると可愛いゝ絵になりますね。（牧水）

なはしろ（賞）

香川縣木田郡氷上校高一　入倉　薊

天神裏の
苗代田の水が
あさくなつた
毎朝五位鷺がおりて
足目を
つけてゆく

評、「足目」などいふ言葉は子供でなくては云へない。（牧水）

夜

廣島縣向島校　吉村サカエ

綴方

齋藤佐次郎選

田植の有様（賞）

和歌山縣伊都郡見好村三谷校高二　中山　治夫

眼をすーッと田の方に向けた。僕は思はずあゝとさけんだ。それはどこの田にも六七人の男女が入つて苗を植ゑてゐて、ちやうど、小さな蟻がたくさんより〳〵してゐるやうである。どこの田でも女の人は帛を裂く樣な聲で歌をうたひながらざぶ〳〵と苗を植ゑて居る。いかにも忙しさうである。左手に多くの苗をつかみ右手に少しづゝ苗をつかみそれをさぶ〳〵と水音高く植ゑて居る。忙がしさは畫にも口でも現す事が出來ない位である。あとから〳〵と運ばれて來る苗を乙女は見むきもせず、五六人の人とともに、腰をも伸ばさず後へ〳〵へ植ゑ附けて行く。運ばれて來る苗もたりない位である。まだ牛をおうて田をすいて居る所もあれば今ならし居る所もある。もう皆な植ゑてしまつた所もあれば今植ゑかけて居る所もある。六七十頃のおぢいさんはもう田植がすんだと見えてやれ〳〵これで一安心と喜んでゐる樣子でたばこをすば〳〵とのんで居る。母燕は子ツバメを引きつれ、たんぼの上を飛びまはつて居る。空を飛ぶ鳥、道を歩む犬、子供達も皆忙がしさうに足を運ぶ。向ふより苗をにのうた農夫が一人、紳士とつれて來た。農夫は「まあ今年の梅雨はさつぱり雨がないのでこまります。今は水があるが後にはきつとこまりますよ。」と言つた。紳士は「私方にもみかん山は一つもなし、田ばかりで、日やけとなるとこまりますね——」と二人は語り合つて通りすぎた。太陽は次第次第に西山に沒しやうとする。子供達もかへり出す　一人の子供が「アンマがピイ〳〵日がクレタ、馬もヒンヒン日がクレタ、牛もモーモー、モーカヘロ、からすカア〳〵カエリ出ス。」と云いつてかへつた。東の空にはまるい〳〵月がニューと顔を出した、が皆はまだかへる樣子もない。月はだん〳〵高く昇つて下界を照らし田の水の上にもはつきりうつつた。乙女の聲は帛を裂くがやうに夜のしづけさを破つて耳にきこえた。山の方ではホヲトントケタカ〳〵と山時小鳥の鳴き聲がはるかにきこえた。その中、さしもの大きな田でも、一枚ものこさずうゑてしまつた。もうそこらがうす暗くなつて來た頃、農夫や乙女はぞろ〳〵とかへり出した。僕もハッと思ひ家へと

（畫）自由さんの神　香川縣氷上校　木田郡六條　松野義雄　熊

夜が來た
さびしいさびしい
夜が來た
人のとほらぬ
夜が來た

評、いかにも淋しさうな心が調子に出てゐる。(牧水)

金魚屋

京都市小川通一條下ル　伊藤富士雄

「一匹三錢」
札の下の鉢に
金魚が仲よく
およいでゐる

評、前の「せきれいの子」と似てゐるが、こちらが少しませてゐる。(牧水)

朝

埼玉縣入間郡山根校第六　大野　勤一

雞ないた
夜があけた
二階から誰か
おりてくる

評、兄さんだナ。(牧水)

麥かり

香川縣木田郡氷上校高一　出井シヅエ

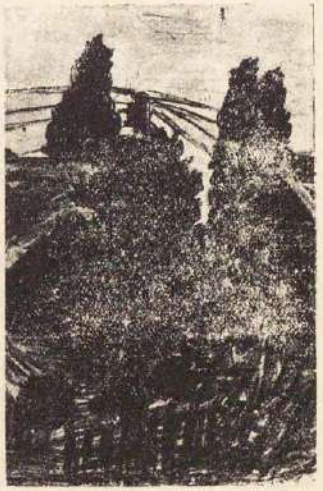
あちらでも
こちらでも
かまの音が
ざく〳〵きこえる
私は豆をちぎつて居る

評、あなた、蓮井君守西さん、みな寫生がうまい。(牧水)

魚つる子供

香川縣木田郡氷上校高一　蓮井　竹一

川端の柳の下で
小さな子供
風に吹かれながら



自由畫）風景

立ちかへつた。これからの農夫の辛苦はたとへやうもない。

狐（賞）

香川縣木田郡氷上校高一　池淵　淳一

「ほら――狐だ、早うおはへ〳〵」と誰かゞかう叫んだ。僕は「どこだ〳〵。どこへ狐がいたんや」と言ひつゝ下駄とざうりを片方づゝ引つかけて走り出た。西屋の南へ走つて行くと、母が鍬をかついでゐる。私を見るとすぐ「淳一早よう裏へ廻れ」と叫んだ。私は「よしきた。又出てうせやがつた。こんどこそきゆうつと言はせてやるぞ」と言ひながら、一生懸命に裏の方へついてゐる笹道を走つた。

雞が急に「コケツコ　コケツコ……」と鳴き出した。私はおのれと思つて一層走つて行つて見ると、雞が羽をバサ〳〵廣げて籠の中から飛び出ようとしてゐる。「グワ〳〵〳〵」と頻りになく。ふと見ると太い檜の向ふ側で狐がにらんでゐる。私は急に立ち止まつて、ぢつと竹の棒がないかと見渡した。その間に狐は私を知つて走り出した。雞は一層「グワ〳〵」となく。赤灰色の毛のはえた、尾のすこし黑みがかつた狐だ。私は「おのれくそッ」とそこにあつた小石を五、六ベンつかんで〳〵バラとなげつけた。その石の一つがあたつたのか、狐は「くい〳〵〳〵」と鳴きながら、飛ぶやうにして裏山の竹の中へ逃げこんでしまつた。私は追はへて籔の中へ飛びこんだが見失つた。「あーしまつた」と言ひつゝ引きかへすと、いつの間にかはだしになつてゐて、左の小指がチク〳〵と痛んで來た。よく見ると何かでついて血が流れてゐる。私は「痛い〳〵」言ひながら表の方へ引つかへしてくると、弟（二學年）が「あんにやんやつたんか」と、やつてくる。私は指が痛いので返事をせぬ。すると弟がやつたんか」と又言ふ。私は急に「うんやつたぞ。大きな奴ぢやが。籔の木につり上げてあるは」と言つてやつた　私は村田重則くすくすと笑つたので、弟はこうそいへ

自由畫）景色

魚を釣つてゐる

今朝

香川郡木田縣永上校尋五　安西マサエ

ゆふべの風の
のこりが
今朝はまだ
寒い

幼稚園の子供

神戸市塚本通　高橋久藏（十五）

幼稚園の子供が
通つてゐる
芝居をしながら
通つてゐる

評、見たまゝをよく寫生すると、見てゐた時のこゝろもちがよく出ます。これもその一つです。（牧水）

夕雲

弘前市和徳町八二　木村ノブ

夕方の雲が
人のかたちになつて
遠く行つた

ねこ

千葉縣安房郡北三原校尋三　忍足正子

ねこがはなを
そめてきた
どこでそめたか
わからない
私のひざに
すわつてて
私の着物を
そめちやつた

一年生

石川縣小松椎松校尋六　山本松子

しぶ〳〵雨が
降るのに
一年生が道草

（自由畫）笑顔　神戸市四丁目塚本御通筋　高橋久藏

——笑ひよるが——あんにやんのから鐵砲よ」と蟲歯を見せて笑つてゐる。

「淳一一寸來てみまい」と母の聲がした。何かと思つて表口の方へ行くと、母は、「お前嶽山の岩が崩れてゐるせ——淳一の鐵砲はきついの——」と笑はれた。弟はすぐ「ほらみーあんにやん。うそ言よつたら、えんまさんが帳につけるは——」と言ふ。私は「あの狐は昨年も來た奴だ。それに違ひない」と言ふと、母は「用心してをりまへよう。又あれが來たら困るせ。去年など田甫へいとる間に、鶏を二匹もとられたしあれなんか今まで居つたら一圓五六十錢にもなつとるのに」と言つた。私は何だか拍子抜けがして、ぶら〳〵池の堤の方へ歩いて行つた。お日樣がずつと西の嶽の端へ落ちかゝつてゐる　池の向ふの堤で、赤牛とまだら牛が頻りに草を食うてゐるのが、靜かな波にうつつてゐる。私は淋しくなつて又ぶら〳〵家へ歸つた。矢張り足の指が痛んで仕樣がなかつた

山登り

京都高等手藝女學校内　倉垣千歳

私と井永さんとはフウ〳〵と息を切り乍ら、きつい坂を一足々々と登つていつた。山の麓より頂上まで十三丁あるといふのを、やう〳〵の事で、七丁目位まで登り着いたのである。坂は上に行くに隨つてだん〳〵に急になつて行く。背には早一面に汗がにじんで、氣持ちの惡い事一通りで無い。「永井さんえらくない。」私は傍の木でやつと體を支へて、汗を拭き乍ら、私より後れてよち〳〵と登つて來る友を振り返つてかう言つた。「ああえらい、貴方强いのね。とてもだめなんかついて登れない。」永井さんは悲しさうな聲をあげてかう言はれた。四丁目頃になつて、稍〻平な處に出た。二人は言ひ合はした樣に、片側の草の上に腰を下して休んだ。顏が急にほてつて暑

（自由畫）ヂキスリタ　福島縣安積郡湯野村尋六校　喜代惠

くつてる

雨

山梨縣七巨摩郡江草校尋五　小尾　政友

おとてーから降つた雨で
山の木がしをれてる

たうゑ

山口縣熊毛郡八代校尋五　久行フジノ

うちの田に
そをとめが
すうらりとならんだ

花瓶

香川縣木田郡氷上校高一　野崎テル子

音樂室へ行くと
小さい花瓶に
山や家が
青く小さく
みなうつゝてゐる

（自由畫）　白澤一郎

蔭

愛知縣上傳知郡豊田村天王橋市町　自由

私にすぐ奥からでてきて見るとそれはさかな屋であつた。母は「こんにちは。」と同じやうに言つて、ぬれた手を前垂でふき〳〵でゝきた。魚屋さんは母がでゝ來ると「今日はさばばかりですが、如何でせう。」といひながらふたを開けた。母は「さばは一ついくらですか。」と聞くと「こちらの大きい方が三十錢でその少し小さい方が二十五錢です。」といつて、さかなの頭をひつぱつて居た。「それでは小さいのを二つばかり下さい。」と母は言つた。「さうで

縁れてかきまはしてゐた。すると表の方で「こんにちは。」と言つたものがあつた。

さかな屋

神奈川縣都筑郡中川村大棚尋六　吉野　ユキ

學校から歸つて机によりかかつておさらひをして居た。母に流し元の方で小麥だんごでもこしらへるのだらう麥粉をおはちの中へ入い。脊中の汗はだん〳〵とにじみ出る。脊中に手を當てると、着物がじつとりと汗ばんで居た。

ぬくいひる

山口縣熊毛郡八代校尋四　岸崎　繁雄

にはとりが暖たかさうに
ないてゐる。

蝶

山口縣熊毛郡八代校尋四　荷本　正雄

ちら〳〵ちつてきた
花かと思へば蝶であつた
蝶を見るといかにも春らしい

ばかのからす

東京府荏原郡池上校尋四　村上　博

かあー〳〵
からすがなきだした
家の屋根でなきだしゞ
ばかなからすは
あれだらう

すか切りませうか。」

「えゝ。切つて下さい。」母はさういつて肥とお錢を持つてきた。魚屋さんはびか〳〵光るでばばうちやうで魚を切つて皿へのせた。「それでは五十錢ですねい。」と母は五十錢銀貨をわたした。魚屋さんはびつしよりな生ぐさい手ではらがけの中から財布をだしてその中へがちやがちやと入れた。そして魚をかついで「どうも有難うございました。」と言つて歸つてしまつた。

犬の行水

京都市小川通り一條下ル　伊藤　威（十三才）

夏が來た。手や足が燒ける樣だ。土曜日學校から歸つて、一寸休まうと思つて居たら、「威さん晝から一寸お使に行つて來てや」とお母さんが言はれたので、「はゐは」と返事して靴をぬいで上に上り、今日は學校が晝までであつたから、晝御飯をたべてからお使に行かうと思つて御飯をたべた。お母さんは二階を掃除して居られたので、下から「お使に行つて來まつせ」と言ふと「おゝきに」と言はれた。お金と風呂敷を持つて暑いから走つた。走つたら、よけいに汗が出て暑かつた。堀川に來ると犬が洗濯をしてもらつて居る。白と黑と斑の可愛らしい犬。うれしさうに尾を振りながら川に入つて居た。時々向ふの岩に泳ぎ着かうとして、水に流される。主人らしい人が、犬を捕へて四角い箱の中から石鹸を出して、水にぬらしては犬の毛につけて居る。僕が見て居るとたくさんの人が集つて來た。

通信

入選自由畫評

山本鼎

今月は少かつたが、つぶは揃つて居ました。もつと黒一色で描いたものがあるといゝといつも思ひます。今月から一番佳い繪をさきに批評して、順にかいてゆく事にします。

△熊野義雄君の「小神さんの松」鷹揚な好もしい繪です。濃淡の自然にもつと注意してもらひ度い。

△田村重則君の「風景」柿の木だか何だかわからないが、勢ひのある感じのいゝ水彩畫です。

かゞし見たいなものはなんですか？　君はうつかりすると、唯亂暴な繪になりさうですから、現さうとするものに就て、よく落ついて仕事しなければいけません。

△三浦美根子さんの「風景」強くしつかり描けて居ます。唯濃淡をもつと氣をつけないといけない。それから瓦家根の色が出たらめです。あれではたゞクレイヨンの青色です。中央の立木がよくかけて居る。

△高橋久藏君の「笑顔」なか〳〵うまいスケッチです　かげの紫鉛筆はよくありません。

△自澤一郎君の「緑蔭」少しいきぐるしい繪ですね。クレイヨンはやはり線の重ね合せで濃淡を出していつた方がよいでせう。紙の肌目へ擦筆的に繪の具をつけていつたので、繪が死んぢまつたのです。紫クレイヨンの色がいやな色ですね。調子つぶれの色をつくつて居ますね。

△野地喜代惠さんの「ザキヤリス」惡くはないが、少しだらけて居ますね。花瓶の紫色はあんまり突飛な色ですね。

幼年詩選評

若山牧水

▲子供の作品はすべて寫生から入つてゆくが自然だと思ふ。內容に意味のないただ調子からのみ出來てゐる樣な（たとへば或る手鞠唄の如き）唄は從程意識を働かせての後に作らるべきで、自然天人の作の部に屬する事とならう。で、私はいつも寫生をもとにした作から先に採つてゐる。無論それも單なる寫生ではない。寫生する對照物に對して動かされて作者の子供の心が出てゐる事を必要とする。

▲第二にいつも云ふ通りに、子供らしいのを尊ぶ。『ぱつたん』（埼玉縣山根小學校尋六　坂本好造君作）の題で

ぱつたん米つく
一斗つく
ぱつたん機おる
布五尺
いきがしいそがし
ぱつたんぱつたん

など、いかにもうまいが、やゝうますぎる觀がある。また「夕の新」（青森縣中津郡豐田村柳田英二（一四）君作で、

母ちやん
夕の鐘が鳴りました。
都會の鐘がなりました。
夕の新を致しません。
淋しい人々の
悲しい人々の
爲に……、

また「若葉」秋田縣岩崎小學校高二　高橋京之輔君作。

アレ！、
あの緑の木から
緑の汁が溢れ出ないだらうか。

一面からいふと驚くべき才能が見えるが、どうも私には先づその前に一種のくさみが感ぜらるゝ。

▲海達公子さんのが今度も秀れてゐた、先回のが偶然の出來でなかつた事を示してゐる。

綴方選評

齋藤佐次郎

▽今月はめづらしくいゝ作が深山に集つた。上手だけれでも、氣取つたところのあるために落ちた作も四五ありましたが、入選作の主なるものを擧げると、

▽中山治夫さんの「田植の有樣」は推奬していいだけの立派な作である。力が一ぱい張りきつてゐる作だ。書く方でも樂でなかつたらうと思はれるほど、一生懸命に書いてある。かうなくてはいけない。農夫達の熱心な田植の有樣が實によく書けてゐる。月が出る頃までも熱心　働いてゐるその有樣が、ぱつきり見る事が出來る。この作はよく書けてゐるばかりでなく、われ〳〵大人に深く考へさせられる作である。

▽池淵淑一さんの「狐」。これも素適にいゝ作だ。近頃での上出來の作だ。狐を追ひかけて騒ぐあたりも上手に書けてゐるが、終りの方で、もう日が落ちて、土手で牛が草を食べてゐるのが水に映つてゐるあたり、いゝなアと思ふ。

▽此の作も前の「田植の有樣」も共に長がすぎて、雜誌に掲載する上には、困るのであるが、いゝ作のために途中で切るのに忍びないで全部をのせました。

▽倉垣千歲さんの「山登り」も長いものであつたが矣敬して中途で切りました。ア〳〵いつて山を登つて行くところが面白く書けました。

▽伊藤威さんの「犬の行水」は、見た通りをなほに寫生してある。飾らうとしないでありのまゝに書いたゞけ、何もかも、生き生きと書けてゐる。これも終りの方を切つた。

▽槇井修吉さんの「かくとう」は面白い。作が「かくとう」だけに讀む方でも力コブが入つて氣樂に讀めない。それだけに上手に書けたともいへる。

▽出石三雄君の「河口君」は太つた、らいらくな河口君を申分なく現した。

▽吉野ユキ子さんの「さかな屋」はかわいらしいやさしい作だ。

▽山崎豐さんの「鐵瓶さん」それから伊藤富士雄さんの「鳥賣り」共に上手な作だ

▽今月はあんまりいゝ作が多いので、掲載出來ないで困りました。以上に批評した作はどれも皆な、雜誌に出したいものです。で發表出來るだけを今月載せて、殘つた方は次回の候補作として尊重します。

編輯室より

▽暑い夏が來ました。編輯室で仕事をしてゐますと汗がだら〳〵出て來ます。今、私どもは漸く九月號の編輯を終へて、汗をぬぐつたところです。一册の號を終へた後の喜びは、何ともいへない程愉快です。雜誌を一册まとめるのは仲々困難な仕事ですが、それだけに、仕事を終へた後の喜びも大いわけです。

△野口先生の選評は、原稿が後れた爲めに矣號に廻りました。齋藤先生の講話評も同樣。

▽編輯室の前のアドー棚には今や房々したアドーが、一ぱいになつてゐます。このアドーの熟す頃には、炎熱の夏も去る事でせう。皆さんの御健康を祈ります。（一記者）

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

自由童謡掲載外佳作

岩谷ミヨノ（秋田）　山本　力（朝鮮）
村上　静子（千葉）　長谷川トリ（千葉）
白澤　一郎（豐橋）　金丸　正則（山梨）
森田　修二（和歌山）　岩部　雅一（香川）
佐藤　清一（香川）　多田　正雄（香川）
鳥田　幸雄（香川）　竹田八千代（東京）
横井　修吉（京都）　小川　さく（千葉）
千ヶ崎英三（山梨）　豊島　泰（不明）
大出　静子（大連）　山崎　豊（三重）
深谷　達也（福島）　伊藤　駿二（東京）
染井　重朝（三重）　伊藤　淑子（京都）
土居　要（香川）　出石　三雄（門司）
大内　力（東京）　成瀬　義博（香川）
坂井　麗子（東京）　野川　利八（東京）
馬場　治良（東京）　岩谷　貞三（秋田）
柳田　藤（東京）　小健善西良（香川）
濱田　正治（和歌山）　金丸　正則（山梨）
前田　鷹治（和歌山）　中山　新七（香川）
水上美喜惠（和歌山）　餌鶴理太郎（香川）
鍬北元太郎（埼玉）　鈴木　てる（千葉）
寄田　静夫（香川）

幼年詩掲載外佳作

柳田　英二（青森）　平井　元信（香川）
高橋京之輔（秋田）　藤川　新一（香川）
坂本　好造（埼玉）　白川　利一（千葉）
次田　香澄（東京）　白井　松枝（香川）
松本　衣子（京都）　武藤　珍子（臺灣）
齋藤　利秋（千葉）　川田　仁（香川）
中根　幹男（埼玉）　石丸　滿行（香川）
福永　ヨネ（福井）　藤塚まさ緒（埼玉）
渡邊　徹之（熊本）　高橋　德義（香川）
田邊　信靖（朝鮮）　宮崎　輝城（東京）
横田　薫（東京）　小健善西良（香川）
金丸　正則（山梨）
中山　新七（香川）
餌鶴理太郎（香川）
鈴木　てる（千葉）

綴方掲載外佳作

横井　修吉（京都）　出石　三雄（門司）
山崎　豊（三重）　伊藤富士雄（京都）
二川　秀夫（香川）　芳賀　泰吉（山形）
津邊　徹之（熊本）　大出　静子（大連）
荒川ヶメ子（山梨）　染井　朝重（三重）
山中　俊（栃木）　岡山　純義（神奈川）
栗下延太郎（京都）　武藤　珍子（臺北）
高尾　齊（愛媛）　齋藤　邦（和歌山）
木舟　貴次（兵庫）　高槻　壽（神奈川）
腰塚まさ緒（埼玉）　岩谷　貞三（秋田）
岡田　任雄（横濱）　原　雅喜雄（横濱）
河原トエ子（神奈川）　山崎　仁（栃木）
岩田　四郎（京都）　小比賀富栄（香川）
野川　利八（東京）　甘崎　靖子（東京）
渡邊　容造（不明）　石神　哲夫（鹿兒島）
森田　修二（和歌山）　中西　静夫（三重）
杉原　磐枝（香川）　五十畑豐一郎（栃木）
田村　重則（不明）　深谷　達也（福島）
佐伯　芳雄（山口）　稲葉　三枝（栃木）
小井田　梅（栃木）　金丸　正則（山梨）
倉垣　千歳（京都）　高橋　久蔵（神戸）

童話佳作

久米　敏一（水戸）　水野春三郎（東京）
土橋　力（山梨）　庄田　健男（明石）
野路丘青二（朝鮮）　雉野　鳴風（東京）
坂井　羊子（東京）　大場紡津子（福岡）
早田　孔一（和歌山）　練木　準（東京）
宍戸　功夫（朝鮮）　吉田　正三（東京）
唐笠　容夫（不明）　阿部喜三男（東京）
武藤　恒子（臺灣）　打道　柾偲（大阪）
高橋　久藏（神戸）　飯野　房子（福岡）
伊藤　直作（千葉）　伊藤　要吉（栃木）
好本　綱子（東京）　金子　武夫（東京）
鈴木　久造（栃木）　井崎　進（大連）
谷本　致雄（東京）　木村　晴夫（茨城）
吉野　紫光（神奈川）　井口　達夫（茨城）
浜本　芳泉（福井）　名和　敏夫（千葉）
柳田　赤舟（青森）　山中　俊（栃木）
金子　芳子（栃木）　岡山　純義（神奈川）
寺島貞次郎（東京）　吉野　紫光（神奈川）
西島　美二（長野）　川井　牧郎（秋田）
森田　勝美（熊本）　福山　市郎（大阪）
山川美彌子（熊本）　金子　武夫（東京）
吉村みつる（大阪）　岩谷　貞三（秋田）
稲村　謙一（鳥取）　麻植　あさ（北海道）
川口銀四郎（佐世保）　佐々木　茂（東京）
森永　萬守（東京）　原澤　正雄（京都）
福田ハツ子（神奈川）　菅谷　光治（茨城）
岡田　治郎（廣島）　夏堀謙二郎（青森）
田中　武（東京）　宮崎　輝城（東京）
宮尾　浩（臺北）　近藤　詞郎（山梨）
好本　綱子（東京）　樓　とみの（兵庫）
柄澤　清（東京）　新井　清一（埼玉）

童謡掲載外佳作

（大人篇）

小澤しげる（名古屋）　石丸　滿行（香川）
石田　松風（千葉）　小俣かよ（山梨）
名方まさる（大阪）　田村　重則（和歌山）
木浦　柴次（山口）　山崎　仁（前橋）
小池　幸（東京）　佐藤　つゆ（愛知）
渡邊　顯（東京）　松本　衣子（京都）
中島　光葉（臺北）　藤田　武雄（山梨）
松井　多門（濱松）　柳田　英二（青森）
中坂　藻舟（東京）　木村ちよめ（熊本）
森　丘たる（愛知）　中村　一二（栃木）

（小供篇）

小澤しげる（名古屋）　石丸　滿行（香川）
石田　松風（千葉）　小俣かよ（山梨）
名方まさる（大阪）　田村　重則（和歌山）
木浦　柴次（山口）　山崎　仁（前橋）
小池　幸（東京）　佐藤　つゆ（愛知）
渡邊　顯（東京）　松本　衣子（京都）
中島　光葉（臺北）　藤田　武雄（山梨）
松井　多門（濱松）　柳田　英二（青森）
中坂　藻舟（東京）　木村ちよめ（熊本）
森　丘たる（愛知）　中村　一二（栃本）

金の星新誌友名簿

衣笠　龍雄（兵庫）　阿部　武雄（廣島）
成原ヴスノ（大分）　松村　正美（石狩）
内海　道契（長崎）　上原　アイ（神奈川）
關　哲雄（京都）　都外川　淳（大阪）
眞淵　藤子（三重）　中川　健三（京都）
稻葉　廣直（東京）　大口　園子（東京）
齋藤　利治（佐賀）　柴田　義雄（山口）
一郎（臺灣）　島田　治子（東京）
（以下次號）

新らしく出た本

◇**コロンブス物語**（金の星社編）これは世界少年少女名著大系の第四篇でアメリカの發見者コロンブスの傳記を分り易く書いたもので、この本を讀めば、何人も容易に且つ興味深くこの大偉人の生涯を了解すると共に、氣高い偉人の行動から尊い幾多の教訓を學ぶに遑ひありません。事實談であるけれども充分童話的の面白さを以て人の心を捕へねば置きません。四六判一六四頁定價九十錢）

◇**ガリバー旅行記**（金の星社編）名著大系の第五篇です。傑作として誰にでも知られてゐる世界的名作を例の平明な筆で書いたもので、これを手にする人は、誰でも一氣に最後まで讀んでしまふだらうと思はれる程面白い本です。何人も一讀せねばならぬ本であることは、申すまでもありません。四六判一六〇頁　定價九十錢）

◇**ロビン・フッド物語**（金の星社編）この物語は活動寫眞になつて、我が國へも來て盛んに歡迎を受けた英國の物語でありますが、書物としてまだ廣く紹介されないものであります。仁俠の義賊に滿ちた義賊ロビン・フッドの行動は、何とも云へない痛快味の溢れたもので、少年少女の心をどれだけ喜ばすか分らない珍らしい書物です。四六判一八〇頁　定價九十錢）

◇**子守唄**（本居長世先生作曲　野口雨情先生作詩）金の星童謡曲譜第六輯です。内容は「子守唄」「雨柱」「漁坊主」「櫻と小鳥」「乙姫さま」「雛波の橋」裝幀は竹久夢二畫伯（定價八十錢　送料六錢）

◇**ペンペン鳥**（小松耕輔先生作曲　達崎龍先生作詩）金の星童謡曲譜第八輯です。この集の作者は野口雨情先生，小松耕輔先生等により最も前途を嘱目され居る新進童謡作家にして、本集には先生の近作「ペンペン鳥」「螢のお使」「仔牛」「さみだれ」「赤い小馬車」「紅殼蜻蛉」等が收められてあります。作曲はまた、ことごとく小松先生近來の快作であります。裝幀は竹久夢二畫伯が靈筆を揮はれたもの。（定價八十錢　送料六錢）

◇**雨情民謡百篇**　野口雨情先生著）この本は著者の明治三十八年以後、今日に至るまで數ある民謡の中より百篇の粹を集めたものです。所謂鄉土詩としての民謡が心行くまでこの中に唄はれてゐて、作者の力强き純情が、讀者に深い感鳴を與へればやみません。今本書中の最も知き一篇を左に紹介します。

土に物問うた
畑の土に
土が物言ふた
日向ぼつこして
ゐたと言つた。

（菊半截二二二。定價一圓四十錢、牛込區矢來町新潮社發行　發賣東京一七四二）

講演だより

沖野岩三郎

六月十四日、午後七時から東京芝二本榎の高輪教會の『花の會』へ招かれて行きました。會堂内を美しい花で一杯飾つてありました。會堂内ギッシリ一杯、可愛い子供さん達が集つて、一時間と十分の間私の話を熱心に聽いて下さいました。會の果てたあとで、役員の人達と暫く話して、美しい月影を踏んで歸つたのは、もう十一時頃でした。

六月廿八日、午後一時から、同じ芝區の明治學院大講堂で私の童話講演會がありました。會費三拾錢で參百名の入場者があつて、私は一時間と二十分話しましたが、終まで靜聽して下さいました。話の前にマンドリンの合奏や、獨唱などもありました。此の日の會費は、此度明治學院で小學兒童の夏期學校を開く費用へ寄附いたしました。

七月一日午後一時から、茨城縣稻敷郡の八原小學校で野口雨情さんと二人で講演をいたしました。森田麥秋さんが司會しました。野口さんが、童謡の歴史と自由獨唱をいたしたあとで、私は一時間のお話をいたしました。會が果て私は我孫子まで一緒に來て、そこで別れました。私は其晩成田で一泊して、翌日千葉縣の木更津へ行きました。

七月二日の午後四時から、木更津キリスト教會で童話會を開きました。開會の二時間前から詰かけて來て司會者は大まごつきでした。

會堂がギッシリ一杯で、大變成績よく閉會をしたのは午後五時過ぎでした。

午後八時から同じ教會で大人の人々百二三十名集つて、そこで二時間半のお話をいたしました。

ホシローを活躍させて下さい

ホシローは皆さんの大歡迎を受けて、毎號の誌上で面白い**ヒルム**を御覽に入れて居ります。ところが、**ホシロー**のいふ事に、

『僕も、いろ〳〵いたづらをやつたが、この頃は面白いいたづらがなくて困る、誰か教へてくれる人はないかな』

と、チョッビリしをれてゐるのです。

そこで、編輯部が**ホシロー**君に代つて、皆さんにお願ひすることにしました。どうか**ホシロー**に面白い無邪氣ないたづらを教へてやつて下さい。**ホシロー**は、皆さんが教へて下さつた中で、最も面白い、そして最も無邪氣だと思ふいたづらを種に、これから大活躍をやるさうです。

（募集要項）

一、第一回締切は八月三十一日。
一、選は金の星編輯部でします。
一、畫は、こちらで描きますから、毎號の『ホシロー』ヒルムを參考に、大體の筋書をこしらへて下さい。
一、採用の分に對しては、『金の星』を一ケ年分呈します。
一、原稿の封筒には、必ず『ホシロー、ヒルム』とお記し下さい。
一、宛名は東京市外田端三五一金の星編輯部。

讀者だより

▽一年振で再び讀者となりました。今度こそはほんたうに眞面目に童話童謠の勉强と投稿を致したいと思つてゐます。江口雄一郎、伊藤温子、白江好郎　小澤章子、土橋力諸氏の再現を　望いたします。（大阪　都外川淳）

▽初夏となりました。そしてだんだん暑くなつて來ます。しかし「金の星」は益々盛んになつてきました。眞も親友の竹村君と大課題を愛讀者にしました。又『ゴンドラ』にて和歌大募集をしますから、讀者のみなさま應募して下さい。一等に一圓二等銀メダル三等銅メダルを進呈します。締切は九月二十五日です。（埼玉縣大越局區内ゴンドラ社　腰塚まさお緒）

▽我が男子日本を出でて南米にかせぎに出るよ　（栃木　加藤要吉）

▽神野先生の『どちらが偉い？』は誠に申し分のない素晴らしいものです。未聞の傑作です。私のゐる村に冬になると鶴が來ますが、ほんとに『どちらが偉い？』てふクエッションに合ひます。（何れくはしく發表しますが）彼等が來るときには三四羽の先發隊が十月二十三日か四日かにきまつて先にきます。かへるときには別れをおしみ〳〵上空をまつてかへり、病弱なのにはつれがついて二三日おそくかへります。百羽以上ですが作物をあらした事は一度もないさうです。彼らの群には何時も前後に二羽位の見張がゐます。村人の中には策士や野心家もゐますが、村童はよほど素朴で純です。このまま進まして、鶴にまけないやうにさしたいものです。それについては、兒童の作品と一しよに今秋發表しませう。神野先生の筆、益々快く清くあらん事を。（周防八代　M・I）

▽記者樣初め諸先生は御丈夫ですか、僕が本屋へかけつけて「金の星」を見たら、僕の名が三つものつてゐたので、とび上る程よろこびました。又此のこちやまぜの物を見て下さい。僕も友達から『青い眼の人形』を見ましたが、大そうりつぱなご本です。僕も大きくなつたら、野口先生のやうな本をこさへたいと思ひます。これでさよなら。（記者諸先生によろしく。（山梨　豐島泰）

▽記者樣お變りはありませんか。暑さは次第にまして來ます。此の南國では僕等の樣な「かつぱ」は毎日水泳に行つてゐます。それから先日は美しい繪ハガキをお送り下さいましてありがたうございます。又こゝに粗末な童謠をお送り致しますからどうぞよろしく。お體お大切に。（高知の黑人より）

▽降りつづく雨の止みしを喜べば
又も降り出す雨のにくさよ
（鹿兒島　石神哲夫）

▽金の星の諸先生、田舍の一少年は先生の敎導を受け幼稚ながらも育つて行きます。今後とも宜しくお願ひします。七月號の金の星を拜見しました。野口雨情先生の『はぐれ鳥』に私は强い感銘を深く刻まれました。緋青色の海の彼方の一つの島、私の眼の前に浮かんできます。ほんとに氣持よく見ました。（神奈川　岡山純義）

▽あのいやな入梅も去つてはじめて夏氣分になりました。それからどうぞ『懸賞』をつくつて下さいませんでせうか。御返事下さい。諸先生によろしく。（東京　前田孝四郎）

▽拜啓一筆申上ます。僕は金の星を見て、このやうなまずい童話（つんぼと盲目）を投書いたしましたからどうかよろしくお願ひいたします。齋藤先生より見れば僕は一本の毛にもならぬ程のまずい文をつくつたのですが、まずいとあきらめずどうか入選させて下さい。齋藤先生が見てあまりにまずければ、仕方がないからあきらめます。どうか入選させて下さいお願ひです。（無名氏）

▽だんだん暑くなつて來ました。皆樣お變りありませんか。お蔭に私も無事暮してゐます。美しい金の星のエハガキお送り下さいましてありがたうございました。お禮申上げます。金の星の八月號は私達讀者にアッと云はせる樣なものを出して下さい。記者樣にお願ひ申上げます。（愛知　岡本正二）

▽謹啓、美しい繪ハガキありがたうございました。厚くお禮申し上げます。金の星も今日着手いたしました。今月號にはゲエラール中尉の冒險譚がありませんでしたから、がつかりしましたが、大變いゝ作のあつたことを嬉しく思ひます。森川先生の乞食の騎士が最も優れた作だと思ひます。全國の兒童は勿論青二才も一國の首相加藤高明にもはた又百二十歳まで生きないで死んだ大隈侯にも是非讀ましてやりたいものです。私は何遍も〳〵繰り返して讀みました。二度目には涙が流れました。發行日も淺いのにかくも發展した金の星に絶大の敬意を拂ふと同時に之れ迄に、築き上げて下さつた記者樣、今後共一層御奮闘あらんことをお願ひいたします。（朝鮮　穴戸功夫）

▽私は今月から金の星愛讀者となりました。記者樣どうぞこれからよろしく。横濱の佐藤よしみ君、愛媛の仙波しげる君、私は童話誌で君達を知つてゐます。私はこれから金の星に奮闘します。大阪の豐田次雄君、私は『お月さん』で君の童謠に敬服してゐます。では諸君？　失敬？　（大阪　吉村光雄）

▽風止みて餘りに淋し冬木立
（栃木　大木仁平）

▽久しい前からの讀者ではありましたけれど、この可愛いお友達にもつと親しくして戴く爲に七月號からの誌友に加へて戴く事が出來ました事が、私には大變嬉しく思はれてなりません。そして美しい繪葉書を有難う存じました。前に一度投稿しましたけれど誌友としてはこれが始めてです。宜しく御指導下さい。早々からこんな要求がましい事を書くのも變ですが、出來る事ならば一度地方々々に分つた全誌友名簿を作つて下さるわけには參りますまいか。（高知　羽田敬和）

▽記者樣、すみれの二號を送りました。御覽下さいませ。金の星の誌友の皆樣、今度白露を『詩童謠短歌俳句』の雜誌『すみれ』と改名しました。何卒お玉稿をお惠み下さいませ。會費は一ヶ月分送料共七錢です。（東京府下蒲戸町二四〇〇、十號所方長谷川治郎）

▽本誌がまで〳〵氣持よく成長してゆくのが嬉しくてたまらない。しかし外觀體裁よりも内容充實が大切なのだ。それにはどうしても諸先生の奮闘及我々投書家の肥料が大切である。我々の肥料それは何か傑作の寄稿それが第一なのだ。寄稿家諸君、大いに努力せられんことを祈つてやまない。
（塩北　野村詩樓）

▽糸の樣な雨が降りつゞいてゐます。何だかクサ〳〵して頭が鉛をつめたやうに重い。こんな時友達でも……と一人考へてゐた處へ御社からの『青い眼の人形』と金の星七月號が届きました。それに美しい繪はがきまで添へて――。僕はすつきりした表紙に見とれて微笑しないわけにはゆきませんでした。子供がよろこんで聞く時の姿を想ひ浮べて――。先生方の御健康と御奮闘を祈ります。（新潟　渡邊直一）

▽暑い夏が近づいて來ました。諸先生はさだめし御元氣のことゝ思ひます。また美くしい繪葉書を御送り下さいまして有難うございます。先日お送り下された野口先生の『青い眼の人形』桃色の絹表紙に露谷先生の裝幀挿畫寺内先生の口繪、武井先生の面白い挿畫、今までにない美しい、そして立派な童謠集です。まことに嬉しく讀み唄ひました。『青い眼の人形』のやうに若山牧水先生の童謠號も出し下さい。右二つお願ひいたします。（東京　寺島貞次郎）

▽先日は美しい繪葉書をお送り下さいましてありがたうございました。厚く御禮申上げます。金の星は毎月おもしろく拜見してゐります。七月號の誌上に、私の童謠をお載せ下さいましてありがたう存じました。うれしく御禮申上ます。先達作りました童話はいかがですか。お送りしてみましたから、御覽の程願ひ上げます。時候不順の折柄貴の先生方御自愛のほどを祈ります。（福岡　大場悅子）

▽蓼ぶちて樂しき夜の我家かな
（栃木　鈴木久造）

▽先日始めて「金の星」を買つて讀みました。大變面白かつたので兒童に話してやりますと兒童はもう大變な喜びでありました。それでこの後は「金の星」の愛讀者になる事に極めました。私は「金の星」によつて童話の味と云ふものを味ひ度いと存じます。（福島縣　T・M）

金の星社 出版だより

（九月號）

『青い眼の人形』に雨情先生の署名を乞ひました

野口雨情先生の童謡集『青い眼の人形』は著者の最も自信ある童謡を八十篇も集めてあるといふ爲めと、裝幀と挿畫に蕗谷虹兒、寺内萬治郎、武井武雄の三大畫伯の傑作を集めた極美な本であるといふためとで、非常な好評を受けてゐます。童謡界に最も大きな期待を以て迎へられたのが本書であります。

で發行部數の如きも、月々に一版を重ねて遂に第三版を發行するに至りました。

そこで、この際、特に雨情先生にお願ひして、『金の星』の愛讀者に限り五百の方に對しては、著者の署名を附してお送りする事にいたしました。幸にして、雨情先生の快諾を得ましたので、『金の星』愛讀者と同時を御讀みになりたい方は、この際至急に御申込みになつたがいゝと存じます。またとない好機會です。

名著大系の第六編

『ロビン・フッド物語』發行!!

シャーウッドの森の痛快兒ロビン・フッドの物語りが遂に發行になりました。日本にはめづらしい出版です。活動寫眞でドーグラスフエアバンクスがやつたので、大抵の少年少女諸君は御存知でせうしかし、活動寫眞の『ロビンフッド』はドーグラスが自分で勝手に筋を變へたり、そして、又ホンの一部分だけしかやりませんでしたが、此の名著大系の『ロビン・フッド物語』はもつと長いもので、ロビン・フッドの生ひ立ちから、最後に惡い尼のために修道院で毒殺されて死ぬまでみ書いてあります。殊に最後の毒殺される場面などは、どんな人でも恐らく涙なしには、讀めない程深い感動を與へられます。八月の十日頃に出版になります。

本居長世先生作曲

『子守唄』發行!!

『金の星童謡曲譜集』の第六輯である本書は、竹久夢二畫伯の美しい裝幀に飾られて、いよ〳〵發行になりました。

愛讀者通信

▽野口雨情氏の童謡集『青い眼の人形』何と秀れた書でございませう。『青い眼の人形』を初めとして『子守唄』『柱くゞり』『佐渡が島』等、氏最近の傑作童謡が收められてゐる上、虹兒氏の裝幀、萬治郎氏の口繪、武雄氏の挿繪たまらなく美くしく畫がかれてゐます。この書が私達の恩師野口氏の著作であると思へば實に泪ぐましい程の喜びを感じます（大阪　都外川淳）

▽武井先生の『アウ太郎鍛冶屋』が本日着きました。包みが堅牢なのでどこも破損はありませんでした　武井先生の裝幀口繪挿畫共に他には全く見られぬものです。今お晰の卵を讀みました。面白くて自然に微笑まれました。武井先生の童話は畫以上に面白いと思ひました。ふと先生はこゝによつたらお晰の卵からお生れになつたんではないかしらと失禮ながら私は思ひました『青い目の人形』童謡十講』も發行次第御送附下さい。（愛知　岡本正二）

名著大系の第七編

『アラビヤン・ナイト』發行!!

いつ讀んでも面白いのは『アラビヤン・ナイト』です。何百年經つても無くならず、愈々尊ばれてゐる話だけに、誰でも皆な讀んで置く値打ちのある面白い〳〵物語りです。これも八月始に發行になりますから、是非お讀み下さい。暑中休暇の讀物として絶好です。

目下發行準備中の本

金の星社が今發行準備中の本はなか〳〵澤山にありますが、中で、もう間もなく出る筈のものを二三申上げますと、小島政二郎先生の長篇『狼少年』は、もう殆ど出來るばかりになつてゐます。印刷して本にすればいゝばかりになつてゐますが、都合上、この本は九月の中頃に發行の豫定になつてゐます。裝幀は寺内萬治郎先生が、苦心を重ねられましたので、スバラしく立派なものになります。

神野岩三郎先生の『山六爺さん』もその内に發行になります。もつと早く出來る筈の本でしたが、今度岡本歸一先生が澤山の影畫の挿畫と美しい裝幀とをして下さつて、神野先生と共著で出される事になつたので、それで少し發行が後れました。しかし、それだけいよ〳〵出來上つて、世間に出る時は、さぞ皆さんから大歡迎を受けるに相違ないと信じます。

此の外に童話讀本の第二編として、餘程以前に出る筈のところが大震災のために中止になつてゐた『金の鈎瓶』も出る筈で、目下順備中です。

名著大系の第八編

ギリシヤ神話 オデッセー物語（近刊）

名著大系の第九編

ウイリヤム・テル物語（近刊）

小松耕輔先生作曲

『ペンペン鳥』發行!!

新進童謡作家逢崎龍先生の作謡になり、竹久夢二畫伯の裝幀になる『金の星童謡曲譜集』の第八輯です。謡も曲も、新味に滿ちた面白いもの揃ひですから、大歡迎を受けてゐます。

『金の星』の合本

暑中休暇の讀物として最も適當

『金の星』の合本は、そのまゝ一大童話集なので、各地の圖書館から非常に澤山の申込みを受けるばかりでなく、愛讀者の方々からも書棚に飾つて、繰返して讀んで樂みたいと澤山に申込んでお出でになります。で、後から〳〵こしらへてありますが、次第に殘り少くなつて行きます。殊に暑中休暇のやうな時には、普通の單行本ではぢきに讀んでしまひますから、讀みでのある合本など最も好評です。

第一輯（第一號ヨリ第五卷ヨリ）
第二輯（同第六號マデ）
第三輯（同第七號ヨリ第十一號マデ）
第四輯（同第六卷ヨリ第六號マデ）

（絶版）

金壹圓八拾錢　送料金壹圓十五錢
金壹圓十五拾錢　送料金壹圓十五錢

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕題目は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は八月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は十月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ケ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し義年錢は特別錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔送金の注意〕
▽御註文は必ず前金で御拂込みください
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割增しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははっきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年八月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年九月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人　東京市外田端三百五十一番地　齋藤佐次郎
印刷人　東京市小石川久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川久堅町百八番地　株式會社博文館印刷所
發行所　東京市外田端三百五十一番地　金の星社
振替口座東京五九五九六番　電話小石川五三八七番

沖野岩三郎先生著○蕗谷虹兒先生裝幀並ニ挿畫

長編
森の祈り

四六判箱入美本
定價金壹圓五拾錢
送料金拾五錢

愈出來

本書は沖野氏が生が最も自信を以て世に問ふ長篇傑作であります。少年少女の讀物に對して、一大抱負を持つてゐる著者が、童話といふよりは寧ろ小説として、あらゆる家庭に、また學校圖書館に、本書を備へて廣く讀んでもらひたい希望から、數ヶ月の尊い犧牲を拂つて完成した作であります。全篇悉く清い涙と尊い教訓とに滿ちた物語りであつて、著者の敬虔な信仰は全篇にみなぎつて、讀者に偉大なる感銘を與へずには措かぬでせう。

【本編の梗概】紀州のある村に二人の兄妹があつた。兄妹は、祖父の三六爺さんと母親とで淋しく山の中に暮してゐた。父親は行方不明になつたまゝ未だ歸つて來ない。一家はごく貧しい暮しをしてゐたので、兄の時丸はどうかして家の手助けをしたいと思ひ、樵夫の仕事を習ひに山へ行くが、大負傷をして歸つて來る。時丸は足を折つてしまつたのである。それを治す爲めに、一家は一層貧乏になる。しかも、孫を思ふことの厚い三六爺さんは、家を賣つても孫達に勉强させたいと途に先祖傳來の家を賣つて了ふ。兄妹は、それを學費として東京へ行つて苦學する。（以下略す）

▽父戀しを讀まれた方は是非本編を御覽下さい△

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番

武井武雄先生著並畫・四六判箱入頗る美本・定價金壹圓六拾錢・本文二度刷三百頁・送料金十五錢

繪入童話集 ブウ太郎鍛冶屋

第三版

（目次）

ブウ太郎鍛冶屋
蜂の貸間
竹の着物
化けマンドリン
陸軍大將
お嚏の卵
流れ星
眼玉
朽ちの花園
不世間話
又取つたよう靴
木魂
其他數篇

武井武雄先生の最初の繪入童話集『ブウ太郎鍛冶屋』は果せる哉、熱狂的大歡迎を受け、出版後數日ならずして初版全部を賣り盡くし忽ち再版を發行するに至りました。

本書を手にした方は、先づ裝幀の獨特の美しさに驚かれる事でせう。箱も表紙も五度刷の武井先生お得意の畫を以て飾られ、口繪には二枚の三色版があり　本文は全部二度刷の優雅極りなきものです。「こんなせいたくな本はない」と本屋さんが評したのも尤もです。しかも定價が頗る安價であることは、金の星社の誇りとするところです。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

童謡集 青い眼の人形

野口雨情先生著・裝幀 蕗谷虹兒畫伯　挿畫 寺内萬治郎畫伯　武井武雄畫伯

（三版）總絹表紙箱入美本、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五錢

雨情先生の童謡中特に傑作のみ八十篇を撰んで一冊となしたもの。しかも、目もさめるばかり美しい裝幀に飾られた本書は、童謡界最初の模範的出版であります。賣切れぬ内御購讀下さい。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

金の星童謡曲譜集

第一輯　人買船
本居長世作曲・野口雨情作謠
（曲目）人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

第二輯　一つお星さん
本居長世作曲・野口雨情作謠
（曲目）一つお星さん、七つの子、鼬と雀、鷄さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯　青い空
本居長世作曲・野口雨情作謠
（曲目）青い空、燕、雨夜の傘、でん〳〵蟲、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯　赤い靴
本居長世作曲・野口雨情作謠
（曲目）赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子

第五輯　夢とり
小松耕輔作曲・野口雨情作謠
（曲目）夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯　子守唄
本居長世作曲・野口雨情作謠
（曲目）子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、惡坊主、藪の下道

東田　東下　京端　京目　市三　黒四　外一　市五　外八六
金の星社　振替　電話　東京　小石　川五　九五　五九　六八　番七
白眉出版社　振替　東京　四五　九八　五一　番

本居長世作曲・野口雨情作謠　寺内萬治郎裝幀

お人形さんの夢

（曲目）お人形さんの夢、赤い櫻んぼ、啼いた啼いた雉子、藪の下道、夢を見る人形、草遊び。

〔金の星童謡曲譜第七輯〕（最新刊）定價金八拾錢　送料六錢

小松耕輔作曲・達崎　龍作謠・竹久夢二裝幀

ペンペン鳥

（曲目）ペンペン鳥、螢のお使、仔牛、赤い小馬車、紅殼蜻蛉、さみだれ。

〔金の星童謡曲譜第八輯〕（最新刊）定價金八拾錢　送料六錢

東田　東下　京端　京目　市三　黒四　外一　市五　外八六
金の星社　振替　電話　東京　小石　川五　九五　五九　六八　番七
白眉出版社　振替　東京　四五　九八　五一　番

38

立国会
3. 26
書館

ライオン水歯磨

ああ
いい心持だなア、
せいせいしたよ。
僕は今まで、
ライオンみがきが
こんなに好いものだとは思はなかつた。